

お お え や ま
大 枝 山 古 墳 群

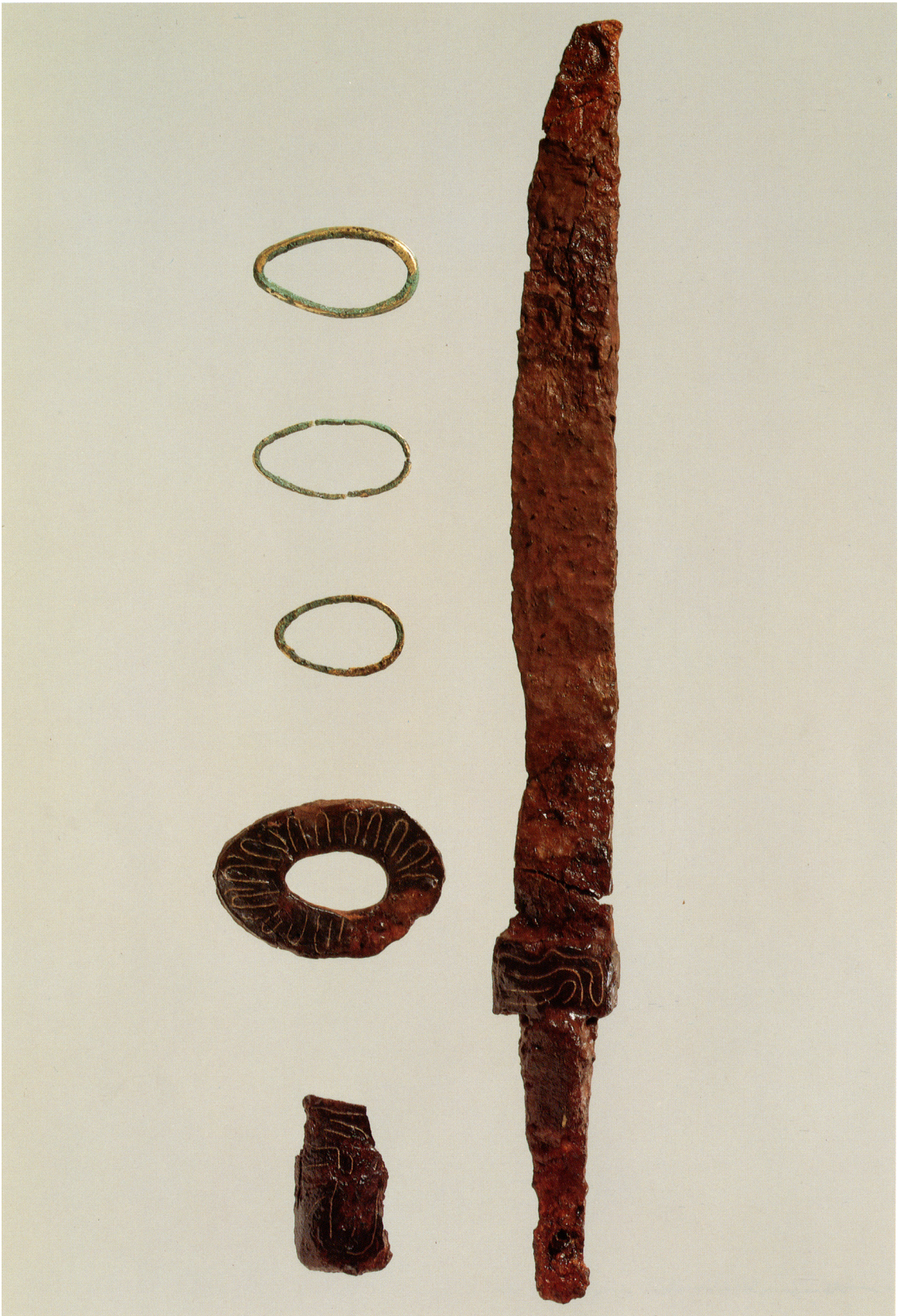
京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊

1 9 8 9

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



22号墳全景（西から）



銀象嵌鉄刀（25号墳）

序

京都市の遺跡地図をひろげると、古墳群は西山から北山へ、北山から東山へ各所にわたっていることを知ることができる。中でも西で目立つのが大枝山古墳群である。今の国道9号線、昔の山陰道に沿う地帯にあり、やや奥まった位置にある。このあたりを占めて西武都市開発株式会社（現、株式会社西洋環境開発）は宅地造成される計画を示された。京都市文化観光局はその調査と、残りの良い古墳については保存を申し入れたところ、快諾されたので、調査と指導を当（財）京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

研究所で当時の調査部長であった田辺昭三氏（現、京都芸術短期大学教授）は専心このことにあたり、昭和55年（1980）5月の調査開始以来、継続的に進め、昭和58年（1983）、昭和62年（1987）には若干の補足を加えながら現地の作業を終え、保存のための整備、特に、開発地域内に古墳を主体にした公園を建設されることになった。このようにこの古墳群は建造されたときの位置と形態を永遠にとどめることができた。それは調査によって「京都の歴史」を、特に8、9世紀の平安京造営以前における歴史を明らかにすることに大きな評価が与えられる資料になったと共に、それは桂川地域の文化を語るものであって、この川に育まれた文化こそ、山城地域の先進性が指摘されるのである。平城の都が山城へうつされるにあたり、この桂川の持っている文化が重要視され、それはまず長岡京になったことを語るものであり、それまでに、この地の文化性にいち早く着目した渡来人があったことを裏付けるものである。このような成果をあげたことは、調査にあたって指導した京都市文化観光局文化財保護課、並びに京都市埋蔵文化財調査センター、さらに株式会社西洋環境開発の絶大なる支援によるところが大きく、合わせてこの調査に外部からのご教示があったことに厚くお礼申し上げるものである。

1989年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

例 言

- 1 本書は京都市西京区御陵大枝山・御陵峰ヶ堂に所在する大枝山古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は株式会社西洋環境開発（社名は1971年12月末日までは西武化学工業株式会社、1985年12月末日までは西武都市開発株式会社と称した。なお社名はすべて当記載事項に係る時点のものを使用した）が施工する桂坂住宅地内古墳公園の整備に伴う調査である。
- 3 調査期間は以下のとおりである。
第1次調査 昭和55年（1980）5月13日～同年12月28日
第2次調査 昭和58年（1983）9月16日～昭和59年（1984）1月24日
第3次調査 昭和62年（1987）2月27日～同年4月4日
- 4 本書で使用した方位・座標は、平面直角座標系VIによる。また、図中の水準高はT.P.を使用した。
- 5 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て、京都市都市計画基本図（1:2,500、御陵）を調整したものである。
- 6 本書では図面の縮尺を以下のように統一した。
墳丘 1:200、墳丘断面 1:100、石室・葺石 1:80、土器 1:4、金属製品 1:2
- 7 本書では遺物番号を各古墳ごとに付け、本文・出土位置図・写真・実測図に共通して用いた。
- 8 本書で使用した古墳番号は、『嵯峨野の古墳時代』（京都大学考古学研究会 1971）による。
- 9 本書の執筆分担は以下のとおりである。
磯部 勝 第1章2 測量の方法
上村和直 第1章（測量を除く）、第2章2、第4章、第5章2～4
丸川義広 第2章1・3、第3章、第5章1・4、付章
田辺昭三 終章
- 10 写真撮影は遺構の一部を除き、牛嶋 茂、村井伸也が担当した。
- 11 本書は田辺昭三の指導のもとに、上村・丸川が編集を担当した。

本文目次

第1章 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査方法	2
3 調査経過	5
第2章 位置と環境	9
1 地理的環境	9
2 歴史的環境	11
3 これまでの調査	16
第3章 古墳群の調査	19
1 古墳群の概要	19
2 古墳群の発掘調査	22
3 保存古墳の調査	37
第4章 出土遺物	41
1 土器類	41
2 金属製品	45
第5章 考察	46
1 墳丘・石室の検討	46
2 古墳群の構成と動向	56
3 出土遺物の検討	60
4 古墳群の性格	65
終章 発掘調査の成果と課題	82
付章 横穴式石室平面形態の分析	85

図 版 目 次

巻頭図版 1	22 号墳全景（西から）
巻頭図版 2	銀象嵌鉄刀
図版 1 遺跡	1 古墳群全景（南西から） 2 古墳群全景（南から）
図版 2 遺跡	1 4 号墳全景（手前は 5 号墳、南西から） 2 4 号墳全景（南から）
図版 3 遺跡	1 4 号墳玄室（南から） 2 4 号墳玄室遺物出土状況（北から） 3 4 号墳石室基底石全景（南から）
図版 4 遺跡	1 5 号墳全景（南から） 2 5 号墳石室前面（南から）
図版 5 遺跡	1 5 号墳石室全景（北から） 2 5 号墳羨道遺物出土状況（北から） 3 5 号墳石室基底石全景（南から）
図版 6 遺跡	1 14 号墳全景（南から） 2 14 号墳墳丘東面の葺石（東から）
図版 7 遺跡	1 14 号墳全景（北東から） 2 14 号墳玄室（南から）
図版 8 遺跡	1 14 号墳羨道（北から） 2 14 号墳玄室遺物出土状況（南西から） 3 14 号墳石室基底石全景（南から）
図版 9 遺跡	1 21 号墳全景（南から） 2 21 号墳石室前面（南東から）
図版 10 遺跡	1 21 号墳石室全景（南東から） 2 21 号墳羨道遺物出土状況（南東から） 3 21 号墳羨道床面（北西から）

- | | | | |
|------|----|---|-----------------------|
| 図版11 | 遺跡 | 1 | 22号墳全景（西から） |
| | | 2 | 22号墳全景（南から） |
| 図版12 | 遺跡 | 1 | 22号墳玄室（南から） |
| | | 2 | 22号墳東袖石付近遺物出土状況（南西から） |
| 図版13 | 遺跡 | 1 | 22号墳全景（封土除去後、南東から） |
| | | 2 | 22号墳墳丘前部遺物出土状況（西から） |
| | | 3 | 22号墳石室基底石全景（南から） |
| 図版14 | 遺跡 | 1 | 23号墳全景（南から） |
| | | 2 | 23号墳玄室（南から） |
| 図版15 | 遺跡 | 1 | 23号墳羨道（北から） |
| | | 2 | 23号墳石室基底石全景（南から） |
| | | 3 | 23号墳石室掘形全景（南から） |
| 図版16 | 遺跡 | 1 | 25号墳全景（南東から） |
| | | 2 | 25号墳閉塞石（西から） |
| 図版17 | 遺跡 | | 25号墳石室全景（南東から） |
| 図版18 | 遺跡 | 1 | 25号墳玄室遺物出土状況（北から） |
| | | 2 | 25号墳羨道遺物出土状況（東から） |
| | | 3 | 25号墳石室基底石全景（南東から） |
| 図版19 | 遺跡 | 1 | 26号墳全景（南から） |
| | | 2 | 26号墳石室全景（東から） |
| 図版20 | 遺跡 | 1 | 1号墳全景（南東から） |
| | | 2 | 6号墳全景（南から） |
| 図版21 | 遺跡 | 1 | 7号墳全景（南から） |
| | | 2 | 8～11号墳全景（北西から） |
| 図版22 | 遺跡 | 1 | 12号墳全景（東から） |
| | | 2 | 16号墳全景（東から） |
| 図版23 | 遺跡 | 1 | 15号墳全景（南西から） |
| | | 2 | 15号墳玄室（南西から） |
| | | 3 | 15号墳玄室天井石（北東から） |

- 図版24 遺跡 1 18号墳全景(南東から)
2 18号墳玄室(南東から)
3 18号墳羨道(北西から)
- 図版25 遺跡 1 20号墳全景(北西から)
2 20号墳玄室(南東から)
- 図版26 遺物 土器類(4号墳)
- 図版27 遺物 土器類(4・14号墳)
- 図版28 遺物 土器類(5号墳)
- 図版29 遺物 土器類(21号墳)
- 図版30 遺物 土器類(22号墳)
- 図版31 遺物 土器類(22号墳)
- 図版32 遺物 土器類(22号墳)
- 図版33 遺物 土器類(23号墳)
- 図版34 遺物 土器類(25号墳)
- 図版35 遺物 土器類(25号墳)
- 図版36 遺物 土器類(25・26号墳)
- 図版37 遺物 須恵器杯底部・蓋天井部
- 図版38 遺物 金属製品(5・14・21・22・25号墳)
- 図版39 遺物 金属製品(4・14・21・22・25号墳)
- 図版40 遺跡 4・5号墳墳丘測量図(1:200)
- 図版41 遺跡 4・5号墳基底面測量図(1:200)
- 図版42 遺跡 上 14号墳墳丘測量図(1:200)
下 14号墳基底面測量図(1:200)
- 図版43 遺跡 22号墳墳丘測量図(1:200)
- 図版44 遺跡 22号墳基底面測量図(1:200)
- 図版45 遺跡 上 23号墳墳丘測量図(1:200)
下 23号墳基底面測量図(1:200)
- 図版46 遺跡 上 25号墳墳丘測量図(1:200)
下 25号墳基底面測量図(1:200)

- 図版47 遺跡 上 26号墳墳丘測量図 (1:200)
下 26号墳石室実測図 (1:80)
- 図版48 遺跡 4号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版49 遺跡 5号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版50 遺跡 14号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版51 遺跡 21号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版52 遺跡 22号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版53 遺跡 23号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版54 遺跡 左 24号墳墳丘断面図 (1:100)
右 26号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版55 遺跡 25号墳墳丘断面図 (1:100)
- 図版56 遺跡 14号墳墳丘・葺石実測図 (1:80)
- 図版57 遺跡 22号墳墳丘・葺石実測図 (1:80)
- 図版58 遺跡 4号墳石室実測図 (1:80)
- 図版59 遺跡 5号墳石室実測図 (1:80)
- 図版60 遺跡 14号墳石室実測図 (1:80)
- 図版61 遺跡 21号墳石室実測図 (1:80)
- 図版62 遺跡 22号墳石室実測図 (1:80)
- 図版63 遺跡 23号墳石室実測図 (1:80)
- 図版64 遺跡 25号墳石室実測図 (1:80)
- 図版65 遺跡 15号墳石室実測図 (1:80)
- 図版66 遺跡 18号墳石室実測図 (1:80)
- 図版67 遺跡 20号墳石室実測図 (1:80)
- 図版68 遺跡 4号墳石室外面実測図 (1:80)
- 図版69 遺跡 14号墳石室外面実測図 (1:80)
- 図版70 遺跡 22号墳石室外面実測図 (1:80)
- 図版71 遺跡 左 4号墳基底石平面図 (1:80)
右 5号墳基底石平面図 (1:80)
- 図版72 遺跡 左 14号墳基底石平面図 (1:80)
右 22号墳基底石平面図 (1:80)

- 図版73 遺跡 左 23号墳基底石平面図 (1:80)
右 25号墳基底石平面図 (1:80)
- 図版74 遺物 土器類 (4・14号墳)
- 図版75 遺物 土器類 (5・21号墳)
- 図版76 遺物 土器類 (22号墳)
- 図版77 遺物 土器類 (22・25号墳)
- 図版78 遺物 土器類 (25号墳)
- 図版79 遺物 土器類 (23・24・26号墳・福西古墳群)
- 図版80 遺物 金属製品 (5・21・25号墳)
- 図版81 遺物 金属製品 (4・14・21・22・25号墳)
- 図版82 遺跡 古墳群測量図 (1:800)

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図 (1:200,000 『京都府管内図』による)	1
第2図	図根点展開図 (1:2,000)	3
第3図	墳丘区分概念図	5
第4図	地形分類図 (1:50,000、『土地分類基本調査』1972年による)	10
第5図	周辺遺跡分布図 (1:40,000 古墳時代)	12
第6図	古墳分布図 (1:7,500)	19
第7図	4号墳遺物出土位置図 (1:60)	23
第8図	5号墳遺物出土位置図 (1:60)	25
第9図	閉塞前面の土器出土状況 (1:20)	25
第10図	14号墳遺物出土位置図 (1:60)	27
第11図	21号墳遺物出土位置図 (1:60)	29
第12図	22号墳遺物出土位置図 (1:60)	31
第13図	23号墳遺物出土位置図 (1:60)	33
第14図	25号墳遺物出土位置図 (1:60)	35
第15図	須恵器杯・蓋調整手法	41
第16図	22号墳葺石断面図 (1:30)	49
第17図	石室平面比較図 (1:60)	50・51
第18図	墳丘と石室の位置関係 (1:400)	52
第19図	墳丘・石室位置比較図	53
第20図	4号墳焼土壙実測図 (1:80)	56
第21図	小支群位置図 (1:2,500)	58
第22図	洛西の古道と中・後期古墳	66
第23図	石室平面図集成1 (1:150 嵯峨野地域1)	86
第24図	石室平面図集成2 (1:150 嵯峨野地域2)	87
第25図	石室平面図集成3 (1:150 桂川右岸地域1)	88
第26図	石室平面図集成4 (1:150 桂川右岸地域2)	89
第27図	石室平面図集成5 (1:150 伏見・山科地域1)	90
第28図	石室の主軸方向図 (真北)	91

表 目 次

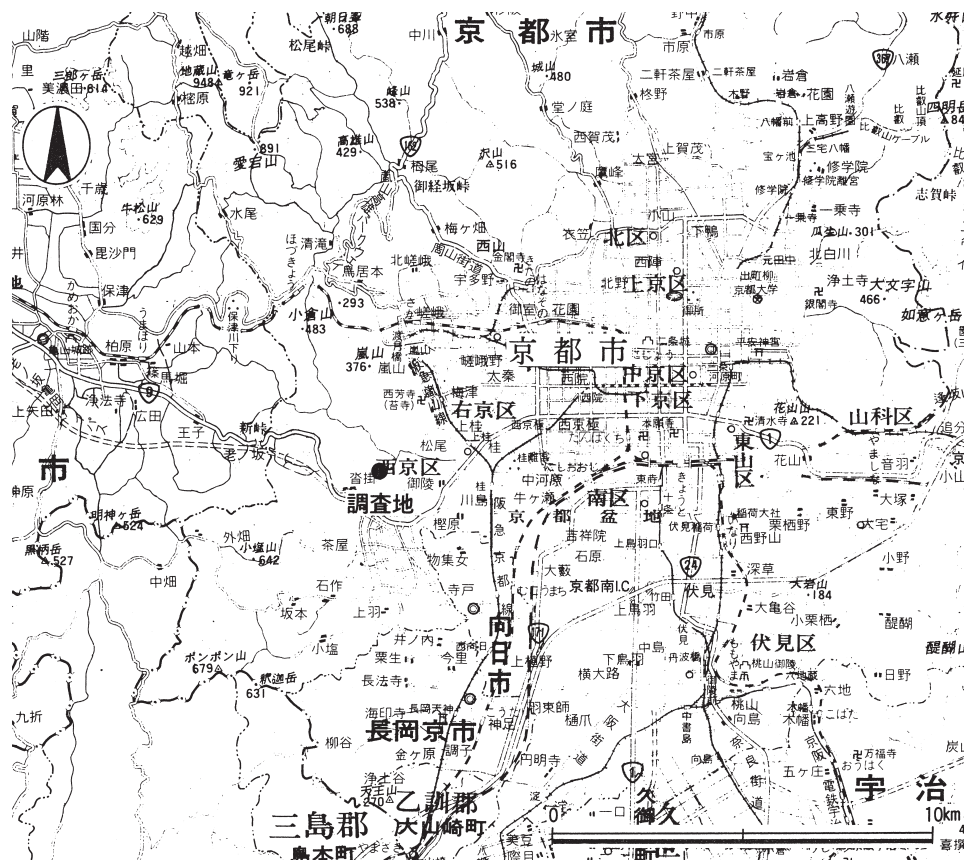
第1表	発掘調査工程表	4
第2表	調査進行表	6
第3表	周辺遺跡一覧表（古墳時代）	13
第4表	古墳一覧表	20・21
第5表	須恵器杯・蓋法量表	42
第6表	出土遺物一覧表（器形と出土位置）	43
第7表	（推定）古墳築造工程表	46
第8表	墳丘規模比較表	47
第9表	墳丘基底面傾斜角度表	48
第10表	持ち送り角度表	54
第11表	小支群一覧表	59
第12表	須恵器杯・蓋出土一覧表	61
第13表	京都府下出土装飾須恵器一覧表	63
第14表	遺物観察表	73
第15表	玄室の規模比較表	92
第16表	横穴式石室一覧表	98

第1章 発掘調査の経緯

1 調査に至る経緯

大枝山古墳群は京都市の西郊、西山の丘陵部に位置する古墳時代後期の群集墳である。古墳群の所在する丘陵一帯は、京都市街地中心部から離れた位置にあり、近年までよくその旧状をとどめ、古墳の保存状態も良好であった。また、この古墳群の存在は明治年間から知られており、分布調査や石室実測が行われ、内容の明らかな群集墳として京都市内でも著名な存在であった。

ところが、昭和42年(1967)頃に西武化学工業株式会社が当古墳群を含む丘陵一帯に住宅地建設を計画した。このため、同年から文化庁記念物課・京都府教育庁指導部文化財保護課と西武化学工業株式会社との間で協議を開始した。また昭和46年(1971)には京都市



第1図 調査地位置図(『京都府管内図』による)(1:200,000)

2 調査方法

文化観光局に文化財保護課が設置されたので、以後は同課と協議を行った。その結果、古墳群中心部は公園として保存できるが、周辺古墳は保存が困難であるとの結論に達した。その後、京都市文化観光局文化財保護課・財団法人京都市埋蔵文化財研究所と西武都市開発株式会社の間で協議を重ね、昭和54年(1979)に京都市文化観光局文化財保護課は西武都市開発株式会社に対し、古墳群全体の測量及び石室実測と、保存できない古墳の発掘調査についての指導を行った。さらに発掘調査の結果、石室残存状態が良好なものについては、石室を移築し復原することを申し入れた。これを受け西武都市開発株式会社は、昭和55年(1980)に財団法人京都市埋蔵文化財研究所に古墳群の調査と資料整理を委託した。

発掘調査は昭和55年(1980)5月から12月までとし、石室移築のための石材運搬作業は、事業地内の道路が整備された後に実施することとなった。

2 調査方法

今回の調査では、古墳群全域が調査対象であることや、発掘調査を予定した古墳は全面調査が実施できる等の諸条件があり、これを踏まえて以下のように調査目標を定めた。

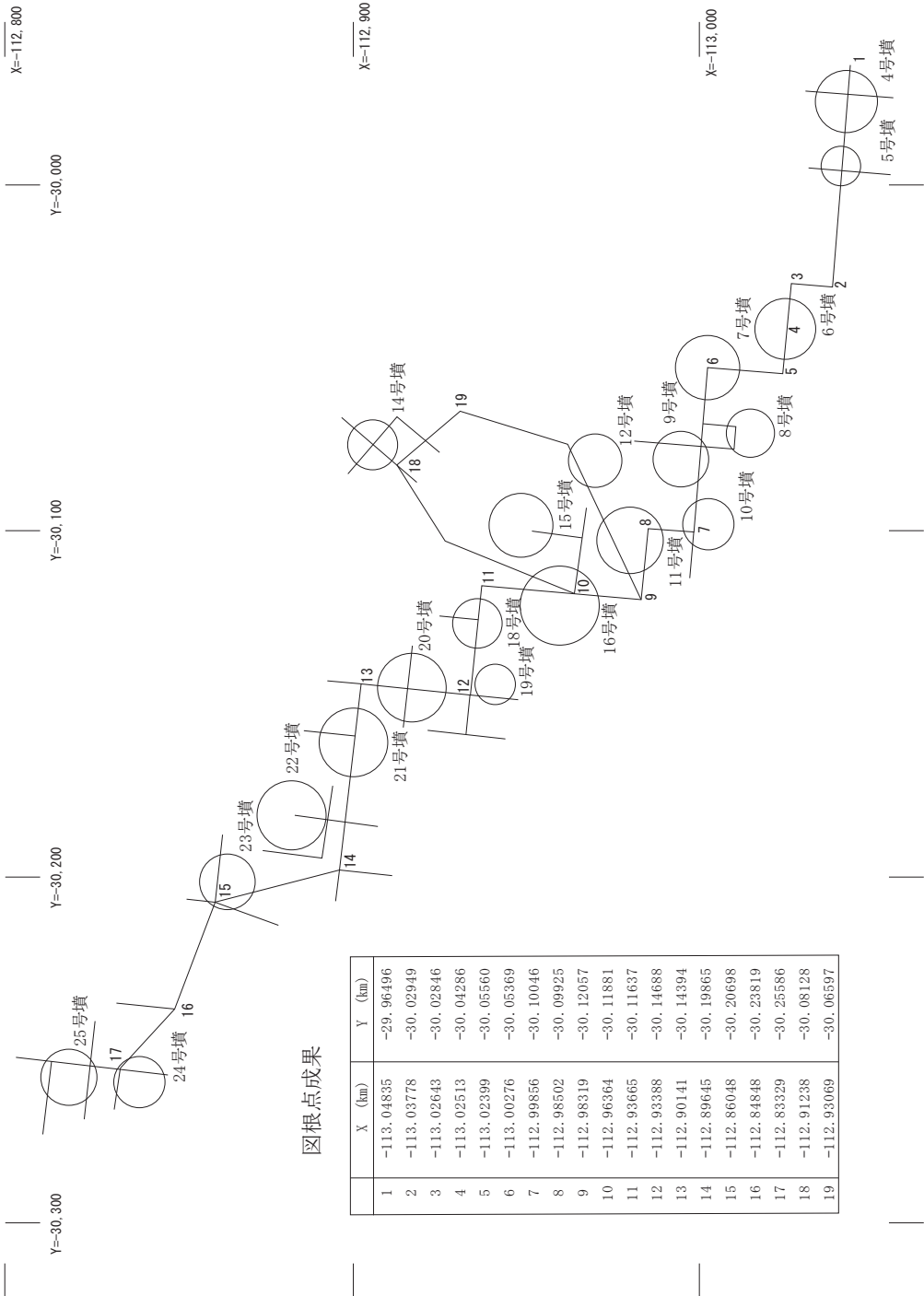
- 1 各古墳の墳丘・石室の形状並びに構造を明らかにし、古墳築造方法を具体的に解明すること。
- 2 古墳群全体の群構造を明らかにし、他の古墳群との比較を通して古墳群の特徴や性格を解明すること。

測量の方法 発掘調査に先立ち、古墳群を一体として捉え、かつ各古墳の位置関係と古墳群の立地条件を把握するため、古墳群全域の測量を実施した。

測量の方法は以下の通りである。まず、4号墳の石室主軸を軸線とし、直角移動により図根点を19箇所設定し、これをトラバース路線とした。この図根点から墳丘上や周辺地に補助点を設置した。次に、図根点のいくつかを、西武都市開発株式会社が設置している基準点に取り付け、全図根点の座標を平面直角座標系VIの値に変換した。その後、各測点から平板測量を実施した。

平板測量は各図根点及び補助点を用いて実施した。古墳の墳丘測量は縮尺50分の1、10cmコンター、周辺地形の測量は図面縮尺100分の1、20cmコンターで行った。

発掘調査の方法 発掘調査に際しては古墳及びその周辺地をできるだけ広範囲に調査することに努めた。調査は古墳築造過程とまったく逆の工程で進めることを原則とし、四分発掘法により全面調査を実施した。調査は4段階に分けて実施し、その工程は第1表に示



第2図 図根点展開図(1:2,000)

2 調査方法

第1表 発掘調査工程表



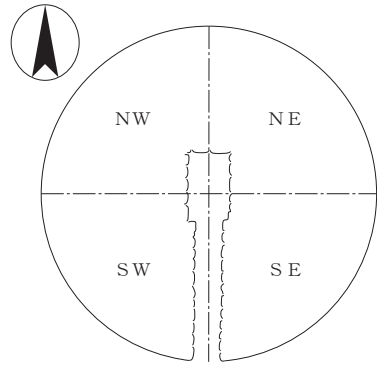
した。

第1段階では発掘調査前の状態を、測量図・写真で記録した。

第2段階では墳丘上・石室内に十字の土堤を設定し、4区同時に表土・石室内堆積土を掘り下げた。この段階では葺石や周溝、石室内の遺物や閉塞の状態に留意した。

第3段階では墳丘・石室の状態や遺物出土状況を測量図・実測図・写真等で記録した。この作業の後に石室内の遺物を取り上げ、閉塞石を取り外した。

第4段階では墳丘上の土堤断面を観察・記録しながら、4区同時に墳丘封土の掘り下げと石室石材の吊り出しを実施した。この段階では葺石や石室の構築方法に留意した。この後、墳丘封土と石室掘形内を完掘し、最後に基底面の測量・断ち割りを実施して、旧地形復原のための資料を得た。



第3図 墳丘区分概念図

3 調査経過

第1次調査 まず、古墳群全域の墳丘・地形測量を実施した。続いて保存古墳のうち、石室が開口している4基の古墳（15・18・20・21号墳）については石室実測を実施した。

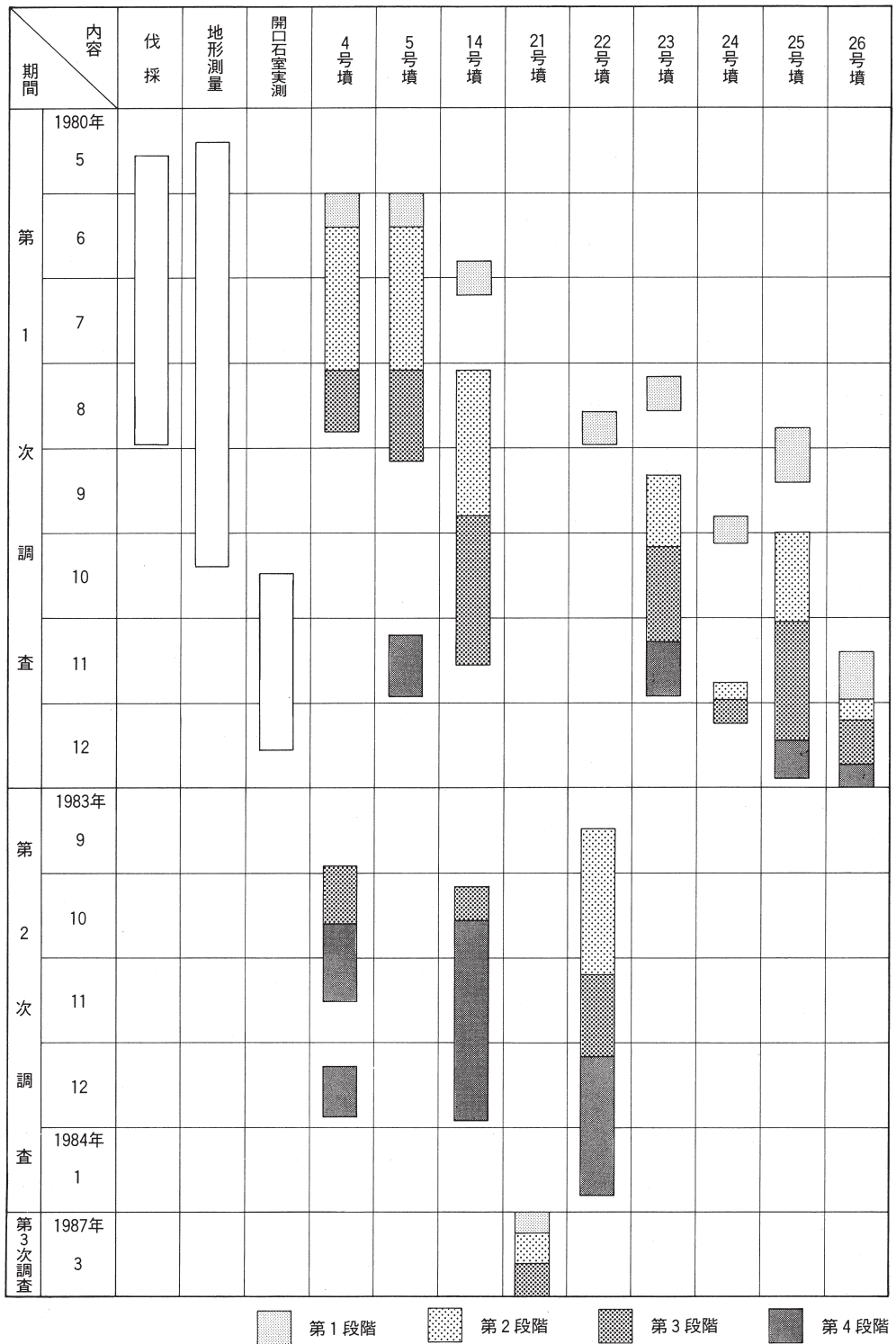
これと並行して、保存対象外の7基の古墳（4・5・14・23・24・25・26号墳）と2箇所の古墳推定地（3・13号墳）の発掘調査を実施した。調査の結果、4・14号墳の石室残存状態が良好なことから、事前の協議に基づき移築復原が決定した。このため、2基の古墳は第3段階までで調査を終わり、他の5基は完掘した。また、2箇所の古墳推定地は古墳でないことが判明した。

第2次調査 4・14号墳は、石室石材・葺石・敷石に、復原のための割り付け線や番号を記入した後、第4段階の調査を実施した。これと並行して、古墳公園の設計上保存できなくなった22号墳の発掘調査を実施した。この古墳も石室残存状態が良好なため、4・14号墳と同様の調査方法をとった。移築復原が予定される3基の古墳（4・14・22号墳）の石材は、事業地内の公園予定地に運搬・保管した。また調査中に4号墳の墳丘断面の土層転写作業を実施した。

第3次調査 21号墳は古墳公園に含まれるが、開口石室として活用されることを目的に、埋没した開口部と石室内の発掘調査を実施した。この古墳は保存されるため、断ち割りなどの作業は部分的なものにとどめた。

2 調査経過

第2表 調査進行表（段階は第1表に対応）



整理作業と報告書作成 第2次調査が終了した昭和59年(1984)1月から約3ヶ月間、調査記録の整理と出土遺物の接合・実測、関連資料の収集を実施した。この期間中に本報告書の案を作成した。その後、製図・原稿執筆を進め、平成元年(1989)6月にこれらの作業を終了した。

記録映画の制作 本調査では図面・写真などの記録の他、映画による調査記録を制作した。記録映画は当研究所の指導・協力のもと、西武都市開発株式会社が企画・立案し、京都映画株式会社が撮影を行った。

撮影した内容は、発掘調査(第1・2次)の進行状況と整理作業、及び出土遺物である。撮影に際しては、映画の持つ特性を利用して、発掘調査の方法や過程を記録すると共に墳丘・石室の構造を平易に理解できるように努めた。

第1次調査の記録は、『記録映画 大枝山古墳群』(カラー16mm、上映時間42分)としてすでに完成している。この映画は、昭和56年(1981)度の文部省選定、京都府教育委員会推薦、京都市推薦を受け、地元の小・中学校をはじめ各所で上映されている。

古墳公園の整備 公園内の古墳(13基)を積極的に保存・活用するために、京都市文化観光局や当研究所の指導・協力のもとに、株式会社西洋環境開発は保存地区の整備を進めている。古墳公園の整備にあたっては、古墳の保存を第一義としつつ、古墳群の特性を生かした修景を行い、地域社会に溶け込んだ施設として利用されることを目的とした。なお、公園の一角には横穴式石室を移築復原した。

さらに、古墳群への認識を一層深めるために、古墳公園の隣接地に調査成果等の展示施設の設置が計画されている。

調査組織の構成 調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所 調査部長 田辺昭三の指導のもとに、職員があたった。発掘調査と整理作業の担当調査員並びに参加者は以下の通りである。

第1次調査

調査員 磯部 勝、上村和直、丸川義広、牛嶋 茂(写真)

補助員 西大條哲(大阪産業大学)、三原 治(京都外国語大学)、江崎京子・梶原直美・木村忠之・久保直子・樋原美砂子・高山啓史・達家久子・西田和代・布引雅子・橋本由美・平田信子・藤下成子・松下裕恵・矢野康子・山本恭子・山本由利子・吉岡千加子(以上、京都芸術大学)、久保次郎(京都産業大学)、石川隆士・

2 調査経過

井上 仁・唐津典継・寺下高広・中尾 裕・百北芳成（以上、近畿大学）、
進藤 武・峠 繁樹・椋本正利（以上、花園大学）、宇和千栄子・高慶 考・
前田 聡・山田直樹・山田光男・山本 徹・山本典子・脇田 光・和田浩一（以
上、仏教大学）、高橋裕一（立命館大学）、小檜山一良、西家淳郎、野々村研二、
福地泰一郎

作業員 山下俊彦、明輝建設

第2次調査・整理作業

調査員 上村和直、丸川義広、牛嶋 茂（写真）、辻 純一（測量）、岡田文男（保存）

補助員 山岸 功（立命館大学）、卜田健司、西大條哲

作業員 小黒満郎、明輝建設

第3次調査

調査員 丸川義広、牛嶋 茂（写真）、辻 純一（測量）

作業員 明輝建設

発掘調査と報告書の作成に際しては、下記の方々の指導・協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

井上満郎（京都産業大学）、井守徳男（兵庫県教育委員会）、定森秀夫（京都府京都文化博物館）、平良泰久（京都府教育委員会）、西山要一（奈良大学）、萩本 勝（平安学園）、橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、松村冬樹（名古屋市博物館）、和田晴吾（立命館大学）

また、中国西安市学術代表団の方々には、第1次調査時と、第2次調査終了後の二度にわたり現地でのご教示をいただいた。記して感謝の意を表す。

昭和55年（1980）10月 馬 得志（中国社会科学院考古研究所 西安研究室主任）

王 仁波（陝西省博物館 館員）

韓 倩彬（西北大学外語系日語専業 教員）

昭和61年（1986）10月 馬 得志（中国社会科学院考古研究所 西安研究室主任）

陳 全方（陝西省文物管理局 副局長）

王 仁波（陝西省博物館 館長）

第2章 位置と環境

1 地理的環境

位置 大枝山古墳群は、京都市西京区御陵大枝山・御陵峰ヶ堂に所在している。御陵地区は京都市の西郊、洛西地区にあり、南は塚原・中山、東は桂、北は山田・松尾に接し、西半分は丘陵、東半分は平野地帯となっている。

地形 洛西地区の地形は、西山山地の断層崖によって西方が限られ、さらに松尾山から南南東方向に派生する向日丘陵によって東と西に二分されている。

向日丘陵の西側は一般に大原野・小塩と呼ばれ、三方を山地や丘陵に囲まれた一種の盆地状の地形を呈している。この一帯は比較的広範囲の扇状地がみられる他は、小畑川やその支流の下刻によって段丘がよく発達している。特に大原野では、段丘2に分類される古い段丘面が残っており、^{注1}小畑川に流れ込む小河川によってできた二次的な段丘崖も発達している。

大原野の北側は、標高90mから180mの低い丘陵地帯である。この丘陵地帯には、北から南へ流入する下狩川や二升川などの小河川によって幾筋もの開析谷がみられる。その小河川の一つ、下狩川によって開けた谷間に当古墳群は位置している。また、この丘陵の裾部には部分的に段丘が確認できる。

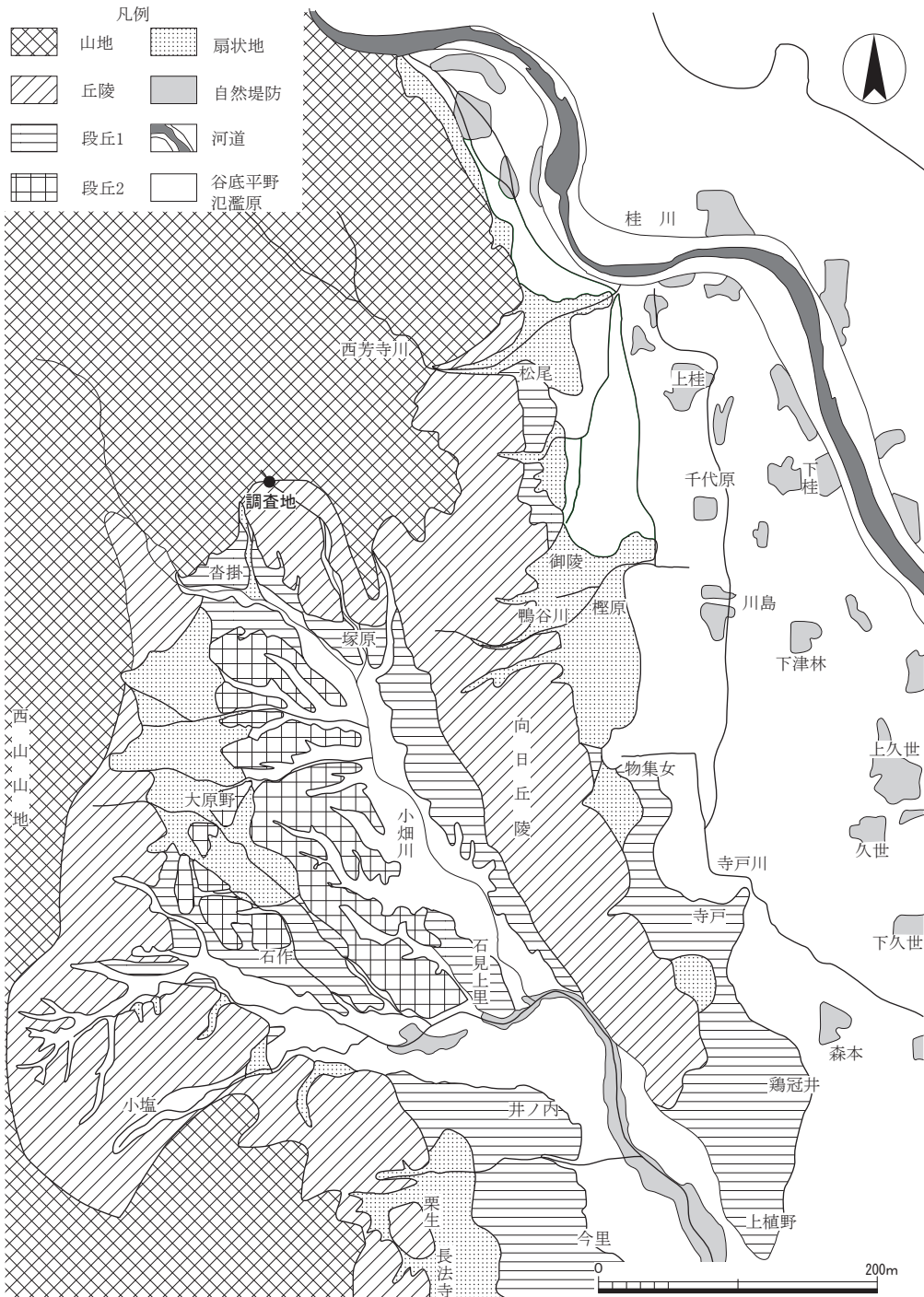
向日丘陵の東斜面には扇状地、段丘がみられ、その東側は桂川によって形成された氾濫原が広がり、その中には自然堤防が点在している。

地質 洛西地区の西を限る西山山地は、丹波帯と呼ばれる古生層に属するチャートや砂岩、泥質岩、あるいは輝緑凝灰岩といった古い時代の岩石で構成されている。これらの基盤山地の裾野には、大阪層群からなる丘陵地帯が発達している。大阪層群は鮮新世から更新世にかけて堆積した海成と淡水成の堆積物（粘土・砂・砂礫）からなり、当地域では今から約40万年前に堆積したとされる第6海成粘土などもみつかっている。^{注2}

段丘は後期更新世に河川がもたらした礫を主体とする堆積物で構成されている。第4図の段丘1とした低位段丘は、今から約3万年前のウルム氷期頃に形成されたものとみられ、また京都盆地を埋める扇状地もこの頃から形成が始まったものと考えられている。^{注3}そして、氷期以降気候の温暖な完新世には平坦な沖積面を形成するに至ったのである。

交通路 洛西地区は京都と丹波地方を結ぶ山陰街道に沿って開けた地区である。現在の

1 地理的環境



第4図 地形分類図(1:5,000、『土地分類基本調査』1972年による)

主要交通路は京都市内の五条通を西行する国道9号線に移っているが、旧山陰街道は七条通を西行し、桂・檜原を経て向日丘陵を横断し、大枝の関を通過して老ノ坂峠から丹波地方に入る道筋を通っていた。

京都と丹波地方を結ぶ今一つの道に「唐櫃越」がある。この道は、松尾・桂から山田を経て西方に広がる丘陵の尾根筋を東西行する道である。大枝山古墳群はこの唐櫃越の南側に位置しており、古墳群の中を通る小道もこれに取り付くことができる。また、この小道は東に行けば山田に、下狩川沿いに南に下れば塚原に出ることができる。

土地利用と集落分布 土地利用は地形の分類区分にほぼ対応している。山地は大半が松を主体とする雑木林で「松尾」の地名の由来となっている。丘陵地は明治・大正年間以降竹藪に利用されている。扇状地は果樹園に利用される例が多い。段丘面は水田や畑、氾濫原は水田に利用されている。

集落は段丘上や氾濫原の中に点在する自然堤防上に立地している。段丘面に立地する集落は、大原野や松尾山の東麓、向日丘陵の裾部に分布しているが、近年は氾濫原にも宅地造成が進行しつつあり、地形との対応関係は崩れつつある。

2 歴史的環境

桂川右岸に広がる乙訓地域は、京都盆地でも有数の遺跡分布地帯である。ここでは、大枝山古墳群の性格を理解するために、古墳時代を中心にこの地域の歴史的環境を概観しておく。^{注4}

先土器・縄文時代 乙訓地域に人々が定着するようになるのは、先土器時代からである。この時代の遺跡は長岡丘陵や大原野の段丘・扇状地で数箇所みられるが、本格的な発掘調査は行っておらず、内容的には不明な点が多い。洛西地区では大枝遺跡（国府型ナイフ文化期）と、大原野遺跡（細石器文化期）がある。

縄文時代の遺跡は北白川地域と並んで多いが、断片的な資料が得られているにすぎず、内容は明らかでない。後期から晩期には遺跡数が増加し、沖積平野部に多く立地するようになる。この時期の遺跡は弥生時代の遺跡立地と共通する点が多く、また弥生時代前期に継続する遺跡も少なくない。洛西地区では大原野遺跡（草創期）・大枝遺跡（早期）があるが、これに続く前期以降の遺跡はなく、当地域における遺跡分布の地域差がすでにこの時期からみられる。

2 調査方法



第5図 周辺遺跡分布図（古墳時代）(1:40,000)

第3表 周辺遺跡一覧表(古墳時代)

No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考
1	古墳群	円墳4基	33	清水塚古墳	前方後円墳
2	常盤馬塚古墳	円墳	34	天鼓の森古墳	前方後円墳
3	古墳群	前方後円墳2基	35	大枝山古墳群	円墳23基
4	双ヶ岡古墳群	円墳19基	36	沓掛古墳群	円墳5基
5	常盤東ノ町古墳群	円墳3基	37	大枝神社古墳	円墳
6	常盤仲之町遺跡	竪穴住居 ²⁴ 戸 掘立柱建物	38	塚原古墳群	円墳2基
7	太秦馬塚古墳	前方後円墳	39	鳴谷古墳	円墳
8	仲野親王墓(陵)古墳	前方後円墳	40	天皇の杜古墳	前方後円墳
9	上ノ段町遺跡	竪穴住居 ⁷ 戸 掘立柱建物	41	古墳	円墳
10	甲塚古墳	円墳	42	古墳	円墳
11	和泉式部町遺跡	竪穴住居22戸	43	塚ノ本古墳	円墳
12	蛇塚古墳	前方後円墳	44	権現原古墳	土壙墓
13	千代ノ道古墳	円墳	45	百々池古墳	円墳
14	西野町遺跡	竪穴住居4戸	46	一本松塚古墳	前方後円墳
15	清水山古墳	前方後円墳	47	福西古墳群	円墳23基・帆立貝1基
16	天塚古墳	前方後円墳	48	大原野神社東方古墳	円墳
17	段ノ山古墳	前方後円墳	49	大道古墳	円墳
18	山田古墳	円墳	50	長野古墳	円墳
19	松尾谷古墳群	円墳5基	51	長野乙古墳群	円墳6基
20	松尾大社西方古墳群	円墳2基	52	長野丙古墳群	円墳3基
21	松尾山古墳群	円墳10基	53	南条古墳群	円墳7基
22	松室遺跡	竪穴住居1戸・溝	54	物集女車塚古墳	前方後円墳
23	北松尾古墳群	円墳4基	55	芝山1号墳	円墳
24	ボウジョウ古墳群	円墳5基	56	芝山2号墳	前方後円墳
25	上園尾古墳群	円墳2基	57	寺戸大塚古墳	前方後円墳
26	神ヶ谷古墳	円墳	58	檜原遺跡	散布地
27	西芳寺古墳群	円墳43基	59	中海道遺跡	竪穴住居・土壙・溝
28	衣笠山古墳群	円墳2基	60	下津林遺跡	散布地
29	山田桜谷1号墳	前方後円墳	61	上久世遺跡	竪穴住居3戸
30	山田桜谷2号墳	墳形不明	62	修理式遺跡	土壙
31	上ノ山古墳	円墳	63	中久世遺跡	溝・流路
32	穀塚古墳	前方後円墳			

2 調査方法

弥生時代 前期の遺跡は沖積平野に立地し、小河川の自然堤防上に集落が営まれる。周囲の後背湿地は耕地に利用できるなど優れた自然環境を有しており、当地域は京都盆地内で最も早く水稲耕作が始まっている。

中・後期には遺跡が急激に増加すると共に、その規模も拡大し、京都盆地内での農業生産の中心的な地域となっていたことをうかがわせる。この時期は当地域における大きな画期に位置付けられよう。平野部の集落跡は、小畑川・旧石田川・旧羽束師川等の小河川の水系ごとにまとまり、その中には中心となるような大規模な集落がみられるようになる。このようなまとまりは、小河川を通じた地縁によって結び付けられ、やがてかなりの勢力を持つ地域集団となって行ったと推定できよう。

洛西地区は、これまでこの時代の遺跡は知られていなかったが、近年、松尾で松室遺跡が発見され、堅穴住居（中期）などを検出している。この遺跡から桂^{注5}の下津林遺跡までは約3km離れ、その間遺跡はなく乙訓地域南部とは極めて対照的である。これはこの地区が縄文時代以来、未開発のまま残されていたためと考えられ、当地域の開発を考える上での問題点となる。

古墳時代 前期の遺跡は若干増えるが、弥生時代から継続するものが多く、分布も似かよった状況を呈している。

中・後期には遺跡はさらに増加し、立地も平野部の他台地上や山麓にまで及んでいる。これは、それまで未開発の場所にまで耕地化が進んだことをうかがわせ、弥生中期に続くこの地域の大きな画期といえよう。遺跡は小河川ごとにまとまり、また向日丘陵や長岡の丘陵部にも分布している。これらの集落跡は、古墳群との関係をより具体的に把握する上で貴重なものと考えられる。

洛西地区では松尾・山田などの平野部や大原野にまで新たに遺跡が出現している。中でも、松室遺跡では6世紀代の大規模な水路を発見した。この水路は、秦氏が桂川に築いたとされる「葛野大堰」との関連で注目されている^{注6}。このような水路によって、洛西地区のみならず、乙訓地域一帯への水の供給が可能となり、開発がより一層進められたと考えられる。

弥生時代以来の農業生産の高まりを基礎として、乙訓地域では京都盆地内で最も早く古墳が造られるようになる。

前期古墳は向日・長岡・洛西の3地区に営まれ、それぞれ首長墓の系譜を追うことができる。最も早く成立するのは向日地区である。洛西地区ではそれよりやや遅れ、檜原の西

方丘陵上に一本松塚古墳（前方後円墳、全長100m）・百々池古墳（円墳、径50m）が造られる。3地区の首長墓群は墳丘や副葬品から考え、互いに強い関連を持ちながら成立しているが、中でも向日地区が最も優勢と考えられる。

中期古墳は、それまでの丘陵上から平野部にその立地が変わる。長岡地区には乙訓地域を統括した首長墓と推定される恵解山古墳（前方後円墳、全長120m）や、今里車塚古墳（前方後円墳、全長74m）などが造られる。この時期に、洛西地区では檜原の扇状地に天皇の杜古墳（前方後円墳、全長86m）が造られる。これに続く古墳としては山田の穀塚古墳（前方後円墳、全長40m）・清水塚古墳・天鼓の森古墳などの小型の前方後円墳がある。従来、これらの古墳群は「檜原グループ」と呼ばれ、洛西地区を統括した一連の首長墓系譜として把握されてきたが、近年、山田の西方丘陵上で5世紀中葉と考えられる山田桜谷2号墳（墳形不明）、5世紀末葉と考えられる同1号墳（前方後円墳、全長50m）を発見し、この地区の首長墓系譜に新たな視点を加えている。さらに、これらの古墳が営まれた山田では現在も「箱塚町」・「猫塚町」・「車塚町」などの地名が残ることから、本来はさらに多くの古墳が存在していたと想定される。なお、清水塚古墳・天鼓の森古墳は早くから破壊され内容は不明であるが、穀塚古墳は発掘調査の結果、竪穴式石室から竜文透かし彫り金銅製帯金具、象嵌環頭大刀などの特色ある遺物が出土している。

後期に入ると、中期には活発に首長墓が造られていた洛西地区では明確な首長墓はみられず、乙訓全域でも長岡地区の井の内車塚古墳（前方後円墳、全長38m）・稲荷塚古墳（前方後円墳、全長45m）・今里大塚古墳（円墳、径45m）や、向日地区の物集女車塚古墳（前方後円墳、全長45m）などが知られている程度で、規模・内容とも後述する嵯峨野地域の首長墓群に及ばない。

乙訓地域のこのような状況に対して、後期まではほとんど古墳がみられなかった桂川左岸の嵯峨野地域では、天塚古墳・蛇塚古墳などの全長60～80mの前方後円墳や、双ヶ岡1号墳などの大型円墳が相次いで造られるようになる。この中には、主体部に巨大な横穴式石室を持つものがある。

これら一連の首長墓群は、5世紀頃京都盆地に進出し、桂川の治水などを通じて、盆地内の開発を推し進めた秦氏をその被葬者として求められよう。一般的には後期以降、前方後円墳の規模は縮小するが、これに相反する嵯峨野地域での造墓の状況は特異で、秦氏の性格の一端を示すものであろう。

6世紀後半から7世紀にかけ、洛西地区でも数多くの群集墳が営まれるようになる。

2 調査経過

群集墳の中には山頂や山麓といった標高の高いところにあるもの（松尾大社西方・衣笠山古墳群）や、小河川の谷間に造られるもの（北松尾・ボウジョウ・上園尾・大枝山古墳群）など、特色ある立地条件を持つものがみられる。今回調査対象となった大枝山古墳群は、川筋の谷間に造られ、これと同様な立地の群集墳が、近接する西芳寺川谷筋に認められることは注目できる。

群集墳の規模は西芳寺古墳群が43基と最も多く、大枝・福西古墳群が23基と続く。しかし、大半は2～3基程度で、嵯峨野地域に比べ著しく規模の小さい点の特徴である。

主体部はいずれも横穴式石室で、両袖・片袖・無袖式の各形態のものがある。この地域の横穴式石室は、比較的大きな石材を使用することや、壁面の持ち送りが大きいなどの構造上の特徴を持つ。この地域的特色は、嵯峨野地域の古墳との共通点が多く、強い関連性をうかがわせる。

これらの群集墳は、当時の集団の領域や性格を考える上で興味深い内容を示している。しかしながら、発掘調査によって詳細な内容が明らかとなった古墳は少なく、個々の群集墳の分析と他の古墳群との比較検討は、今後の研究課題となっている。

以上のような歴史的環境を踏まえ、大枝山古墳群を今回の発掘調査の対象とした。

3 これまでの調査

乙訓地域の古墳群を最初に概括したのは、大正3年（1914）の梅原末治の報告であろう。この中で、大枝山古墳群は「塚原村の群集墳」と呼ばれ、8基の古墳の存在と横穴式石室の形態や特徴が詳細に報告されている^{注7}。

乙訓地域の丘陵地は、明治・大正年間の開墾でその大半が竹林に変貌したが、このため丘陵地の古墳は主体部が壊されたり、遺物が出土するたびに事後処理的な調査が実施されてきた。こうした例には、鏡山古墳（1897年）、百々池古墳（1900年）、一本松塚古墳（1901年）等をはじめとして、穀塚古墳（1914年）、妙見山古墳（1920年）、寺戸大塚古墳（1923年）、石見上里古墳（1925年）、牛廻り古墳（1930年）等がある。こうした傾向はそれ以降もしばらく続き、寺戸大塚古墳（1942年）や妙見山古墳（1947年）では再度主体部が露出する事態を招いた。また、物集女古墳群や松尾十三塚古墳群のように、徹底的に破壊される古墳群もあった。

その後、市街地の拡大に伴って住宅地の造成が盛んになると、今度は平野部の古墳が破壊される事態が進行した。松尾・山田に所在した天鼓の森古墳や清水塚古墳は、このよう

にして消滅したものである。

こうした事態に対処するため、京都府教育委員会では向日丘陵を中心とした乙訓地域で広範囲な分布調査を実施した。大枝山古墳群はこの中で初めて測量図が作成され、下狩川沿いの谷あい^{注8}に密集する古墳群の様相が明らかとなった。

昭和46年(1971)、京都大学考古学研究会ではそれまで行ってきた嵯峨野・洛西地域の分布調査の成果をまとめ、報告書として刊行した^{注9}。この報告書では、両地域の後期古墳の状態を呈示すると共に横穴式石室の比較検討や造営年代からみた地域の動向を考察している。大枝山古墳群についても、特徴的な立地条件や石室形態の類似性が指摘されている。

同じ頃、田辺昭三はこの地域にみられる首長墓系譜の断絶と嵯峨野地域に始まる大型古墳の築造を秦氏一族の勢力伸長と結び付ける観点を示し、地域ごとの群集墳のあり方についても考察を進めている^{注10}。

昭和45年(1970)代に入ると、洛西地区にも都市化の波が押し寄せ、大規模な宅地造成が行われるようになった。その先鞭となったのが、洛西ニュータウンの建設である。この建設工事に伴い福西古墳群が調査され、石室の形態や出土遺物などの分野では貴重な成果が得られたが、古墳群の南半分は完全に消滅する事態となった。今回の大枝山古墳群の調査もこのような大規模開発に伴う事前調査の一端に位置付けられる性格を持っている。

こうした調査とは別に、昭和42・43年(1967・68)には京都大学考古学研究室が中心となって向日丘陵に所在する前期古墳群の発掘調査を実施した例もみられるが、全体からみるとその数はごく限られたものといえる^{注11}。

注1 第4図中の段丘1・2は国土地理院発行の土地条件図(1/25,000 京都 1977)の低位段丘・中位段丘にそれぞれ相当している。

注2 日下雅義「第1章 第1節 自然環境」(『向日市史』上巻)1983

注3 石田志郎「京都盆地北部の扇状地-平安京遷都時の京都の地勢-」(『古代文化』第34巻12号)1982

注4 歴史的環境を記述するにあたっては以下の文献を参考にした。

- 1 田辺昭三・加藤 修・上田正昭他「古代の曙光」・「山背国の展開」(『京都の歴史』第1巻) 1970
- 2 京都大学考古学研究会編『嵯峨野の古墳時代』 1971
- 3 高橋美久二・都出比呂志・井上満郎「自然環境と文化のあけぼの」・「弥生時代」・「古

第2章 注

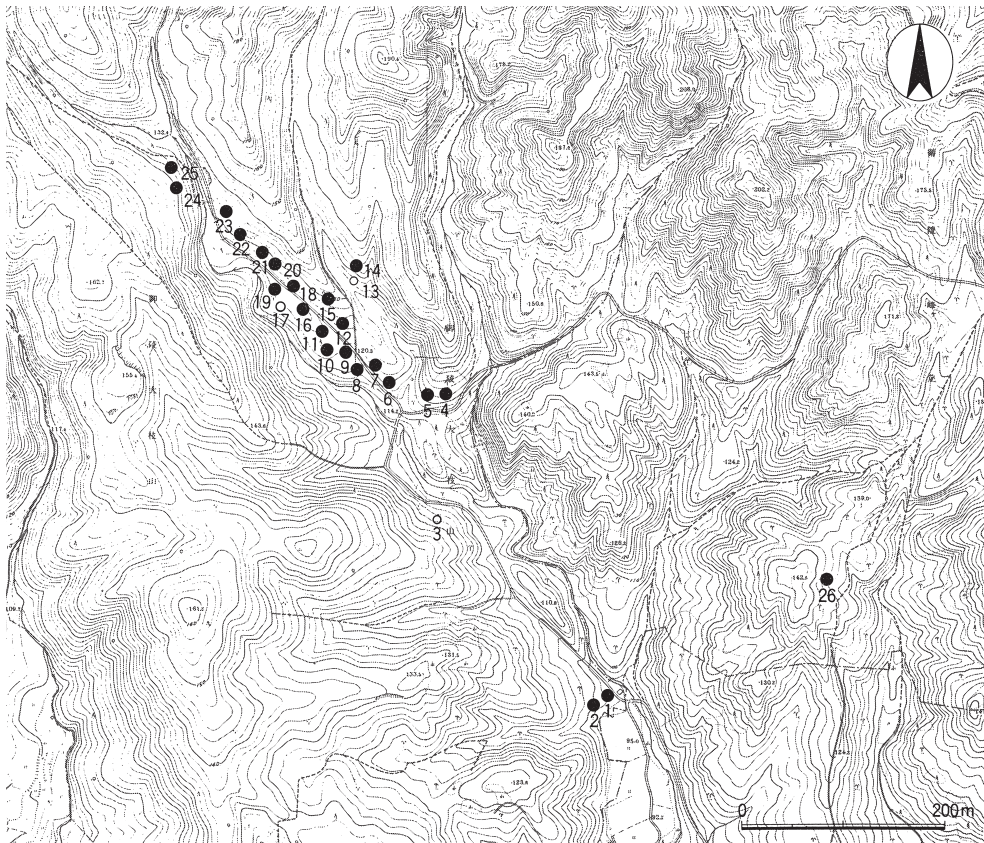
- 墳時代」(『向日市史』上巻) 1983
- 4 田辺昭三編『史料 京都の歴史』2 考古 1983
- 5 小田桐淳「乙訓地方の自然と遺跡(3) 乙訓地方における縄文遺跡の立地と分布」
(『長岡京跡発掘調査研究所ニュース』第30号) 1983
- 6 岩崎 誠「乙訓地方の自然と遺跡(2) 桂川右岸の弥生遺跡」(『長岡京跡発掘調査
研究所ニュース』第29号) 1983
- 7 本弥八郎「乙訓地方の自然と遺跡(1) 桂川右岸沖積平野部の遺構」(『長岡京跡
発掘調査研究所ニュース』第27号) 1983
- 8 岩崎 誠「乙訓地域の旧石器」(『長岡京古文化論叢』) 1986
- 注5 小森俊寛・原山充志「松室遺跡」(『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』
財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1987
- 注6 注5と同じ。
- 注7 梅原末治「山城の古墳墓」(『人類学雑誌』第29巻 第12号) 1914
この論文で紹介された古墳は、(一)～(三)の古墳が現在の1～3号墳に、(四)～
(八)の古墳が12・15・16・19・20号墳に該当すると考えられる。
- 注8 堤圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』
京都府教育委員会) 1968
- 注9 注4の2と同じ。
- 注10 田辺昭三「氏族の発展」(『京都の歴史』第1巻) 1970
- 注11 京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」
(『史林』第54巻 第6号) 1971

第3章 古墳群の調査

1 古墳群の概要

この古墳群は、古墳の分布状況から大きく三つに分けることができる。古墳の最も密集する箇所は、下狩川に沿った谷あいの平坦地と丘陵斜面で、ここには4号墳から25号墳までの合計20基が位置している。また、これより南約400mの丘陵斜面には1・2号墳、さらに下狩川より東側の丘陵内には26号墳が単独で位置している。

現状は竹藪と雑木林であるが、特に竹藪内のものは削平を受けたものが多い。また20号墳より北側のものは墳丘が丘陵側の土砂に覆われている。内部主体はすべて横穴式石室と推定され、4・15・18・20・21号墳の石室は開口、11号墳は天井石が露出していた。



第6図 古墳分布図 (1:7,500)

1 地理的環境

第4表 古墳一覽表

名 稱	墳 丘		周 溝		葺 石	石 室		玄 室		
	直径	高	幅	深		形態	主軸方向	長	幅	高
1 号 墳	16	1				兩袖	南	2.3	2.2	(2.2)
2 号 墳		1.5					不明			
3 号 地点										
4 号 墳	19	3.5	2.7	0.7	有 2 重	兩袖	N0°15' E	3.6	2.1	3.15
5 号 墳	12.5	2	1.7	0.7	有 2 重	片袖	N7°43' E	2.4	1.4	(1.5)
6 号 墳	18.5	3.6					不明			
7 号 墳	18.5	5.6					不明			
8 号 墳	14.5	2.6					南東			
9 号 墳	16	1.4					南東			
10 号 墳	15	2.1					南々西			
11 号 墳	19.5	2.6					N11°E	(3.6)	(2.0)	(1.0)
12 号 墳	16	3.8					不明			
13 号 地点										
14 号 墳	14	2.9	2.7	0.5	有 2 重	片袖	N22°56' E	3.1	1.55	2.3
15 号 墳	18.5	6.2				兩袖	N35°5' E	3.7	2	(3.0)
16 号 墳	23.5	4.7			有		南			
17 号 地点										
18 号 墳	15.5	2.7				兩袖	N32°33' W	3.2	1.7	(2.2)
19 号 墳	11	1.7					南東			
20 号 墳	20	4.7				兩袖	N23°40' W	3.65	2.2	(2.6)
21 号 墳	20	4.1				兩袖	N24°41' W	3.6	1.7	2.6
22 号 墳	20	3.2	3.8	0.5	有 2 重	兩袖	N5°44' E	3.6	2.25	2.3
23 号 墳	16	2.7	2	0.6		兩袖	N13°1' E	3.1	1.8	(2.15)
24 号 墳	15	1	0.8	0.1			不明			
25 号 墳	19.5	2.8	2.4	0.4	有	兩袖	N42°59' W	3.1	2	(0.8)
26 号 墳	9.9	1.1	1.3	0.2		不明	N4°20' E	(3.35)	1.35	(0.75)

第3章 古墳群の調査

羨道			出土遺物	備考
長	幅	高		
2.4	1.4	1.4		半壊
				消滅
				古墳でない
7.65	1.45	2.15	須恵器・土師器・耳環	完存
4.0	1.0	(1.3)	須恵器・土師器・鉄鏃	
(2.0)	(1.1)	(0.5)		天井石露出
				完存
				古墳でない
5.55	1.05	1.8	須恵器・土師器・鉄刀・刀子・耳環	完存
(6.0)	1.2	(2.1)	須恵器・馬具	石室開口、完存
				完存
				古墳でない
(2.6)	1.2	(1.35)		石室開口
(2.5)	(1.0)	(1.6)		石室開口
6.55	1.1	2.0	須恵器・土師器・刀子・鉄鏃・耳環	石室開口、完存
7.5	1.4	1.9	須恵器・土師器・刀子・耳環	完存
5.4	1.25	(1.55)	須恵器・土師器	
			須恵器	
6.8	1.3	(2.1)	須恵器・土師器・鉄刀・鉄鏃・耳環	
			須恵器	

注・名称ゴチックは発掘調査古墳。
 ・計測値の単位は m、() は現存値。
 ・古墳高は墳丘南裾部と最高所との比高。
 ・周溝数値は北側周溝の計測値。

2 調査方法

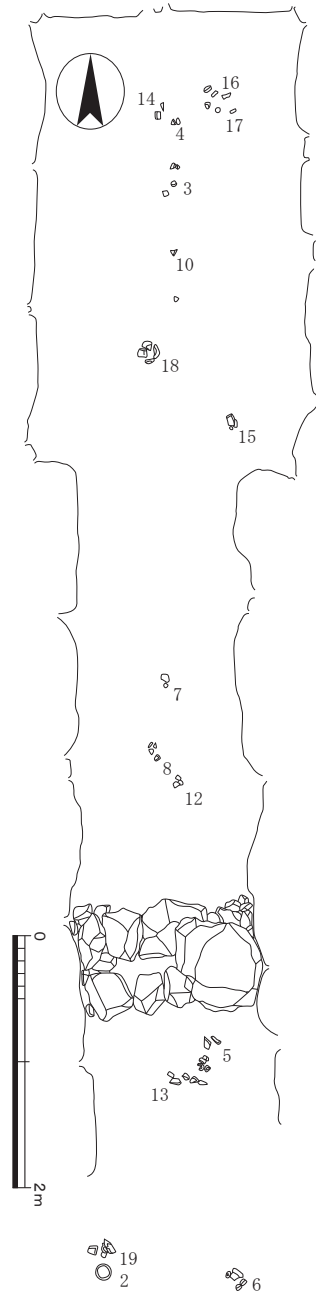
2 古墳群の発掘調査

4号墳（図版2・3・26・27・39・40・41・48・58・68・71・74・81）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘 封 土	墳 丘 ・ 封 土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（Ⅱ類） ・直径 19.0 ・高さ（前 3.5、後 2.7） ・墳頂標高 121.1 ・基底面は北側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は 4 層に大別できる。 ・第 1 層は 4 段目と天井石に対応し、墳丘全面に盛る。 ・第 2 層は 3 段目に対応し、石室周辺の狭い範囲にある。 ・第 3 層は 2 段目に対応し、石室の周辺に盛る。 ・第 4 層は掘形埋土である。基底面上で炭層を検出。 ・各層間には灰白色粘土の薄い層がみられる。
	葺 石	<ul style="list-style-type: none"> ・上下とも SE 区で検出。 ・上層葺石は長さ 1.5m、高さ 1.1m である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上層葺石は第 1 層で検出、横積みするが段は不明瞭。 ・下層葺石は第 3 層上面で貼り付けた状態で検出。
	周 溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NE・NW 区で検出。 ・幅 2.7、深さ 0.7（北側） ・南側へ行くほど浅くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山（赤褐色砂泥層）を掘り込んでつくる。 ・埋土は 3 層あり、中層に炭を含む。 ・底面で炭土壙や焼土壙を検出。
内 部	掘 形	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 13.2、幅 5.4～3.5 ・深さ 0.6（奥） 	<ul style="list-style-type: none"> ・基底面中央東寄りにあり、地山を掘り込む。 ・底は南側がゆるやかに下がる。
	玄 室	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式（A 類） ・長さ 3.6（東）、3.55（西） ・幅 2.1、高さ 3.15 ・持ち送り奥壁 9°、東壁 10°、西壁 11°。 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁・東壁・西壁とも 4 段積み。奥壁は基底石 2 個あり同大。2・3 段目は上面不揃い、4 段目が最も大きい。 ・東壁基底石は 4 個、袖石側が小型、2 段目以上は不揃い。 ・西壁基底石は 3 個、2 段目以上は大きさ不揃い。 ・天井石は 2 個、平坦面を下に向ける。奥壁側が大きい。
	羨 道	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 7.65 ・幅 1.45 ・高さ 2.15 ・開口部がやや広がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は 3 段積み、持ち送り 7°。袖石は立てる。基底石 5 個、袖石側が大型。2 段目は上面を袖石に合わせる。 ・西壁は 4 段積み、持ち送り 2°。袖石は他の基底石と同じく横積み。基底石は 5 個。上段は大きさ不揃い。 ・天井石は 2 個残存、袖石上のものが大きい。
	床 面 ・ 閉 塞	<ul style="list-style-type: none"> ・床面敷石は羨道に残存。 ・閉塞石は奥から 7～8m にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形の底に厚さ 0.15m ほど土を入れて整地し、上面に小角礫を敷き詰める。 ・閉塞石は床面に石を 2 列に並べ、この上に乱雑に石を積む。

	出土遺物
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 19 点 (杯 A7、蓋 A9、無蓋高杯 A1、脚付長頸壺 B1、提瓶 1) ・土師器 2 点 (長頸壺 1、甕 A1) ・耳環 1 点、弥生土器の小片 (封土中より)
出土状況	<ul style="list-style-type: none"> ・原位置とみられるものは須恵器杯 (2) と土師器甕 (19) である。他は追葬時の片付けや盗掘時に動いている。 ・玄室では須恵器杯 (3・4)、蓋 (10・14・15)、高杯 (16)、脚付長頸壺 (17)、提瓶 (18) が床面上で、蓋 (8・12) が埋土から出土。 ・羨道では須恵器蓋 (8・12・13)、杯 (7) が床面上、杯 (1・6)、蓋 (9・11) が閉塞付近の埋土から出土。

- ・この古墳は盗掘を受けていたが、墳丘や石室の残りは良好で、移築復原を前提とした調査を行った。
- ・主体部の横穴式石室は巨石を用い構築されている。
- ・段積みは開口方向が低く、また開口部付近では基底石がみられず、石組みの状態も異なっている。
- ・床面や閉塞石には造り直した形跡が認められた。
- ・出土遺物は豊富ではないが、土器類の中には型式差があり、床面や閉塞の状況と合わせて追葬が行われたと考えられる。
- ・この古墳は、古墳群の中心部とは小河川で隔てられた東側の丘陵端部に 5 号墳と並んで築かれており、古墳群の小支群のあり方を示すものとして注目される。



第7図 4号墳遺物出土位置図(1:60)

2 調査方法

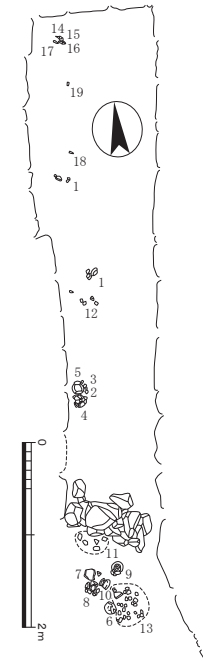
5号墳（図版4・5・28・38・40・41・49・59・71・75・80）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘	墳丘・封土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（IV類） ・直径 12.5 ・高さ（前 2.0、後 1.2） ・墳頂標高 118.7 ・基底面は北側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は 4 層に大別できる。 ・第 1 層は 4 段目に対応し、墳丘全面に盛る。 ・第 2 層は 3 段目に対応し、石室背後の狭い範囲にある。 ・第 3 層は 2 段目に対応し、一部は掘形内に堆積する。 ・第 4 層は掘形埋土で、基底石を固定する。
	葺石	<ul style="list-style-type: none"> ・上下 2 回施される。 ・上層葺石は東へ 2m、西へ 3m 分残る。 ・下層葺石は東へ 2m、西へ 1.15m 分残る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上層葺石は第 1 層で検出。 ・長さ 0.3 ～ 0.5m ほどの石材を 2・3 段積む。 ・東側では羨道東壁より連続する。 ・下層葺石は奥から 5.5m の位置で検出。 ・上層葺石と同様の石材、構築方法をとる。
	周溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NE・NW 区で検出。 ・幅 1.7、深さ 0.7（北側） ・南へ行くほど浅くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山（赤褐色砂泥層）を掘り込む。 ・埋土は 2 層あり、NW・SW 区では両層間に炭層あり。
内 部	掘形	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 6.6、幅 3.1 ・深さ 0.9（奥） 	<ul style="list-style-type: none"> ・基底面の中央にあり、地山を掘り込んでつくる。 ・底は南側がゆるやかに下る。
	玄室	<ul style="list-style-type: none"> ・片袖式（C 類） ・長さ 2.4（西） ・幅 1.4 ・現在高 1.5 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は 4 段目まで残存、持ち送り 4°。基底石は 3 個。 ・東壁は 5 段まで数えられるが、段積みは判然としない。基底石は 5 個。 ・西壁は 4・5 段積みで段積み上面は開口部方向で下る。持ち送り 10°。基底石は 5 個。
	羨道	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 4.0 ・幅 1.0 ・現在高 1.3 ・開口部で広がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は 2 段目まで残存、持ち送り 5°。 ・基底石は 9 個あり、両端のものは縦積みする。袖石位置に対応する石材は目立たない。 ・西壁は 3 段目まで残る。持ち送り 4°。 ・袖石は立てる。基底石は 6 個あり、縦・横方向に据える。
	床面・閉塞	<ul style="list-style-type: none"> ・石室内全面に敷石を施す。 ・閉塞石は奥から 5.5m の位置にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形の底に厚さ 0.1m ほど土を入れた後、全面にわたり小角礫を敷き詰める。 ・閉塞は人頭大の石の長軸を石室の主軸に向け、2 段積みした状態で検出。

第3章 古墳群の調査

	出土遺物
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 12 点 (杯 A2、蓋 A3、無蓋高杯 A2・B5) ・土師器 3 点 (長頸壺 1、甕 B2) ・鉄鏃 5 点
出土状況	<ul style="list-style-type: none"> ・原位置とみられるものは、羨道西壁沿いの須恵器杯 (2)、蓋 (3・4・5) と、閉塞前面の高杯 (6～10)、土師器甕 (11) である。 ・(3)の上には(5)が、(2)の上には(4)が重なって出土した。 ・閉塞前面の高杯は(9)のみが杯部を下にし、土師器甕は細片の状態で出土した。 ・鉄鏃は奥壁付近でまとまって出土した。

- ・墳丘・石室の上半分は削平によって失われていたが、下半分は良好に残っていた。
- ・主体部の片袖式石室と同じものは、今のところ当古墳群の中では確認されていない。
- ・側壁の段積みは 4 号墳と同様開口方向が低い。また石組みの状態も 4 号墳と同様開口部付近では異なっている。
- ・閉塞は石材を乱雑に積み上げて行う。
この前面で閉塞終了時に用いたとみられる土器群を検出し、古墳に伴う祭祀の実態を知る貴重な資料を得た。
- ・この古墳は 4 号墳の西隣にあって、同じ丘陵端部の西半分を占地している。調査の結果、4 号墳は大型で先に築造されたことが明らかとなったので、2 基のあり方はこの古墳群の群構造や支群の動向を理解する上で重要である。



第8図 5号墳遺物出土位置図(1:60)



第9図 閉塞全面の土器出土状況(1:20)

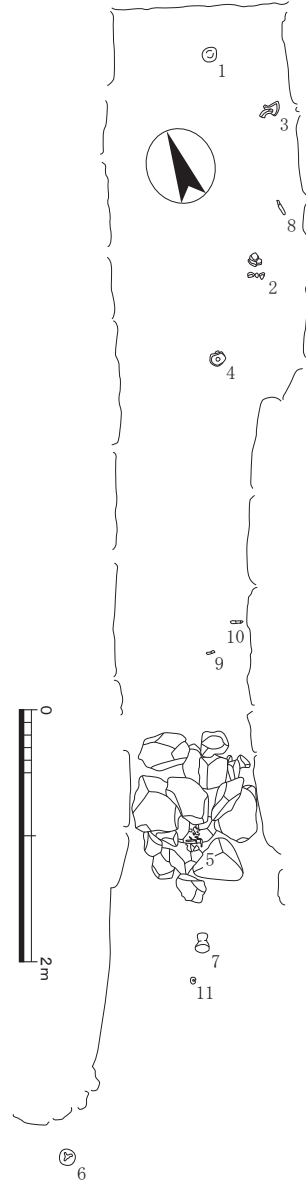
2 調査方法

14号墳（図版6・7・27・38・39・42・50・56・60・69・72・74・81）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘	墳 丘 ・ 封 土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（Ⅲ類） ・直径 14.0 ・高さ（前 2.9、後 2.0） ・墳頂標高 132.7 ・基底面は北側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は 4 層に大別できる。 ・第 1 層は 5 段目及び天井石に対応し、墳丘全面に盛る。 ・第 2 層は 4 段目に対応し、石室の背後に盛る。 ・第 3 層は 3 段目に対応し、狭い範囲に盛る。 ・第 4 層は掘形埋土で、基底石と 2 段目に対応する。 ・第 3・4 層間は灰白色粘土の薄い層がみられる。 ・基底面上には炭層がみられる。
	葺 石	<ul style="list-style-type: none"> ・上下 2 回施される。 ・上層葺石は東に 9.5m、西に 10m。高さ 1.5m。 ・下層葺石は SE 区のみ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上層葺石は第 1 層で検出。 ・最高 5 段あるが段積みは明瞭でなく、乱雑に小口積みする。 ・下層葺石は第 2 層上面にあり、小石材を乱雑に積む。
	周 溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NE・NW 区で検出。 ・幅 2.7、深さ 0.5 ・南へ行くほど浅い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山（赤褐色砂泥層）を掘り込む。 ・埋土は黄褐色泥土層である。 ・底面で炭土塊 5 基検出。
内 部 主 体	掘 形	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 9.5、幅 3.7～1.7 ・深さ 1.2（奥） 	<ul style="list-style-type: none"> ・基底面の中央にあり、地山を掘り込む。 ・底は南側がゆるやかに下る。
	玄 室	<ul style="list-style-type: none"> ・片袖式（B 類） ・長さ 3.1（東） ・幅 1.55 ・高さ 2.3 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は 6 段積み、持ち送り 16°。基底石 1 個。 ・東壁は 5 段積み、持ち送り 7°。基底石は 5 個あり袖石寄りのものが小型、上段では大型の石材を横積みする。 ・西壁も 5 段積みとみられ、持ち送り 14°。基底石は 4 個あり、上段には大型の石材を据える。 ・天井石は 3 個、底面は極めて平坦、開口部側が下る。
	羨 道	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 5.55 ・幅 1.05（玄門） ・幅 1.25（開口部） ・高さ 1.8 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は 5 段積み、持ち送り 8°。袖石は立てて用い、他の基底石と区別される。3 段目に大型石材を用いる。 ・西壁は東壁ほど段が明瞭でない。持ち送り 11°。基底石は 6 個、奥の 3 個は大型、東壁袖石を意識せずに据える。 ・天井石は 3 個で、ほぼ同じ大きさである。
	床 面 ・ 閉 塞	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ全面に敷石を施す。 ・閉塞は奥から 6.4m の位置にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形の底に厚さ 0.2m ほど土を入れて整地し、上面に礫を敷き詰める。玄室より羨道に大きな礫が用いられる。 ・閉塞石は 2 段以上にわたり乱雑に積む。

出土遺物	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 10 点（杯 A3、蓋 A1、無蓋高杯 1、有蓋高杯 1、同蓋 1、長頸壺 2、甕 1） ・土師器甕 B1 点 ・刀子 2 点、鉄刀 1 点、耳環 1 点
出土状況	<ul style="list-style-type: none"> ・原位置とみられるものは、有蓋高杯 (5) と高杯脚部 (6) である。 ・(5) は閉塞石 1 段目で破片となって出土した。 ・(6) は墳丘前面で据えられた状態で出土した。 ・玄室床面では杯 (1～3)、高杯蓋 (4) と刀子 (8) が、羨道床面では刀子 (10)、鉄刀 (9)、閉塞外では長頸壺 (7)、耳環 (11) が出土した。

- ・盗掘を受けていたが、墳丘・石室とも残りが良く、移築復原を前提とした調査を行った。
- ・葺石は特に上層の残りが良好で、墳丘の前面をめぐる状態や構築技法が明らかとなった。
- ・主体部の横穴式石室は片袖式であるが、玄室長は両袖式 B 類 (18・23・25 号墳) に等しく、この石室を造る際にそれらを参考にしたことが考えられる。
- ・石室の石材は比較的大きさの揃ったものが用いられている。また、石材の平坦面を内側に揃えて丁寧に積み上げているために、石室壁面は極めて平坦に仕上げられている。
- ・この古墳は中心部とは谷を隔てた北側の丘陵端部に単独で立地する点で特徴ある古墳であるが、これは中心部の大型古墳より遅れて築造されたことが要因と考えられる。



第10図 14号墳遺物出土位置図(1:60)

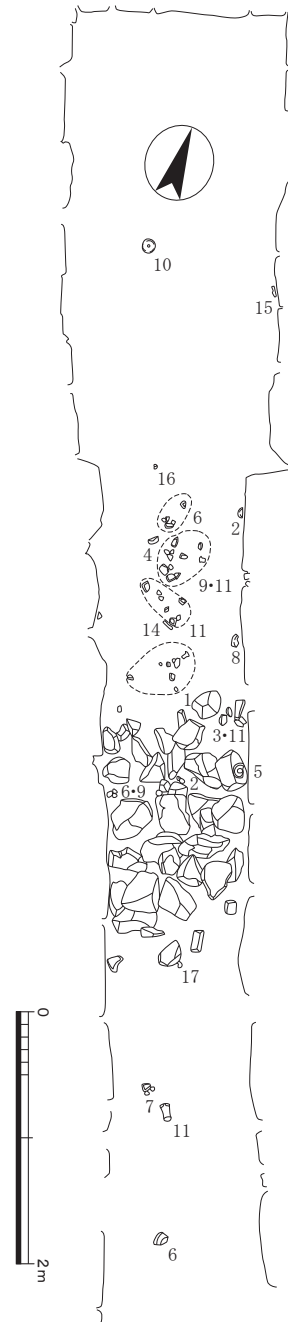
2 調査方法

21号墳（図版9・10・29・51・61・75・80・81）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘	墳丘・封土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（Ⅱ類） ・直径 20.0 ・高さ（前 4.1、後 0.3） ・墳頂標高 131.2 	<ul style="list-style-type: none"> ・部分的な調査のため、墳丘構築の特徴は不明。 ・丘陵側はかなり埋没していると思われる。 ・南西部は削平され、小道が通る。 ・開口部では、盛土が 1.2m におよぶ。
	葺石	<ul style="list-style-type: none"> ・明確なものは未検出。 	
	周溝	<ul style="list-style-type: none"> ・未検出 	<ul style="list-style-type: none"> ・開口部では地山直上で炭層を検出。
内 部	掘形	<ul style="list-style-type: none"> ・不明 	
	玄室	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式（A類） ・長さ 3.6（東） 3.55（西） ・幅 1.7（奥） 1.5（羨門） ・高さ 2.6 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は 3 段積み、持ち送り 4°。基底石 2 個で東側が大きい。 ・東壁は 5 段積み、持ち送り 7°。基底石は 7 個あり袖石寄りのものが大きい。上段に 1m 前後の石を用い、段積みは奥が高い。 ・西壁は 5 段積み、持ち送り 14°。基底石は 7 個あり、大きさはよく揃う。上段に大きな石を用い、段積みは奥が高い。 ・天井石は小型で 4 個ある。底面は奥が高い。
	羨道	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 6.55 ・幅 1.1 ・高さ 1.8～2.0 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は 4 段積みとみられるが段は不明瞭である。持ち送り 10°。袖石は直角面を内に立てて据える。基底石は 8 個ある。 ・西壁は 4 段積みとみられるが段は不明瞭。持ち送り 4°。袖石は他の基底石と同じ大きさの石を用いる。基底石は 8 個、玄室より大きい。 ・天井石は 5 個現存。底面は開口部上の石のみ下がる。
	床面・閉塞	<ul style="list-style-type: none"> ・奥から 3.5m まで敷石。 ・閉塞石は明瞭でない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形の底に厚さ 0.1m ほど土を入れて整地し、玄室のみ上面に小礫を敷き詰める。敷石面は奥壁や両袖石付近が攪乱を受ける。 ・閉塞石とみられるものを、奥から 6m の位置で検出したが、位置が奥すぎること、積み方が低いことなど問題が残る。

出土遺物	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 10 点 (杯 A1、蓋 A4、無蓋高杯 A2、長頸壺 2、同蓋 1) ・土師器 1 点 (高杯 1) ・鉄鏃 3 点、刀子 1 点、耳環 2 点
出土状況	<ul style="list-style-type: none"> ・玄室敷石上では壺蓋 (10) が完形で出土。蓋 (2～5)、長頸壺 (9・11)、無蓋高杯 (6・7) などは奥から 4～6m の位置で小片となって出土。これらは開口部のものとも接合でき、原位置を保っていない。 ・鉄鏃は羨道で (14)、開口部で (12・13) が出土。 ・刀子 (15) は玄室で出土。 ・耳環は玄室で (16)、羨道で (17) が出土。

- ・墳丘は 22 号墳の例を参考にすると、直径 20m 程度の円墳が想定できる。
- ・主体部の石室は残りが良好であった。特に羨道の天井石は 5 個残存し、現在知られているものでは最も残りが良い。
- ・石室内部は開口状態であったため、かなり破壊されていた。床面の敷石は玄室のみに施されていたことが判明した。
- ・出土遺物は少ない。壺蓋が 1 点完形で出土した他は、すべて破片で出土した。
- ・耳環が 2 個出土したのは、調査古墳の中でこの古墳が唯一である。
- ・主体部の石室は A 類に属するが、玄室の幅が狭い点で他と異なる。一方、両脇に位置する 20・22 号墳も共に A 類の石室を持っている。A 類の石室を持つ古墳の隣には B 類か C 類の石室を持つ古墳が位置することが多いため、組み合わせの関係について検討が必要である。

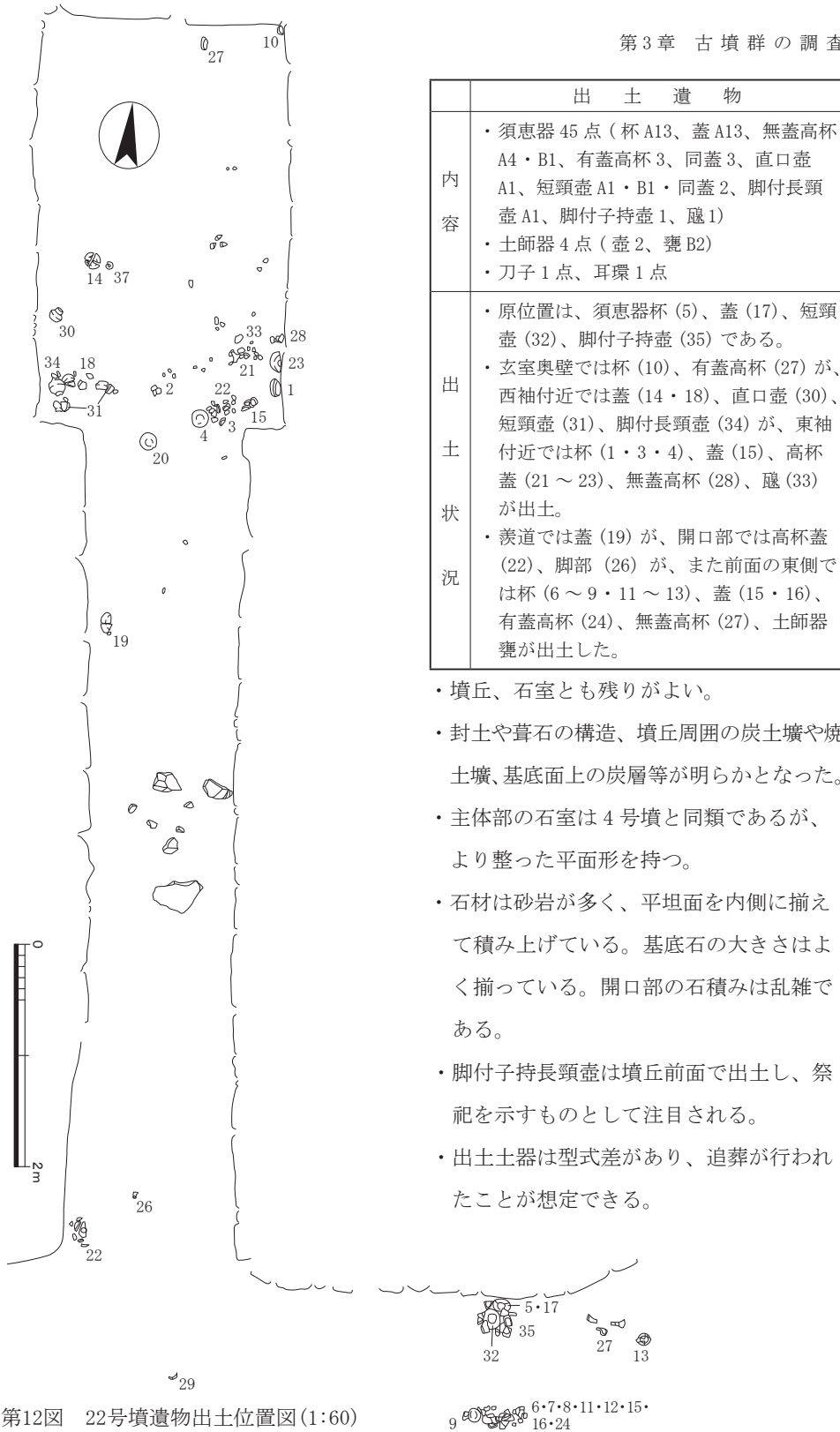


第11図 21号墳遺物出土位置図(1:60)

2 調査方法

22号墳（図版 11～13・30～32・38・39・43・44・52・57・62・70・72・76・77・81）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘	墳 丘 ・ 封 土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（Ⅱ類） ・直径 20.0 ・高さ（前 3.2、後 1.2） ・墳頂標高 132.0 ・基底面は北東側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は 5 層に大別できる。第 1 層は天井石に対応し墳丘全面に盛る。第 2 層は 4 段目、第 3 層は 3 段目に対応し石室の背後に盛る。第 4 層は 2 段目に対応し薄く基底面に盛る。第 5 層は掘形埋土で基底石を固定する。第 3・4 層間に灰白色粘土の薄い層がみられる。 ・基底面上で薄い炭層を検出。
	葺 石	<ul style="list-style-type: none"> ・上下 2 回施される。 ・上層葺石は東 6m、西 12m。 ・下層葺石は東 1m、西 6m。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上層葺石は第 1 層にあり、最高で 1.5m、5 段あるが乱雑に積む。下層葺石は第 4 層に対応、奥から 10m にあり、両方とも側壁石材の背後より連続する。
	周 溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NE・NW 区で検出。 ・幅 3.8、深さ 0.5 ・南側へ行くほど浅い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山（褐色砂泥層）を掘り込む。 ・埋土は 2 層あり、NW 区では両層間に炭層がある。 ・底面で炭土壙 4 基、焼土壙 1 基検出。
内 部	掘 形	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 12.9 ・幅 4.25～3.1、深さ 0.6 	<ul style="list-style-type: none"> ・基底面の中央にあり、地山を掘り込む。 ・底は南西側がゆるやかに下る。
	玄 室	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式（A 類） ・長さ 3.6 ・幅 2.25 ・高さ 2.3 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は 3 段積み、持ち送り 7°。基底石 2 個あり同大。 ・東壁は 4 段積み、持ち送り 7°。基底石は 7 個ありほぼ同規模。2 段目で大型の石材を用いる。段積みは不明瞭。 ・西壁は 5 段積みとみられ、持ち送り 10°。基底石は 6 個、2・3 段目に大型の石材を用いる。 ・天井石は 2 個あるが、両方とも原位置を失う。
	羨 道	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 7.5 ・幅 1.4 ・高さ 1.9 ・基底石はまっすぐ並ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は 5 段積みであるが、玄室との関係でみれば 3 段積みとみられる。持ち送り 8°。袖石は直角面を内側にし立てる。基底石は 12 個あり。 ・西壁も 3 段積みとみられるが、段は明瞭でない。持ち送り 13°。袖石は直角面を内側に立てる。基底石は 9 個ある。開口部で積み方が乱れる。 ・天井石は 2 個存在するがすべて原位置を失う。
	床 面 ・ 閉 塞	<ul style="list-style-type: none"> ・奥から 6.4m まで敷石。 ・閉塞石は奥から 7m で検出。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形底に厚さ 0.15m 土を入れて整地し、上面に小礫を敷き詰める。 ・閉塞石は数個検出しただけで、他の古墳ほど明確でない。



第12図 22号墳遺物出土位置図(1:60)

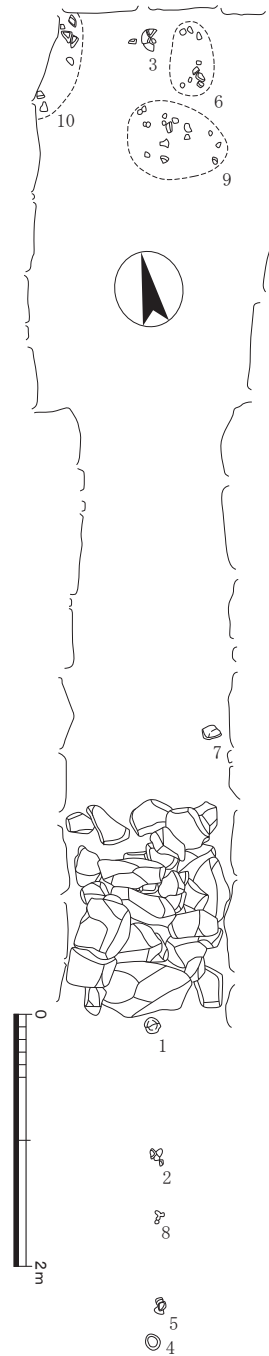
2 調査方法

23号墳（図版14・15・33・45・53・63・73・79）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘	墳 丘 ・ 封 土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（Ⅲ類） ・直径 16.0 ・高さ（前 2.7、後 0.6） ・墳頂標高 132.1 ・基底面は北側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は 3 層に大別できる。 ・第 1 層は 4 段目に対応し、墳丘全面に盛る。 ・第 2 層は 3 段目に対応し、石室の背後に盛る。 ・第 3 層は掘形埋土で、一部基底面を盛る。
	葺 石	<ul style="list-style-type: none"> ・なし 	
	周 溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NE・NW・SE 区で検出した。 ・幅 2.0、深さ 0.6 ・南側へ行くほど浅い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山（茶灰色砂泥層）を掘り込む。 ・埋土は 2 層あり、上層には炭を含む。 ・底面で炭土壌を 5 基検出。
内 部	掘 形	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 9.5 ・幅 3.3 ・深さ 1.6（奥） 	<ul style="list-style-type: none"> ・基底面の中央にあり、地山を掘り込む。 ・底は南側がゆるやかに下る。
	玄 室	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式（B 類） ・長さ 3.1（東）、3.15（西） ・幅 1.7（両端）、1.9（中央） ・残存高 2.15 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は 3 段目まで残る。持ち送り 10°。基底石 3 個。 ・東壁は 5 段目まで残る。持ち送り 11°。基底石は 4 個あり大きさの揃ったものを立てる。上段の石材は横積みする。 ・西壁も 5 段目まで残る。持ち送り 8°。基底石は 5 個。2 段目に大型の石材を用いる。東壁同様に段は明瞭でない。
	羨 道	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 5.4 ・幅 1.25 ・残存高 1.55 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は 3 段目まで残る。持ち送り 5°。 ・袖石は直角面を内に向け立てる。基底石は 8 個あり、袖石側のもは大型の石材を立てる。 ・西壁は 3 段目まで残る。持ち送り 10°。 ・袖石は直角面を内に向け立てる。基底石は 8 個あり、立てて用いる。2 段目では袖石にのるものが大きい。
	床 面 ・ 閉 塞	<ul style="list-style-type: none"> ・玄室床面には敷石を施すが、残りは良くない。 ・閉塞石は奥から 6.5～8m にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形底に厚さ 0.1m 土を入れて整地し、この上面に小角礫を敷く。 ・閉塞石は石材を 2 段に乱雑に積む。

出土遺物	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 11 点 (杯 A5、蓋 A4、無蓋高杯 A1、脚付長頸壺 B1) ・土師器甕 B1 点
出土状況	<ul style="list-style-type: none"> ・閉塞前面の須恵器杯 (1) は原位置とみられるが、その他は盗掘時に動かされたものとみられる。 ・玄室では杯 (3)、蓋 (6)、無蓋高杯 (9)、脚付長頸壺 (10) が出土した。 ・羨道では蓋 (7) が、また閉塞石の外側では土師器甕や須恵器杯 (2・4)、蓋 (5・8) が点々と並んで出土した。

- ・墳丘、石室は削平によって上半部を欠失していたが、下半部の残りは良好であった。
- ・主体部の横穴式石室は、18・25号墳と同じ規模である。
- ・石材は比較的大きさの揃ったものが多く用いられ、平坦面を内に向けて丁寧に積まれている。
- ・特に基底石の大きさが揃い、立てて据え付けることや、羨道により大きな石材が使われることなどが明らかになった。
- ・閉塞前面で須恵器杯・土師器甕が出土し、4・5号墳と同様の祭祀の形跡を知ることができた。
- ・この古墳は下狩川左岸の古墳密集地の中では最も西北端に位置している。すぐ東隣には22号墳が位置するが、調査の結果22号墳の方が大型で先に造られたことが判明しており、4・5号墳の場合と同じく古墳群の構成を知る資料として注目される。



第13図 23号墳遺物出土位置図(1:60)

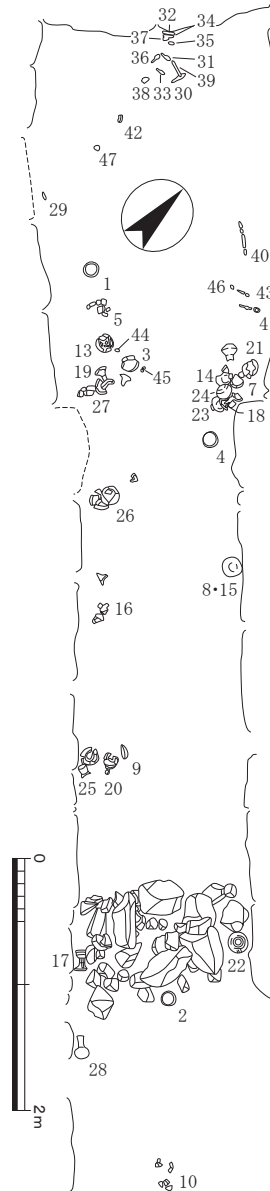
2 調査方法

25号墳(図版16～18・34～36・38・39・46・55・64・73・77・78・80・81)

		形態・規模(単位m)	構築技法の特徴
墳	墳丘 ・封土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳(Ⅱ類) ・直径19.5 ・高さ(前2.8、後1.1) ・墳頂標高137.1 ・基底面は北西側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は3層に大別できる。 ・第1層は3・4段目に対応し、墳丘全面に盛る。 ・第2層は2段目に対応し、石室の背後に盛る。 ・第3層は掘形埋土で、基底石に対応する。
	葺石	<ul style="list-style-type: none"> ・上層葺石は未検出。 ・SE区で下層葺石を検出。 ・西へ1.5mある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・下層葺石は奥から7.5mの位置にある。 ・西壁の背後から連続し、2段積みである。
丘	周溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NE・NW・SW区で検出した。 ・幅2.4、深さ0.4 ・下層周溝はNW・SW区で検出。断面は逆台形。 ・幅0.8、深さ0.6 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山(黄褐色砂質土層)を掘り込む。 ・埋土は2層あり、下層は炭を含む。埋土上には丘陵側の土砂が厚く覆う。 ・底面で炭土壙、焼土壙検出。 ・SW・SE区では炭層が墳丘を取り巻く。
内 部	掘形	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ13.0 ・幅3.2 ・深さ0.6(奥) 	<ul style="list-style-type: none"> ・基底面の中央にあり、地山を掘り込む。 ・底は南東側がゆるやかに下る。
	玄室	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式(B類) ・長さ3.1(東) ・幅1.85(奥)、2.0(中央) ・現存高0.8 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は基底石2個のみ。同規模のものを立てて据える。 ・東壁は基底石6個と上段が1個残存する。袖石寄りのものが最も小さく、袖石との隙間には小石を詰める。 ・西壁も基底石4個と上段1個が残存する。
	羨道	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ6.8 ・幅1.3 ・現存高2.1 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は3段目まで残る。持ち送り10°。袖石は巨石を立てて据える。基底石は6個あり袖石寄りが最も大きい。 ・西壁は2段目まで残る。持ち送り15°。袖石は抜き取られている。基底石は7個ある。 ・天井石は玄室と合せて6個残っていたが、原位置のものはみられなかった。
	床面・閉塞	<ul style="list-style-type: none"> ・奥から5mまで敷石面。 ・閉塞は7m付近にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形底に厚さ0.1m土を入れ、上面に小礫を敷き詰める。 ・閉塞は組み方がまばらで土が多い。

出土遺物	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 27 点 (杯 A9、蓋 A7、無蓋高杯 A4、直口壺 B1、短頸壺 C1、長頸壺 A1・B1、脚付長頸壺 A1・B1、小型甕 1) ・土師器 3 点 (碗 2、長頸壺 1) ・鉄刀 2 点、鉄鏃 11 点、耳環 1 点
出土状況	<ul style="list-style-type: none"> ・玄室では奥壁付近で鉄鏃 (30～39)、鉄刀 (42)、耳環 (47) が、東袖石付近では須恵器杯 (4・7)、蓋 (14)、無蓋高杯 (18)、長頸壺 (23・24)、鉄刀 (40・41・43・46) が、西袖石付近では杯 (1・3・5)、蓋 (13)、無蓋高杯 (19)、土師器碗 (27)、鉄刀 (44・45) が出土した。以上は完形品が多く追葬時に片付けられたものとみられる。 ・羨道では敷石部分で杯 (8)、蓋 (15)、無蓋高杯 (16)、脚付長頸壺 (26) が、敷石のない部分では蓋 (9・11・12)、短頸壺 (20)、脚付長頸壺 (25) が出土した。これらは床面敷石に密着したものもあり原位置を保つとみられる。 ・閉塞石の中では杯 (2)、無蓋高杯 (17)、小型甕 (22) が、その外側には土師器長頸壺 (28) が出土した。

- ・墳丘の東半分は完全に削平されていたが、石室床面や遺物の残りは良好であった。
- ・墳丘のまわりで炭層と、焼土壌を 2 箇所検出した。
- ・周溝底部で当初掘られた周溝を検出した。
- ・主体部の石室は残りが悪く、羨道東壁の一部以外は基底石をとどめるのみであった。
- ・主体部の横穴式石室は 18・23 号墳と同様の規模を持つ。
- ・遺物の出土状況や土器類の型式差から追葬が想定できる。
- ・この古墳は早くから石室内に土砂が流れ込んだため、遺物の残りが良く、22 号墳と共に古墳出土遺物の内容を知る好例となった。



第14図 25号墳遺物出土位置図(1:60)

2 調査方法

24号墳（図版54）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘	墳 丘 ・ 封 土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（Ⅲ類） ・直径 15.0 ・高さ 1.0（東から） ・墳頂標高 135.0 ・基底面は北西側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は 1 層残存する。
	周 溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NE 区で検出した。 ・幅 0.8、深さ 0.1 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山（赤褐色砂泥層）を掘り込む。 ・埋土は 2 層あり、上層に炭を含む。
内 部 主 体		<ul style="list-style-type: none"> ・不明 	

・主体部の形状は不明であるが、周溝や炭層の存在から古墳と判明した。

26号墳（図版19・36・47・54・79）

		形態・規模（単位 m）	構築技法の特徴
墳 丘	墳 丘 ・ 封 土	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳（Ⅳ類） ・直径 9.9 ・高さ 1.1（東） ・墳頂標高 133.3 ・基底面は北西側が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・封土は 2 層に大別できる。 ・第 1 層は墳丘全面に盛る。 ・第 2 層は掘形埋土で、基底石を固定する。
	周 溝	<ul style="list-style-type: none"> ・NW・SW 区で検出。 ・幅 1.3、深さ 0.2 ・南側へ行くほど浅い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地山（赤褐色砂泥層）を掘り込む。 ・埋土は 1 層（黄褐色砂泥層）のみで、部分的に炭層がみられる。
内 部 主 体	石 室	<ul style="list-style-type: none"> ・無袖式？ ・現存長 3.35 ・幅 1.35 ・現存高 0.75 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は未検出。 ・東壁は基底石 2 個と上段に小石が 1 個残る。2 個の基底石は同大で、横積みする。 ・西壁は基底石 6 個と 2 段目が 1 個残る。基底石は中の 2 個がやや大きく、縦ないし横積みする。
遺 内 容		<ul style="list-style-type: none"> ・須恵器 2 点（蓋 B1、甕 1） 	
出 土 状 態		<ul style="list-style-type: none"> ・蓋（1）は周溝から出土。甕は墳丘上面から出土した。 	

・主体部の横穴式石室は、大きさや墳丘規模からみて無袖式の可能性が高い。

・須恵器蓋 B の出土は、この古墳が唯一である。

・見通しのきかない丘陵部に単独で立地する点に特色がある。

3 保存古墳の調査

		形態・規模 (単位 m)	構築技法の特徴
15 号 墳	墳 丘	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳 (Ⅱ類) ・直径 18.5 ・高さ (前 6.2、後 0.2) ・墳頂標高 130.3 	<ul style="list-style-type: none"> ・12号墳と並んで丘陵南西斜面に立地する。 ・墳丘背後には周溝の存在が推定できる。
		内 部 室	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式 (A類) ・長さ 3.7 ・幅 2.0 ・現存高 3.0
	主 体 道	<ul style="list-style-type: none"> ・現存長 6.0 ・幅 1.2 ・現存高 2.1 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は3段積み、持ち送り 8°。袖石は長さ1mの石材の直角面を内にして据える。基底石は2個確認できる。 ・西壁は3段積み、持ち送り 5°。袖石は長さ1.4mの大型石材の直角面を内にして据える。基底石は2個以上。 ・天井石は3個残存、袖石上のものが最も低い。
	(図 版 23 ・ 遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・1970年の調査で、須恵器杯A、無蓋高杯A、鉄製品(馬具・釘)が出土。 	
18 号 墳	墳 丘	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳 (Ⅲ類) ・直径 15.5、高さ 2.7 (前) ・墳頂標高 127.9 	<ul style="list-style-type: none"> ・15・20号墳と同じ丘陵南西斜面に立地する。 ・墳丘背後には周溝の存在が推定できる。
		内 部 室	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式 (B類) ・長さ 3.2 ・幅 1.7 ・現存高 2.2
	主 体 道	<ul style="list-style-type: none"> ・現存長 2.6 ・幅 1.2 ・現存高 1.35 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は袖石のみ認められる。袖石は長さ0.7mあり、直角面を内にして据える。 ・西壁は2段あり、持ち送り 8°。袖石は横積みし、直角面を内にして据える。 ・天井石は袖石上に架構された1個が残る。
(図 版 24 ・ 66)			

2 調査経過

		形態・規模(単位 m)	構築技法の特徴
20号墳	墳丘	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳(Ⅱ類) ・直径 20.0 ・高さ(前 4.7、後 0.3) ・墳頂標高 131.2 	<ul style="list-style-type: none"> ・21号墳と並んで丘陵南西斜面に立地する。 ・墳丘南側が削平され、石室の一部が露出している。 ・墳丘は丘陵側からの土砂でかなり埋没しているが、背後には周溝の存在が推定できる。
	内 部	<ul style="list-style-type: none"> ・両袖式(A類) ・長さ 3.65 ・幅 2.2 ・現存高 2.6 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥壁は4段積み、持ち送り 13°。基底石は同大のもの2個。 ・東壁は5段積み、持ち送り 18°。基底石は2個確認できる。奥壁側が高い段積みとなる。壁面中央は土圧で崩れる。 ・西壁は5段積み、持ち送り 6°。基底石は5個あり、奥のものが大きい。3・4段目に大型石材を用いる。 ・天井石は2個あり、南側に大型のものを架構する。
	羨道	<ul style="list-style-type: none"> ・現存長 2.5 ・現存幅 1.0 ・現存高 1.6 	<ul style="list-style-type: none"> ・東壁は袖石と南側の一部が確認できる。袖石の長さ 1.3m ほどのものを立てて据える。 ・西壁も袖石とその南側の一部が確認できる。袖石は長さ 1.4m のものを立てて据える。東壁より大型の石材を用いる。 ・天井石は2個確認できる。底は袖石上のものが低い。

		形態・規模
1号墳	立地状況	<ul style="list-style-type: none"> ・古墳群の中心部から南へ約 400m の丘陵斜面に立地する。 ・墳丘は削平をうけ平坦。墳頂に祠がある。
	墳丘	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳(Ⅲ類) 直径約 16m 高さ約 1m 墳頂標高 99m
	内部主体	<ul style="list-style-type: none"> ・横穴式石室(両袖式) ・玄室長 7.7 尺(2.3m) 幅 7.45 尺(2.2m) 高さ 7.4 尺(2.2m) ・羨道長 8.0 尺(2.4m) 幅 4.65 尺(1.4m) 高さ 4.9 尺(1.4m) ・1914年の調査では以上のように報告されているが、玄室の平面形は正方形に近いものとなり、今回の調査古墳には類例のない石室である。
2号墳	現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・1914年の調査では1号墳の西隣で確認されていたが、現在は竹藪となってその存在を確認することはできない。
6号墳	立地	<ul style="list-style-type: none"> ・古墳群中心部の南端にあり、丘陵裾部に立地、墳丘の南東側は削平されている。
	墳丘	<ul style="list-style-type: none"> ・円墳(Ⅱ類) 直径 18.5m 高さ(前 3.6m、後 2.0m) 墳頂標高 121.6m ・墳丘背後に周溝の存在が推定できる。
	内部主体	<ul style="list-style-type: none"> ・不明。

第3章 古墳群の調査

		形態・規模	
7号墳 (図版21)	立地	・6号墳と近接して同一丘陵裾部に立地。墳丘南側は小道で削平されている。	
	墳丘	・円墳(Ⅱ類) 直径18.5m 高さ(前5.6m、後2.2m) 墳頂標高124.9m ・墳丘背後に周溝の存在が推定できる。	
	内部主体	・盗掘壕からみて南に開口する横穴式石室と推定できる。	
8号墳 (図版21)	立地	・古墳が密集する平坦地の南端に位置する。南側は急斜面となっている。	
	墳丘	・円墳(Ⅲ類) 直径14.5m 高さ(前2.6m、後1.3m) 墳頂標高121.8m	
	内部主体	・墳丘上に露出した石材から、南に開口する横穴式石室と推定できる。	
9号墳 (図版21)	立地	・8・10号墳と近接して同じ平坦面上に立地する。	
	墳丘	・円墳(Ⅲ類) 直径16m 高さ1.4m(西) 墳頂標高121.7m	
	内部主体	・墳丘上に露出した石材から、南に開口する横穴式石室と推定できる。	
10号墳 (図版21)	立地	・9・11号墳と近接して同じ平坦面上に立地する。	
	墳丘	・円墳(Ⅲ類) 直径15m 高さ(前2.1m、後0.7m) 墳頂標高122.2m	
	内部主体	・露出した石材の一部から見て、南に開口する横穴式石室と推定できる。	
11号墳 (図版21)	立地状況	・10・16号墳と近接し、古墳群中心部の中央に位置する。封土の上半分が失われ、石室が露出している。石室内下半分は土砂が堆積する。	
	墳丘	・円墳(Ⅱ類) 直径19.5m 高さ(前2.6m、後1.6m) 墳頂標高124.6m	
	内部主体	玄室	・横穴式石室(両袖式A類) ・長さ3.6m 幅2.0m 現存高1.0m ・奥壁は3段目まで認められる。長さ0.5m前後の石を用い最上段に大型石材を用いる。 ・東壁、西壁はともに2～3段目まで認められる。やや持ち送りがある。石材は大きさ不揃いで段積みも不明瞭、壁面は土圧で内傾する。 ・天井石は3個あるが、いずれも原位置はとどめていない。
		羨道	・長さ2.0m 幅1.1m 高さ0.5m ・東壁、西壁とも1～2段目まで認められる。 ・東壁の袖石は長さ0.8m以上のものを立てて据える。上段石材は大きさ不揃い。 ・天井石は2個残る。袖石上のものが原位置をとどめる。

2 調査経過

		形態・規模
12号墳 (図版22)	立地	・15号墳と近接した同じ丘陵斜面に立地する。
	墳丘	・円墳(Ⅲ類) 直径16m 高さ(前3.8m、後0.9m) 墳頂標高126.2m ・墳丘背後に周溝の存在が推定できる。
	内部主体	・盗掘壙からみて南に開口する横穴式石室と推定できる。
16号墳 (図版22)	立地 現状	・11・19号墳と近接して、古墳群中心部の平坦地上に立地する。 ・墳頂南側には盗掘壙があり、石室の一部が露出している。
	墳丘	・円墳(Ⅰ類) 直径23.5m 高さ(前4.7m、後3.2m) 墳頂標高127.3m ・墳丘の規模は古墳群の中でも最大である。
	内部主体	・露出した石室の一部から、南に開口する横穴式石室と推定できる。
19号墳	立地 現状	・古墳の密集する平坦地に位置する。 ・墳丘は削平が著しく、主体部は盗掘をうけ石材が散乱する。
	墳丘	・円墳(Ⅳ類) 直径11m 高さ(前1.7m、後0.4m) 墳頂標高125.2m
	内部主体	・盗掘壙からみて、南東に開口する横穴式石室と推定できる。

第4章 出土遺物

出土遺物には土器類と金属製品があるが、大半は土器類である。調査古墳のほとんどが盗掘を受けていたために、遺物の出土量は多くはないが、22・25号墳からはまとまった遺物が出土し、良好な一括資料となった。以下、土器類・金属製品の順に概要を述べる。

1 土器類

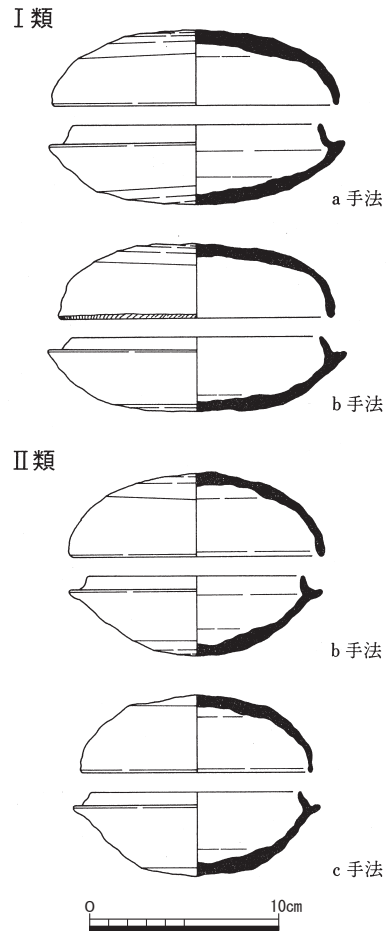
土器類には、須恵器と土師器がある。土器類の出土総個体数は152個体で、このうちの約9割が須恵器である。

(1) 須恵器

須恵器には、杯A、蓋A・B、無蓋高杯A・B、有蓋高杯・同蓋、直口壺A・B、短頸壺A・B・C、壺蓋、長頸壺A・B、脚付長頸壺A・B、脚付子持長頸壺、甗、提瓶、甕がある。

杯A・蓋A 杯Aと蓋Aは組み合い、26号墳を除くすべての古墳から出土した。杯A・蓋Aは大きさによって形態に変化が認められるので、これをI類とII類に分けて扱う。これを、さらに底部・天井部の調整手法の差異に基づいて、a手法（中央部まで丁寧にヘラケズリ調整するもの）、b手法（ヘラケズリ調整が粗雑で、中央部を削り残すもの）、c手法（ヘラケズリ調整を施さないもの）に区別する。

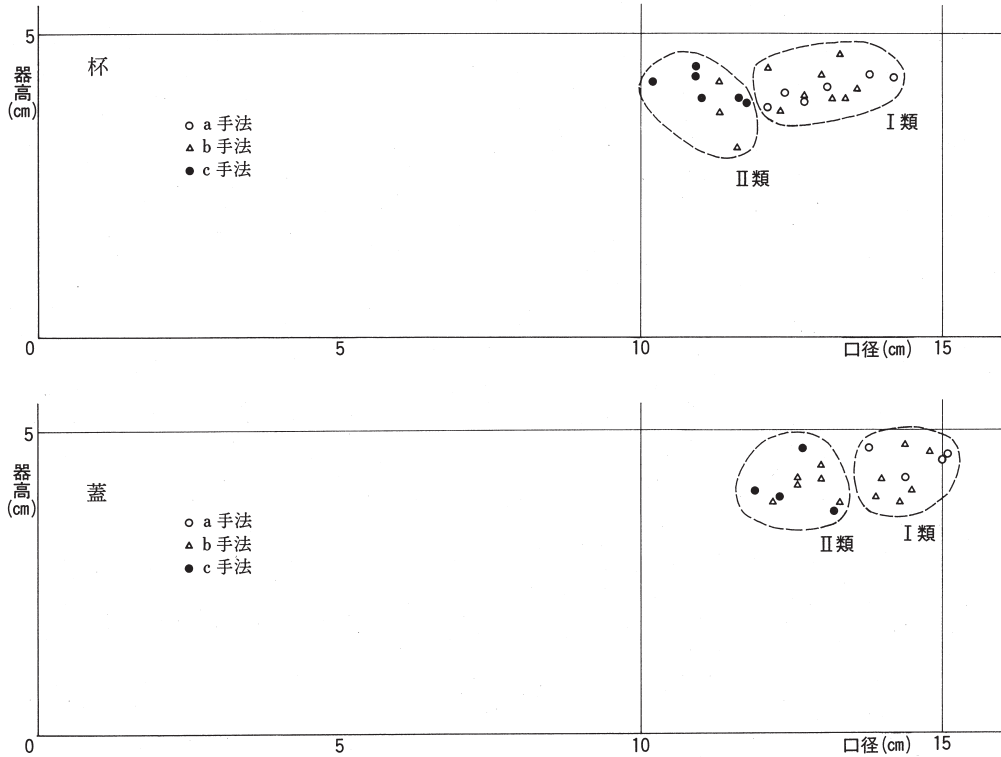
I類の杯Aは、口径12.0～14.0cm、器高4.5～5.0cm、器形は全体に扁平で、底部は平坦、立ち上りは内傾する。I類の蓋Aは、口径13.5～15.5cm、器高3.5～5.0cmで、天井部は丸味を帯び、口縁部との境には稜はみられない。I類



第15図 須恵器杯・蓋調整手法 (1:4)

1 土器類

第5表 須恵器杯・蓋法量表



の杯A・蓋Aにはa手法とb手法が認められる。

II類の杯Aは、口径10.0～12.0cm、器高3.0～4.5cm前後で、器形は逆台形を呈するものが多い。底部は平坦であるが、中央部が尖るものもみられる。立ち上りはI類に比べさらに低く内傾する。II類の蓋Aは、口径11.5～13.5cm、器高3.5～5.0cmで、天井部は平坦であるが、中央部が尖るものもある。II類の杯A・蓋Aには、b手法とc手法が認められる。

I類の杯A・蓋Aは、4・14・21・22・23・24・25号墳から、II類の杯A・蓋Aは、4・5・14・21・22・23・25号墳から出土した。なお、14号墳の杯A(14-1)は、形態や調整手法が他の杯Aと異なっている。

蓋B 口縁部の内面にかえりを持ち、天井部に宝珠形のつまみを付けたものである。26号墳で1点出土している。この蓋Bと組み合う杯は出土していない。

無蓋高杯A 小型の杯部に2段透しの入った長脚を付けたものである。脚部の透し孔は3方のもの(4点)と2方もの(6点)がある。透し孔の形態は、長方形が一般的であるが、

第3章 古墳群の調査

第6表 出土遺物一覧表（器形と出土位置）

		4号墳		5号墳		14号墳		21号墳		22号墳		23号墳		24号墳		25号墳		26号墳		小計	
		石室内	閉塞前	石室内	閉塞前	石室内	墳丘前	周溝内	石室内	石室内	墳丘前	周溝内	石室内	墳丘前	周溝内	石室内	閉塞前	墳丘前	周溝内		
須 恵	杯	A	4	3	2		3		1	5	8		2	3	1	6	1	2		41	
		A	8	1	3			1		4	6	2	5	2	2		6	1		41	
	蓋	B																	1	1	
		無蓋	A	1		1	1			2	3		1	1			3	1			14
			B				5				1										6
		有蓋	蓋					1	1			3									5
	蓋						1				3									4	
	直口壺	A								1										1	
		B													1					1	
	短頸壺	A								1										1	
		B									1									1	
		C													1					1	
壺	蓋							1		1	1								3		
長頸壺	脚無	A													1				1		
		B					1	1	2						1				5		
	脚付	A								1						1				2	
		B	1										1			1				3	
	子持										1								1		
甃									1										1		
提瓶		1																	1		
甕							1										1	1	3		
小計		15	4	6	6	5	3	2	10	22	16	7	6	5	1	21	4	2	2	137	
土 師 器	椀														2				2		
	高杯								1										1		
	長頸壺	1		1						2						1			5		
	甕	A		1																1	
		B			1	1			1	1	1			1						6	
小計		1	1	2	1			1	3	1			1		2	1			15		
金 属 製 品	鉄鍬			5					3						11				19		
	刀子					2			1		1								4		
	鉄刀					1									2				3		
	耳環	1					1		2	1						1			6		
	小計		1		5		3	1	6	1		1			13	1			32		

1 土器類

三角形のもの(4-16、25-18)や、ヘラ描線だけのもの(22-26)もある。杯部には、櫛描波状文(23-9)や列点文(21-6、22-27、25-16・18)を施すものもみられるが、無文のものが最も多い。14・24・26号墳を除くすべての古墳から出土した。

無蓋高杯B 蓋Aを逆にして杯部とし、これに外反する短脚を付けたものである。5号墳で一括して5点出土した他、22号墳でも脚部の破片が出土した。

有蓋高杯 杯A I類を杯部に用い、これに2段透しの入った長脚を付けたものである。透し孔はすべて長方形を呈し、三方に穿たれている。杯部の調整は、杯A I類より丁寧である。この高杯に組み合う蓋は、蓋A I類の天井部に扁平なつまみを付けたものである。14・22号墳で出土したが、14号噴出土の(14-5)はより古い要素をとどめている。

直口壺 口縁部が直立するA(22-30)と、口縁部が外反するB(25-21)がある。いずれも体部下半を丁寧にヘラケズリ調整する。(25-21)は肩部にヘラ記号を持つ。A・B共に1点ずつ出土した。

短頸壺 体部が球形で口縁部が内湾するA(22-31)と、体部が扁平で口縁部が直立するB(22-32)、体部が扁平で口縁部が外反するC(25-20)がある。いずれも体部下半をヘラケズリ調整する。(25-20)は肩部に凹線をめぐらす。各1点ずつ出土した。これらに組み合う蓋は、22号墳から2点出土した。

長頸壺 頸部が太く肩部の丸いA(14-7、25-23)と、頸部が細く肩部の張るB(21-11、25-24)がある。いずれも体部下半を丁寧にヘラケズリ調整する。Aはカキメを施し、Bは肩部に凹線をめぐらす。各1点ずつ出土した。

脚付長頸壺 長頸壺の底部に有段の脚を付けたものである。体部が球形のA(22-34、25-26)と、肩の張ったB(4-17、23-10、25-25)がある。Bは長頸壺Bに脚を付けたものである。脚部の透し孔は長方形で、2方ないし3方に施される。4・22・23・25号墳から5点出土した。

脚付子持長頸壺 脚付長頸壺の体部に凸帯をめぐらせ、この上に小壺を6個配置した装飾付土器である。脚部は太く、透し孔は長方形のものが2段3方に施される。体部下半と脚部にはヘラ描条線文が施される。22号墳で1点出土した。

甗 細い頸部から大きく外上方に開く口縁部と、扁平で小さな体部を持つ。口縁部と体部の外面にはヘラ描条線文が施される。底部内面には円孔を穿った際の粘土がそのまま付着している。22号墳で1点出土した。

提瓶 扁平な体部の側面に口縁部を付けたものである。体部外面にはカキメが施される。

耳の有無は不明である。4号墳で1点出土した。

甕 大型のものと小型のもの(25-22)がある。大型のものは14・26号墳から出土したが、小破片のため図示することはできなかった。小型のものは25号墳で1点出土した。

(2) 土師器

土師器には、椀、高杯、長頸壺、甕A・Bがある。

椀 小型の椀である。口縁部は内湾気味で、底部は丸い。内面の暗文は認められない。25号墳で2点出土した(25-27)。

高杯 小型の高杯である。21号墳で1点出土した(21-8)。

長頸壺 やや扁平な体部に細長い口縁部を持つ。4・5・22・25号墳から出土したが、25号墳出土のもの(25-28)以外は図示できなかった。

甕 長胴のA(4-19)と、胴部が球形のB(5-11)がある。Aは4号墳で1点、Bは5・14・22・23号墳から出土した。

2 金属製品

金属製品には、鉄鏃、刀子、鉄刀、耳環がある。

鉄鏃 長頸鏃と短頸鏃の両方がある。鏃身の形態は、長頸鏃では柳葉形のみであるが、短頸鏃には、A(長三角形)、B(柳葉形)、C(長三角形で逆刺をもつもの)がある。Cには大型(21-13、25-37・38)と、小型(25-36)がある。短頸鏃Aは5・21号墳の主体を占め、Bは25号墳の主体を占める。Cは21・25号墳から出土した。長頸鏃は5・21・25号墳から各1点ずつ出土した。

刀子 身が細く、関が棟側に付くA(14-8、21-15、22-36)と、身が太く、関が両側に付くB(14-10)がある。Aは14・21・22号墳から、Bは14号墳から出土した。

鉄刀 いずれも長さ40cm程度のものである。刀身に錆はなく、関は胸と刃の両側に付く。14号墳で1点、25号墳で2点出土した。(25-43)の鏢・釧・柄頭には銀象嵌が施されている。

耳環 銅芯に、金または銀の薄板を巻き付けたものである。(4-20、14-11、21-16・17、22-37)は銀張り、(25-47)は金張りである。

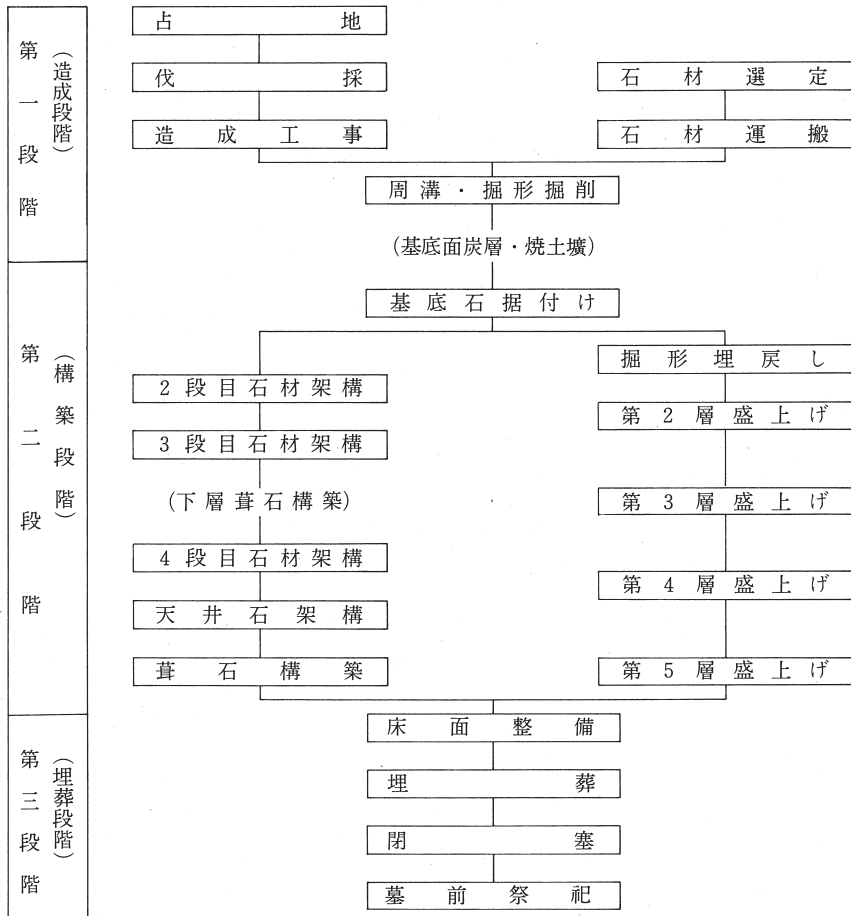
第5章 考 察

1 墳丘・石室の検討

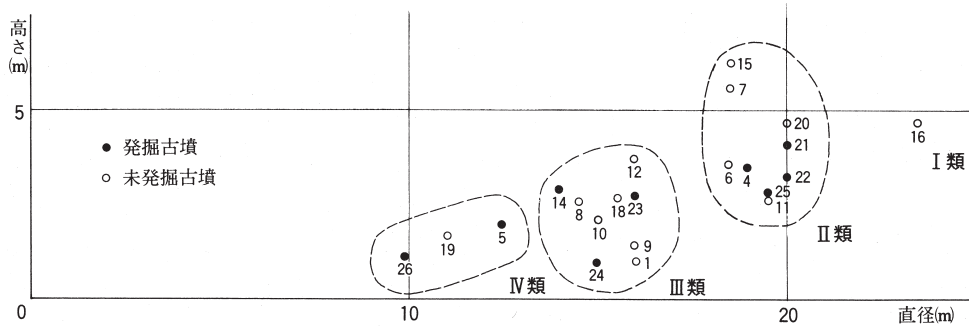
(1) 築造工程の概略

今回の調査では四分法によって墳丘の全面調査を行ったために、古墳の築造に関する様々な知見を得ることができた。ここでは、まずこれらの工程を概述した上で、これに沿う形で墳丘・石室の細部について検討を加えることにしたい。

第7表 (推定) 古墳築造工程表



第8表 墳丘規模比較表



古墳の築造工程については、第7表に示した3段階に大別して考えることができる。第1段階は墓域の決定から始まって地山面を平坦にする造成工事と周溝及び石室掘形の掘削までである。第2段階は墳丘・石室の構築を始めて、全体を整備する段階である。そして古墳の築造が終了し死者を埋納するのが第3段階である。

(2) 墳丘施設について

形状及び規模 調査した9基の古墳はすべて円墳である。これらの中で最大のものは、直径20m、高さ3.2mを測る22号墳である。最小のものは5号墳で、直径12.5m、高さ2mを測る。

調査・未調査古墳の墳丘規模を比較したのが第8表である。未調査古墳の数値には問題も残るが、現状では直径23.5mを有する最も大きい16号墳をI類とし、以下、直径20～18mのものをII類、直径17～14mのものをIII類、それ以下のものをIV類に分類した。

これら墳丘規模の分類は、後述する横穴式石室の規模や築造時期とも密接に関連し、重要である。

墳丘基底面 丘陵斜面に立地する古墳では、斜面の高い部分を削って低い方を整地する墳丘基底面の造成作業が行われている。このため、墳丘基底面は高い部分で地山の赤褐色砂泥層が、低い部分では整地された状態の黄褐色砂泥層がみられた。墳丘基底面の傾斜角度は第9表に示す通りである。なお、4・14・22号墳ではこの基底面上で薄い炭層の広がりを検出している。

周溝 主に丘陵側で明瞭に認められた。幅2m、深さ0.5m前後のものが一般的で、断面の形状はU字形を呈している。基底面上で作成した測量図をみると、墳丘をめぐる周溝の形状は正円形でなく、石室に直交する方向にやや広がる点が注意される。周溝の埋土は墳丘封土や丘陵側の土砂が流れ込んだものからなっているが、部分的には炭層も含まれてい

1 地理的環境

第9表 墳丘基底面傾斜角度表

4	号	墳	4°30′
5	号	墳	7°30′
14	号	墳	7°30′
22	号	墳	6°30′
23	号	墳	10°00′
25	号	墳	6°00′

た。また周溝底面では炭土壌や焼土壌も検出している。

封土 墳丘封土の盛り上げは、石室の架構と平行して行われている。天井石をとどめた3基の古墳では、封土は4～5層に大別できた。最上層は天井石及び側壁上段の石材を覆うもので、墳丘全体を形づくる層である。第2・3層は側壁2・3段目の石材に対応して盛られており、石室背後の狭い範囲に認め

られた。第4・5層は基底石を固定する際の掘形埋土である。また、これらの封土各層間で灰白色粘土の薄い層が認められた。この粘土層は基底面の下部に堆積する大阪層群の淡水性の粘土層で、封土の流失を防ぐことや石材を運び上げる際の足場補強に用いられたと想定できる。

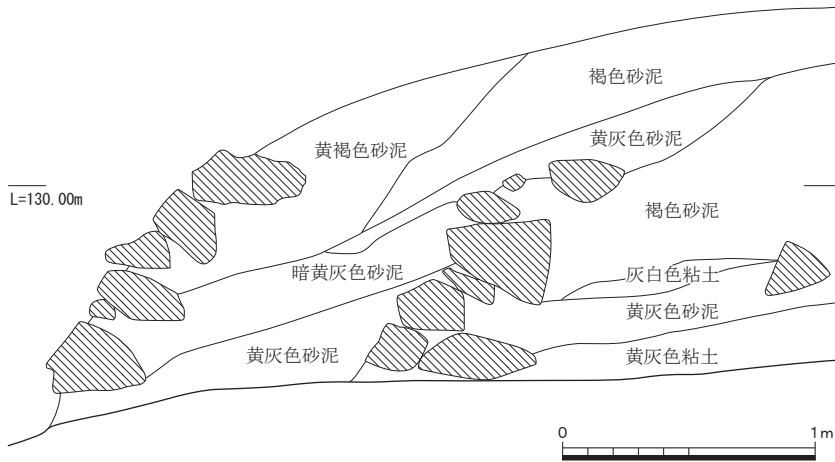
なお、封土は全体からすれば上半部ほど赤褐色砂泥層、下層ほど黄灰色系の粘土層を中心に構成されていたが、これは酸化の度合や植生の影響などと共に、造成段階で生じた土を墳丘の構築に際して再び利用したためと考えられる。

葺石 4・5・14・22・25号墳では、墳丘の前面で葺石を検出している。これらの葺石はいずれも石室開口部の両側に施されており、墳丘の上半部や丘陵側ではまったく認められなかった。検出した葺石の中では、14・22号墳のものが最も残りが良く、特に22号墳では開口部から東へ6m、西へ12mにわたって最高1.5m(5段)の高さまで残存していた。

葺石に用いられた石材は人頭大のチャート・砂岩の自然石である。その積み方は小口面を外に横積みし、重心が背後の墳丘にかかるようにして封土で固定されている。封土を用いながら積み上げる点では石室石材の架構と同じ工法をとるが、石材の平坦面を意識せずに無造作に積み上げる点は異なっている。

また、墳丘の外表面に施されたこれらの葺石とは別に、封土の下に存在する下層の葺石を検出している。これらの下層葺石には、羨道の背後から斜め方向に積まれるもの(5・22・25号墳)や、小さな石材を張り付けた状態のもの(4・14号墳)がみられた。下層葺石は墳丘封土の第3層、つまり側壁石材の第3・4段目を固定する際に盛られた封土に対応して施されており、これも封土の崩壊を防ぐ目的で行われた土留め工程の一種とみることができる。^{注1}

なお、このような群集墳に伴う葺石については、京都市内ではすでに右京区御堂ヶ池



第16図 22号墳葺石断面図(1:30)

古墳群の調査でその存在が知られていたが、近年、亀岡市内でも小金岐古墳群^{注3}、栞田古墳群^{注4}、医王谷古墳群^{注5}などの調査で検出されている。

この他、終末期に属する山科区旭山D-4号墳^{注6}(方墳)や、右京区音戸山7・8号墳^{注7}(方墳)では、墳丘前面に一列に並ぶ列石が検出されているが、これらは葺石の退化形態とみることができ、方墳の採用とあいまって墳丘施設の変遷を知る興味深い事例といえる。

(3) 横穴式石室の形態と構築過程

形態分類 本古墳群の横穴式石室については、京都大学考古学研究会の報告^{注8}で4・15・20号墳の規模と形態が類似する点が指摘されていたが、今回の調査で新たに7基の資料(5・14・21・22・23・25・26号墳)を加え、より詳細な比較研究が可能となった。

現在、古墳群の中で石室の内容が判明しているものは合計12基である。その内訳は、両袖式9基、片袖式2基と無袖式とみられる1基で、現状ではこれらをA類・B類・B'類・C類に分類することができる。

(A類) 古墳群の中では最も規模の大きい両袖式の石室である。調査した4・21・22号墳の他、11・15・20号墳の石室がこれに属する^{注9}。玄室規模は長さ3.6m、幅2.2m前後で、これに長さ7.5m、幅1.4m前後の羨道が取り付く。石室全長は11m前後で、II類の墳丘と対応する。4・22号墳では袖石の位置はよく一致しているが、玄室幅、羨道幅、羨道長や軸線は完全には一致しない。これらは、施工時の誤差とみることができる。

(B類) A類に次ぐ規模の両袖式石室である。23・25号墳と開口している18号墳の石室がこれに含まれる。玄室はやや胴が張る。長さ3.1m、幅1.9m前後の規模を持ち、これ

1 地理的環境

に長さ 6m、幅 1.3m 前後の羨道が取り付く。石室全長は 9m 前後で、25 号墳（Ⅱ類）を除くとⅢ類の墳丘に対応する。

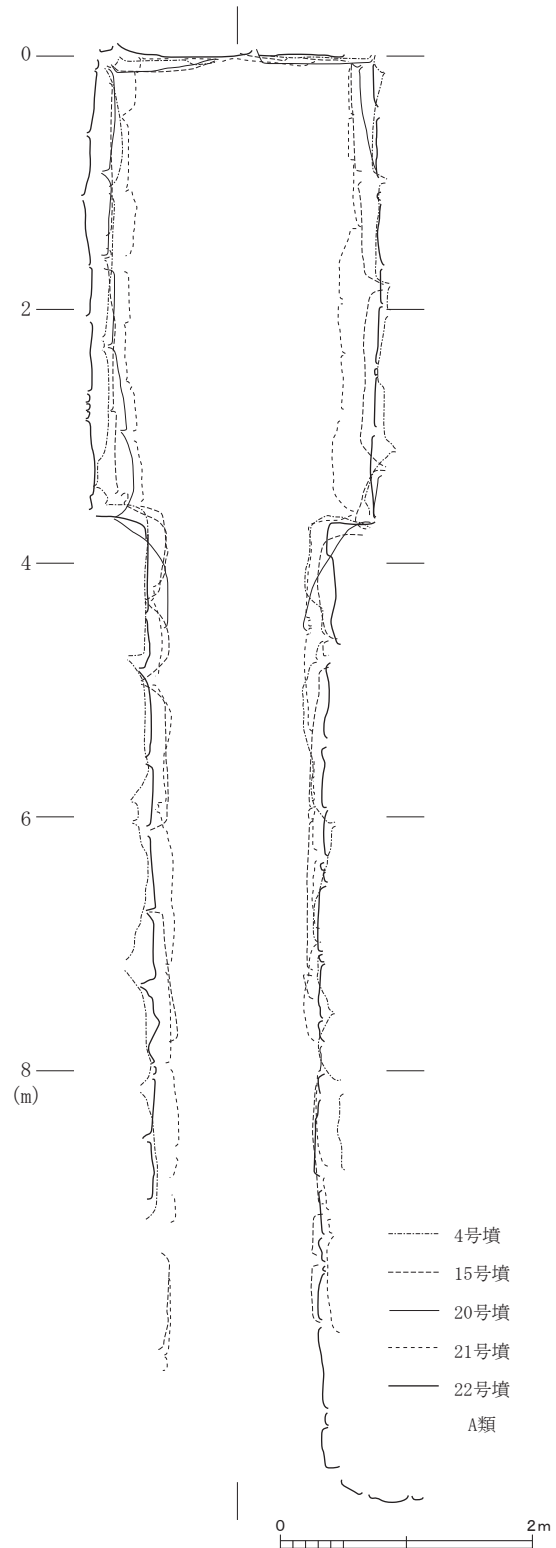
（B'類） B類の玄室を片袖式とし、これに長さ 5.5m、幅 1m 前後の小型化した羨道を取り付けたものである。14 号墳が唯一の例である。石室全長は 8.7m、Ⅲ類の墳丘と対応関係にある。

（C類） 長さ 2.4m、幅 1.4m を有する玄室に、長さ 4.0m、幅 1.0m の短い羨道が取り付く小型の横穴式石室である。5 号墳が唯一の例で、石室全長は約 6m、Ⅳ類の墳丘に対応している。

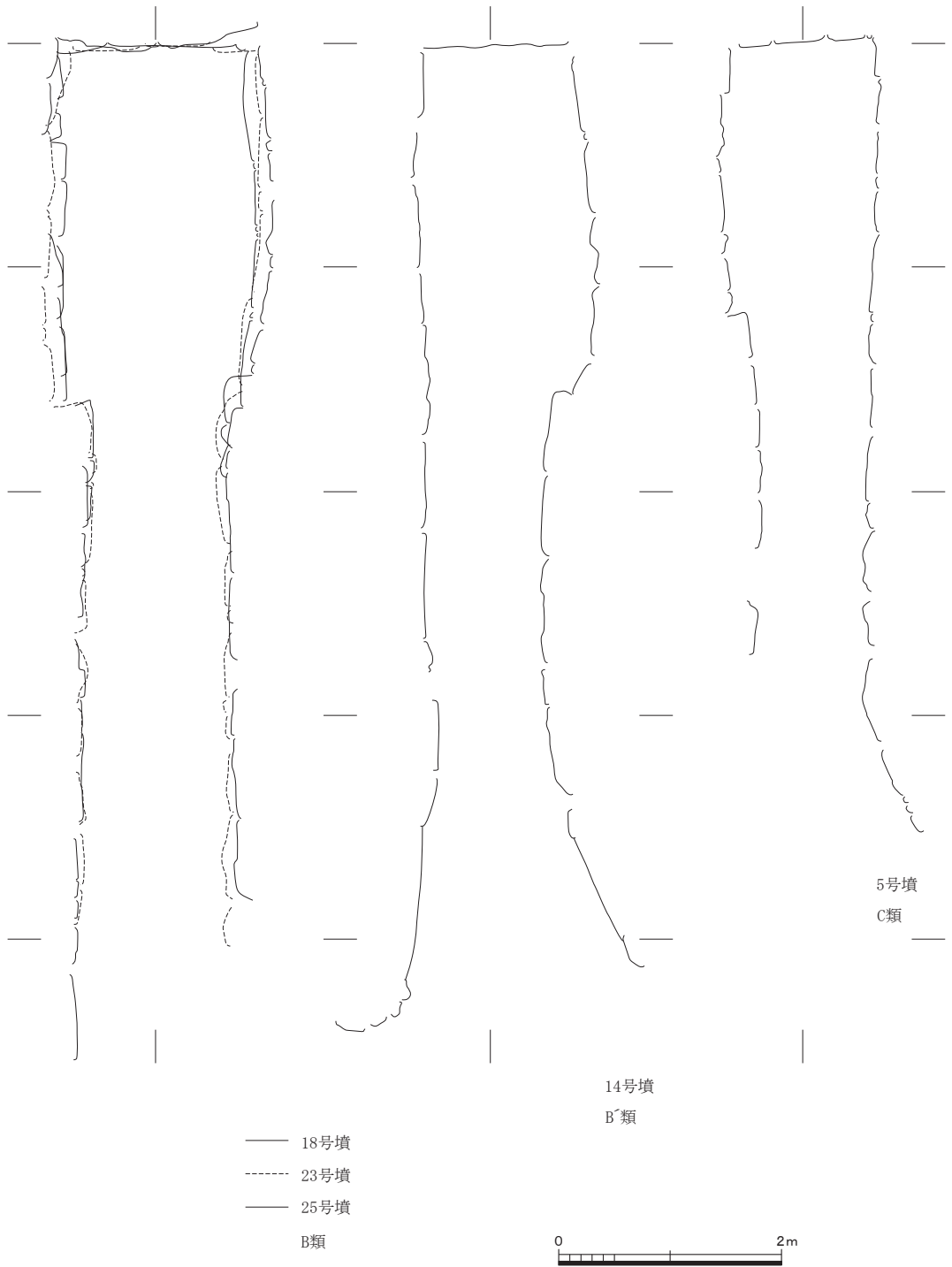
なお、26 号墳は形態・規模が明確でないため、以上の形態分類からは除外した。

構築の諸段階

（石室の位置決定） 主体部の横穴式石室は墳丘のほぼ中央に構築されているが、その位置は各古墳によってわずかに異なっている。墳丘と石室の位置関係を示した第 18 図^{注10}をみると、石室が墳丘の中央に設けられているもの（5・25 号墳）、東側に設けられているもの（4・14 号墳）、西側に設けられているもの（22・23 号墳）があることがわかる。

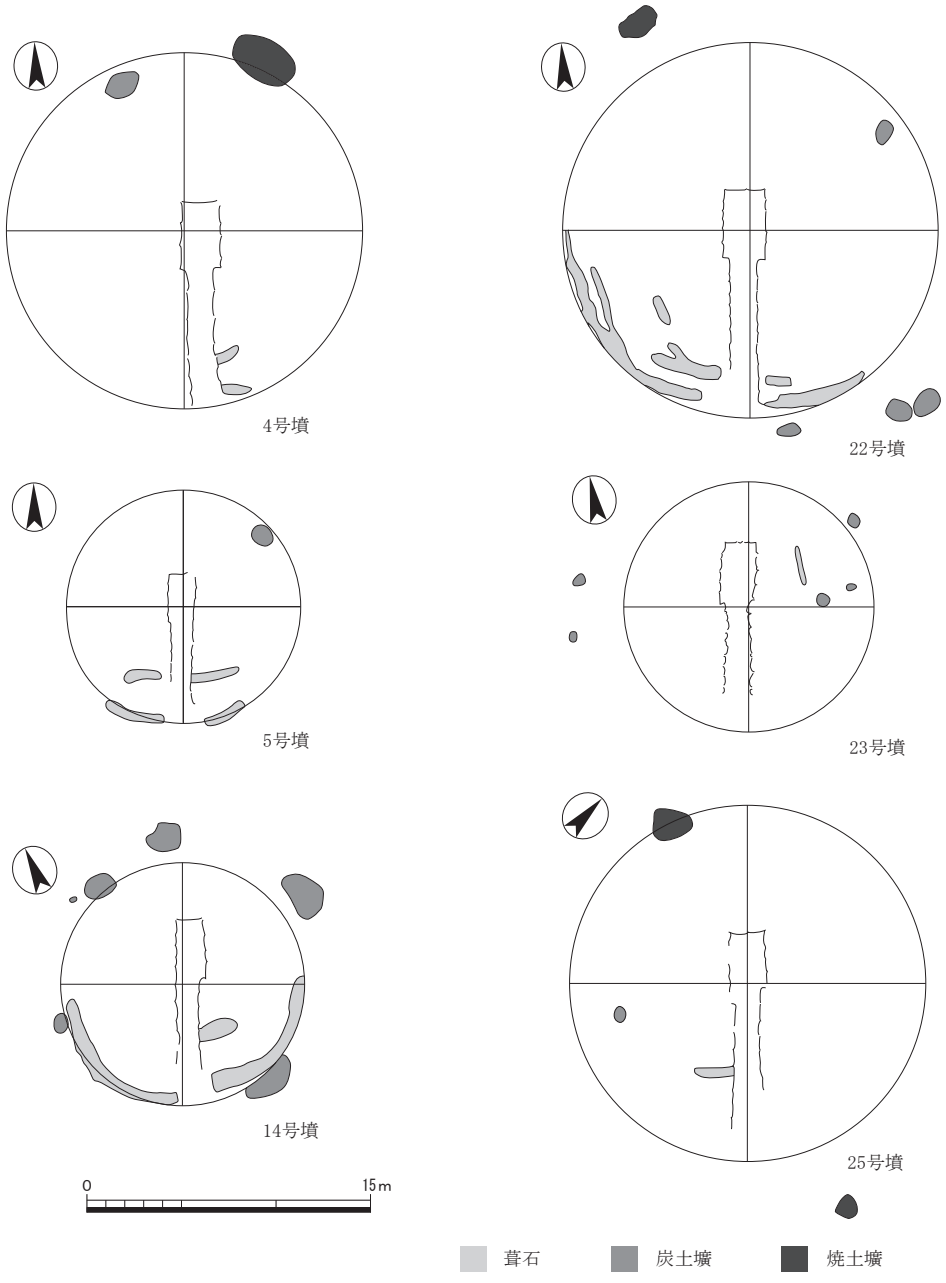


-50- 第17-1図 石室平面比較図(1:60)



第17-2図 石室平面比較図(1:60)

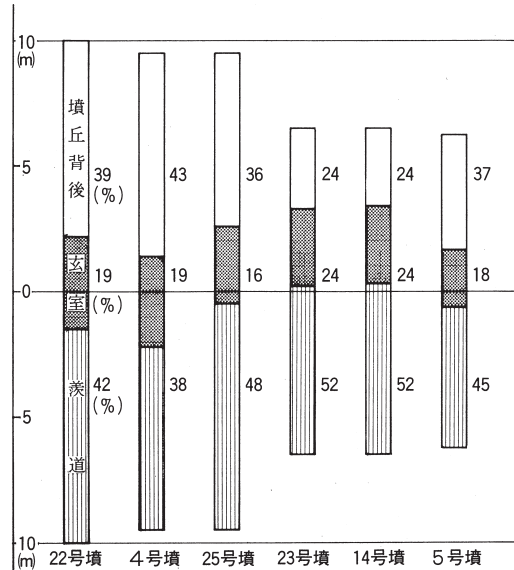
1 地理的環境



第18図 墳丘と石室の位置関係(1:400)

こうした差は、基底面上に石室掘形を穿つ際に生じたとみられるので、この段階ではあまり厳密に墳丘中心は意識されていなかったことを示している。

次に、石室設定の基準ともなる奥壁の位置は、第18図によって墳丘中心点の後方1.5～2.5m付近に設定されていることがわかる。そこで古墳を主軸方向に切断した際の墳丘背部部・玄室部・羨道部の構成比を示したのが第19図である。これによれば、4・22・25号墳といったⅡ類の墳丘を持つ古墳は、墳丘中心点が玄室部にあつて三者の比率もおおよそ4:2:4で共通してい



第19図 墳丘・石室位置比較図

る。Ⅳ類の墳丘を持つ5号墳もこれと同じ構成比を持つが、14・23号墳ではその比率が2.5:2.5:5となつて羨道部の比率が大きくなつている。これは石室に対して墳丘の規模が小さいために奥壁の位置を後方に置いたことが原因とみられる。

(石室掘形) 規模は石室の大きさによって決められ、墳丘基底面のほぼ中央に掘削されている。底部はほぼ平坦で、開口部にかけて緩やかに下る。基底面が傾斜しているために奥壁側が最も深く掘られている。

(基底石の据え付け) 石室石材はチャートと砂岩の自然石である。石室構築の最初は、まず基底石が据えられる。据え付けの方法には直接底に据えるものと、掘形状の凹みを掘りそこに据える二者があり、袖石などの大型石は後者をとる。また大型石の下には石を固定するため、根石を据えるものもある。

基底石に関しては次の諸点が注意される。まず石材の大きさがよく揃つており、あらかじめ選別された可能性があること。次に玄室よりも羨道に大きな石材がみられること。また石材を立てて据える例が多いが、これは石材の平坦面を強調する以外に掘形の控え不足が原因と考えられること。この他、基底石の内壁面は極めて直線的に並べられており、据え付けに際しては割り付け線の存在が想定できる。

袖石は直角面を内側に向け、立てて据えられることが多い。これは玄室と羨道の区別

1 地理的環境

第 10 表 持ち送り角度表

	奥壁	玄室	羨道
4号墳	9°	W11° E10°	W2° E7°
14号墳	16°	W14° E7°	W11° E8°
21号墳	4°	W14° E7°	W4° E10°
22号墳	7°	W10° E7°	W13° E8°

(Wは西壁・Eは東壁)

を1石で行おうとしたためとみる事ができる。この他、4・25号墳では袖石と玄室基底石との間に小さな石を入れて隙間を調整した形跡があり、袖石位置の重要性を示す事例として注意される。^{注11}

(石室の構築) 石室掘形を埋戻し基底石を固定した後、2段目以上の石材架構工程に入る。架構は石材の平坦面を内側に揃えながら、段積みで行う。段積みは一般に4～5段程度認められるが、大小の自然石を組み合わせ

て積むため段はあまり明瞭でない。玄室側壁の段は羨道側に下るものが多いが、これは基底面や封土面の傾斜に対応したものとみられる。最上段に小さな石が多用されるのは、天井石を架ける際に高さ調整を目的としたためとみることができる。

持ち送りは、玄室・羨道の各壁に認められる。その角度は第10表に示した。

側壁石材が最上段に達した後、天井石が架けられる。玄室上の天井石が袖石上の天井石に乗るところから、まず羨道、次いで玄室の順に架けられたことがわかる。天井石にはチャートの大型石が用いられ、石室に直交するように長軸を向け、平坦面を下にして水平に架けられる。そして架構後は封土の流入を防ぐために小石で隙間を塞ぐ。

玄室の天井石は通常2～3個からなるが、21号墳では4個架けられている。羨道上の天井石も2～3個残る例が多いが、21号墳では4個認められ、閉塞位置などから推察すると本来は4～5個架けられていたものと推定できる。

(床面の整備) 石室の構築が終了した後、石室床面の整備を行う。当古墳群の石室床面はほとんど敷石を施している。これらは石室掘形の底に平均15cm程度土を入れ、この上に礫を並べて造られている。敷石は拳大のチャート・砂岩の角礫が多い。敷石の範囲は各古墳に共通しており、玄室の全面と羨道の約半分、奥壁から5～6mの位置に及んでいる。なお、当古墳群では排水溝や棺台石のような施設はみつかっていない。

(4) 埋葬と祭祀

埋葬形態 今回の調査では遺骸の検出がなく、石棺や、木棺の存在を示す鉄釘の出土も皆無であったために、埋葬の実態についてはほとんど明らかにすることはできなかった。しかし、4・22・25号墳の出土土器には明らかな型式差があり、また25号墳では両方の

袖石に遺物が集められていたり、新しい型式の土器が床面から浮いて出土しており、追葬が行われたことは十分想定できる。

閉塞 死者を古墳に埋納した後、石室の入り口を石で塞ぐ。これが閉塞で、この時用いられた閉塞石を4・5・14・23・25号墳で検出している。いずれも人頭大のチャート・砂岩で、積み方が極めて雑なため、石室内に落ち込んだ石と見分けにくいのが、奥壁から6～7mの位置にみられることや同じ大きさの石が集中する点でこれを区別した。4号墳では床面に2列に据えられた数個の石を検出したが、これなどは最初の閉塞石とみることができる。

なお、閉塞の中で土器の出土する例があり、14号墳で須恵器高杯1個体、25号墳で須恵器杯、高杯、小型甕と土師器壺が各1個体出土している。

祭祀 群集墳に伴う祭祀は、炭土壌や焼土壌、あるいは遺物の出土状態などでその存在が推定されている。ここでは、古墳の築造に伴う祭祀とその後行われた祭祀に分けて述べる。

（古墳築造に伴う祭祀） 炭土壌や焼土壌及び基底面炭層等がこれに関係する遺構と考えられる。

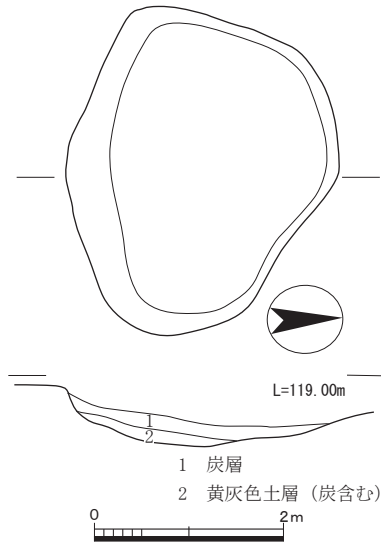
炭土壌は、4・5・14・22・23・25号墳の周溝で検出している。土壌の規模・形状は一定でないが、長さ2m、深さ0.3m前後で楕円形のものが最も多い。焼土壌は、4・22号墳で各1基、25号墳で2基検出している。墳内は熱を受けて赤変しており、炭土壌に比べやや規模が大きい点でも特徴がある。これらの炭土壌・焼土壌の墳内には炭が充満しており、古墳を取り巻く形で点々と分布する点が注意される。

基底面炭層は、4・14・22号墳で明瞭に認められた。墳丘基底面の直上にあつて、木炭と細かな礫の混じったものを散布された状態で検出している。断面観察では掘形埋土の下層に位置することが知られるので、石室掘形を埋める以前にこれらの炭が散布されたことは明らかである。

（築造後の祭祀） 周溝内に堆積した炭層や石室開口部付近で検出した土器がこれに該当する。周溝内の炭層は周溝がある程度埋まったその上部にみられるので、古墳築造が終了した以降にこれらが堆積したものと判断できる。こうした炭層は26号墳も含めた各古墳で検出しているが、特に25号墳のSW・SE区では広範囲に認められた。

次に、開口部付近で土器が出土する例としては5号墳で好例がみられた。ここでは閉塞石の前面で須恵器高杯5個体と土師器甕1個体が一括出土している。また、14号墳では

2 調査方法



第20図 4号墳焼土層実測図(1:80)

開口部西側で須恵器高杯が1個体、22号墳でも開口部付近から須恵器杯・蓋・壺・脚付子持壺等が出土しているが、14号墳の高杯や22号墳の脚付子持壺は脚部が立った状態で出土しており、当初からこの場所に据えられていたことがわかる。

(祭祀の内容) こうした状況から、祭祀に伴ってはまず火が使われたことがうかがわれる。この場合、4・22・25号墳では焼土層を検出しているため、まずここで火が焚かれ、この時生じた炭や灰が周辺に散布されたと考えるのが妥当であろう。基底面炭層がこの時散布されたものであるならば、焼土層は古墳の築造当初に掘込まれた可能性が高いが、炭土層や炭層は層位的な重複関係が認められるので、おそらくは古墳築造当初とは別に、死者を埋納した時点や追葬が行われた

時点にもこうした火を焚く行為が行われたものと推察できる。

なお、このような炭を伴う遺構は各地の群集墳調査で類例が知られている。奈良県内では榛原町忍坂^{注12}古墳群、天理市石上^{注13}古墳群、御所市石光山^{注14}古墳群、五条市引ノ山^{注15}古墳群などに類例があり、京都市内でも右京区御堂ヶ池20号墳^{注16}にその例をみることができる。

次に石室の前面で土器が出土する例については、死者を古墳に埋納し閉塞を行った時点でとり行われた「墓前祭祀」の形跡とみることができる。この祭祀の内容も具体的には明らかでないが、墓前に食べ物を献じ、死者の靈魂を供養するような内容と想定すれば、黄泉国の死者に対して飲食に供する「黄泉戸喫^{注17}」と呼ばれる儀礼との関係で重要であろう。

なお、今回の調査では、4・5・14・22・23号墳で土師器甕が出土しているが、いずれも石室外から出土した点で共通している。また、4・5号墳から出土したものは外面に煤が付着しており、墓前炊飯との関係で注目される。

2 古墳群の構成と動向

当古墳群を構成する23基の古墳は、丘陵の谷間に数基または10数基ずつがまとまって分布する。このまとまりを支群と把握すればA支群(4～25号墳)、B支群(1・2号墳)、C支群(26号墳)となる。ここではその中心であるA支群の構成と動向を、調査で明らか

となった点を踏まえて検討する。

A支群は20基からなり、そのうちの15基(6～23号墳)が北西から南東にのびる谷間の平坦地に位置している。これと小河川を隔てた南東側の丘陵に4・5号墳、北西側の丘陵に24・25号墳、北側の丘陵に14号墳が位置する。ここで注目されるのは、平坦地以外の古墳が1基または2基でまとまる点である。

4・5号墳(a小支群と仮称)は、南にのびる丘陵の端部に並んで立地している。2基の古墳は、石室開口方向が揃っており、周溝の切り合いもない。4号墳はⅡ類の墳丘にA類の石室、5号墳はⅣ類の墳丘にC類の石室を持ち、規模に差がみられる。出土遺物からみて、4号墳が先に、5号墳が後に造られたと考えられる。

次に、24・25号墳(b小支群)は、2基の古墳が丘陵の緩斜面に並んで位置する点ではa小支群に類似している。この2基の古墳も、25号墳がⅡ類の墳丘にB類の石室、24号墳がⅢ類の墳丘(内部主体不明)と、その規模に差がある。

これに対し14号墳(c小支群)は単独で立地する。14号墳の墳丘はⅢ類、石室はB'類である。遺物からみて4・25号墳からやや遅れて造られたと考えられる。

このように平坦地以外の状況を総合すると、古墳群を構成する各小支群は、2基一組または1基が一つの単位であったと考えられよう。2基組み合うものでは、隣接して立地すること、石室方向がほぼ揃うこと、周溝の切り合いがないこと、また墳丘・石室の規模には差があることなどが明らかとなった。さらに築造には時間差があり、規模の大きい墳丘(I・Ⅱ類)・石室(A類)の古墳から、小さい墳丘(Ⅲ・Ⅳ類)・石室(B・B'・C類)の古墳に変遷したものと考えられる。

平坦地に位置する古墳では22・23号墳(d小支群)が以上の例とよく一致する。22号墳はⅡ類の墳丘にA類の石室、23号墳はⅢ類の墳丘にB類の石室を持つ。出土遺物からみて、22号墳が先に、23号墳が後に造られたと考えられる。

そこで墳丘・石室の規模や、石室の方向、位置関係などから未調査の古墳を含めて小支群を復原すると第21図・第11表のようになる。

次に、出土遺物を基にA支群の動向をみて行こう。この場所に墓域が設定されたのは6世紀末頃と考えられる。まず谷間の平坦地に規模の大きいI・Ⅱ類の古墳を隣に空地を設けて築造し、やや遅れて川を隔てた丘陵にⅡ類の古墳を平坦地と同じように築造している。続いてI・Ⅱ類の古墳の隣にⅢ・Ⅳ類の古墳が造られる。これとほぼ同じ頃に、Ⅱ・Ⅲ類の古墳には追葬が行われる。追葬は7世紀前半頃である。

2 調査方法



第 21 図 小支群位置図 (1:2,500)

以上、検討してきた諸点を整理してみると次の通りである。A 支群はおよそ 11 程度の小支群によって構成されたものと推定できる。各小支群は規模の差が少なく、特に卓越したものはないが、中央に位置する h・i 小支群は主墳の墳丘・石室の規模が比較的大きいことが指摘できる。小支群内の各古墳は立地条件などから考え、計画的に築造位置が決められたと推定できる。さらに各小支群は短期間内に併行して形成されており、占地に際しては、群中に一定の墓域があらかじめ定められていた可能性が高い。これらのことから、

第11表 小支群一覧表

小支群	古墳名	墳丘	石室	主軸方向	出土須恵器	備考
a	4号墳	Ⅱ類	A類	N0°15' E	I・Ⅱ類	
	5号墳	Ⅳ類	C類	N7°43' E	Ⅱ類	
b	25号墳	Ⅱ類	B類	N42°59' W	I・Ⅱ類	
	24号墳	Ⅲ類			I類	
c	14号墳	Ⅲ類	B'類	N22°56' E	I・Ⅱ類	
d	22号墳	Ⅱ類	A類	N5°44' E	I・Ⅱ類	
	23号墳	Ⅲ類	B類	N13°01' E	I・Ⅱ類	
e	6号墳	Ⅱ類				未調査
	8号墳	Ⅲ類				未調査
f	7号墳	Ⅱ類				未調査
	9号墳	Ⅲ類				未調査
g	11号墳	Ⅱ類	A類	N11°E		未調査
	10号墳	Ⅲ類				未調査
h	15号墳	Ⅱ類	A類	N35°05' E		未調査
	12号墳	Ⅲ類				未調査
i	16号墳	I類				未調査
	19号墳	Ⅳ類				未調査
j	20号墳	Ⅱ類	A類	N23°40' W		未調査
	18号墳	Ⅲ類	B類	N32°33' W		未調査
k	21号墳	Ⅱ類	A類	N24°41' W	I・Ⅱ類	

各小支群は同一の系譜を引く造営主体が、各墓域において一定期間に2基程度 of 古墳を築造した結果と捉えられる。

これまで述べた古墳群のあり方から、各小支群を形成した造営主体は、従来から指摘されたように世帯共同体内の有力な家父長層と理解することができよう。^{註18} 2基の古墳が継続して築造され、さらに追葬がみられる状況は、家父長の死によって築造が始まり、その家族が一定期間埋葬されたことを示している。しかしながら、墳丘・石室の規模が基本的に等質であること、副葬品も比較的格差がないことは、当古墳群の造営主体が、なお世帯共同体的関係の枠内にとどまっていたとみることができよう。しかし4号墳は平坦地にみら

2 調査経過

れるA類の石室を有していることや、14号墳には陶質土器、25号墳には銀象嵌の鉄刀が副葬されていたことなど、各々特徴ある被葬者を想定することができる。

3 出土遺物の検討

発掘調査を実施した古墳の大半は盗掘を受けていたが、22・25号墳を中心に多数の遺物が出土した。これらの遺物は当古墳群の性格や年代を知る上で、重要な資料となる。

(1) 出土遺物の組成

各古墳から出土した遺物の内容は、第6表に示した通りである。遺物の総個体数は184点で、そのうち土器類が152点、金属製品が32点である。土器類は調査したすべての古墳から出土したが、金属製品は6基の古墳でしか確認していない。

土器類の組成は、須恵器が137点、土師器は15点で、須恵器の比率が極めて高く、供献の中心が須恵器であったことをうかがわせる。須恵器は杯・蓋(83点)が大半を占め、高杯・壺・甕類は少ない。そのうち杯・蓋・高杯は遺存状態の悪い24・26号墳を除いたすべての古墳から出土しており、これらが当古墳群の基本的な副葬品といえよう。また壺類は墳丘規模の大きいⅡ・Ⅲ類の古墳(4・14・22・23・25号墳)で出土したが、Ⅳ類の古墳からは出土していない。中でも脚付長頸壺は規模の大きい4・22・25号墳で出土している。これに加え22号墳では、子持の脚付長頸壺が出土している。このように、装飾性の高い須恵器の壺は墳丘規模の大きい古墳から出土する傾向がみられる。

金属製品には、装身具(耳環)と武器類(鉄刀・刀子・鏃)があり、これらが出土した古墳は大半が規模の大きいⅡ・Ⅲ類の古墳である。このうち4号墳は装身具のみであったが、他の14・21・22・25号墳は装身具と武器の両方を持っている。Ⅳ類の古墳である5号墳は武器のみが出土している。武器類の組み合わせをみると、鉄刀と鏃を持つ古墳(25号墳)、鉄刀や刀子を主体とする古墳(14号墳)、鏃を主体とする古墳(5・21号墳)と、内容は様々である。

以上のことから、須恵器の脚付長頸壺や金属製品の装身具・武器類といった副葬品の組み合わせが特に意味を持つと考えられよう。これらを持った古墳は、いずれも規模の大きいⅡ・Ⅲ類の古墳であることから、副葬品の内容と古墳の規模には関連性が認められよう。このような墳丘規模や副葬品に認められる差異は、各古墳の被葬者の階層差を反映しているものとして捉えられるが、現状ではまだ不明な点が多い。

また、当古墳群では朝鮮陶質土器(14号墳)・銀象嵌鉄刀(25号墳)などの稀少な遺物

が出土しており、各古墳の被葬者、さらに当古墳群を特色づける副葬品といえる。

(2) 出土須恵器の型式と年代

ここでは、出土遺物の大部分を占める須恵器を中心に、その編年の位置を検討する。

須恵器杯 A・蓋 A は、大きさによって大型の I 類と、小型の II 類に分けた。I 類は杯底部や蓋天井部に比較的丁寧なヘラケズリを施したものが多いが、II 類はヘラケズリの範囲が狭くかつ粗く、ヘラキリのままのものも認められる。また 26 号墳からは宝珠つまみを持つ蓋 B が出土している。杯・蓋以外の器形では高杯が多く、長脚 2 段透かしのものと、短脚で透かしのないものがある。高杯や提瓶・甕も矮小化し、退化傾向を示している。また長頸壺が多数みられる。

以上の所見からこれらの土器の年代を考察すると、I 類の杯・蓋は大阪府陶邑古窯址群における TK43 から TK209 型式に共通する特徴を持っている。また I 類は飛鳥寺下層出土の杯・蓋^{注20}と比べ、杯 A の立ち上りが低いことや蓋 A の稜がないことから若干新しいと考えられ、全体としては小墾田宮推定地 SD050 出土杯・蓋^{注21}に対応する。従って I 類の実年代は 6 世紀末から 7 世紀初頭と考えられる。II 類は陶邑古窯址群の TK209 型式から TK217 型式に共通する特徴を持っている。また法隆寺若草伽藍造営時に埋められた SD3560・SK3570 出土杯・蓋^{注22}や、四天王寺創建瓦を焼成した八幡市平野山瓦窯跡出土杯・蓋^{注23}、あるいは川原寺下層 SD2 出土杯・蓋^{注24}に類似している。このことから II 類の実年代は 7 世紀第一四半期の後半と考えられる。なお 26 号墳出土の蓋 B は、つまみがやや扁平となること、かえりが立つことなど京都市幡枝窯跡出土蓋^{注25}より若干新しい要素を持つが、II 類とほぼ同時期に位置付けられる。

第 12 表 須恵器杯・蓋出土一覧表

		4号墳	5号墳	14号墳	21号墳	22号墳	23号墳	24号墳	25号墳	計
杯	I	a	1			5	1			7
		b	3		1	5	3	1	4	17
	II	b		2	2	2	1		1	8
		c	3			1	1		4	9
蓋	I	a	2		2	4			1	9
		b	3			4	3		1	11
	II	b	3	3	1	1	1		1	10
		c	1			2			4	7
	不明					4				4
計		16	5	4	5	26	9	1	16	82

2 調査経過

今回出土した須恵器の中には、陶邑編年Ⅲ期以降の特徴を示す宝珠つまみを持つ蓋や長頸壺などの新しい要素を持った器形がすでに出現している。しかし依然としてⅡ期の特徴を持つ葬祭供献用器形が主流を占め、高杯や提瓶・甕などに顕著にみられるようにその最終段階のものといえる。このような須恵器の個々の形態や器種構成に現れた変化は、須恵器生産上の画期として捉えられ、これは群集墳の衰退に密接に関連しているものと考えられる。これを京都盆地内の群集墳の変遷に対応させて考えると、Ⅰ類は福西古墳群^{注26}・大覚寺古墳群・御堂ヶ池古墳群など当地方の群集墳が形成される時期にあたり、Ⅱ類は群集墳の造営が停止し、追葬が行われる時期にあたっている。またこれは旭山古墳群・醍醐古墳群・音戸山古墳群（7・8号墳）などの、小型の方墳で小規模な無袖式横穴式石室や、小石室を内部主体とする新しいタイプの古墳群が造営され始める時期にあたる。

次に、各古墳ごとに須恵器を検討すると、4・14・22・23・25号墳からは、Ⅰ・Ⅱ類の両方が出土しているが、24号墳はⅠ類、5号墳はⅡ類しか出土していない。Ⅰ・Ⅱ類の両方が出土した古墳のうち、4・22・25号墳は遺物出土状況や閉塞の状況から、先に追葬の可能性を指摘したが、これに関連して理解すると、初葬時にⅠ類が副葬され、その後追葬の際これらの土器を取り片付け、Ⅱ類が副葬されたものと推定できる。また14号墳ではⅡ類が、23号墳ではⅠ類が主体を占める。

(3) 特徴的な出土遺物

朝鮮陶質土器 14号墳で出土した杯A(14-1)は当古墳群で出土した他の杯Aに比べ、口縁部・体部の形態が異なり、底部へラケズリ調整の方向が逆向きとなっている。また胎土・焼成が他の須恵器と異なり精良で、いわゆるセピア色を呈している。この土器の年代は、伴出土器から7世紀初頭と考えられる。この器形は、当地域で発見されている須恵器中に類例はなく、新羅統一期以前の朝鮮陶質土器と考えられる。

6世紀から7世紀にかけての朝鮮陶質土器は、九州北部と畿内に集中して出土しているが、一部は関東にまで分布している^{注27}。これらの大半が古墳から出土し、須恵器・土師器などと共に副葬されている。近畿地方では当古墳の他、嵯峨野地域の大覚寺3号墳^{注28}（長頸壺）、奈良県馬見古墳群（高杯）・南山古墳群（蓋）・神木坂3号墳（蓋）、和歌山県岩橋千塚古墳群（高杯・台付碗）などで出土している^{注29}。また、14号墳出土の杯Aに近いものは、山口県心光寺1号墳^{注30}（台付蓋杯）から出土している。

こうした朝鮮陶質土器が出土した古墳の被葬者は、地獄的背景から考え渡来系の氏族、またはその系譜につながる人々と推定されている^{注31}。今回出土した陶質土器も、当古墳群の

第13表 京都府下出土裝飾須恵器一覽表

	出 土 地	所 在 地	器 形	備 考
1	太 田 2 号 墳	竹野郡弥栄町和田野	脚 付 子 持 壺	文 献 1
2	は ず れ か え 古 墳	中郡峰山町安	脚 付 子 持 壺	文 献 2
3	湯 舟 坂 2 号 墳	熊野郡久美浜町須田	脚 付 子 持 壺	文 献 3
4	玉 峠 古 墳	与謝郡加悦町	脚 付 装 飾 壺	文 献 2
5	長 尾 古 墳	天田郡夜久野町平野	脚 付 子 持 壺	文 献 4
6	牧 1 号 墳	福知山市牧	脚 付 子 持 装 飾 壺	文 献 5
7	牧 2 号 墳	福知山市牧	脚 付 子 持 壺	文 献 6
8	入 塚 1 号 墳	綾部市入塚	装 飾 高 杯	文 献 7
9	八 塚 1 号 墳	綾部市鍛冶屋町八塚台	子 持 台 付 壺	文 献 8
10	三宅1号墳(荒神塚)	綾部市豊里町三宅	脚 付 子 持 壺	文 献 9
11	天 神 山 2 号 墳	船井郡園部町小山東	子 持 器 台	文 献 10
12	天 神 山 3 号 墳	船井郡園部町小山東	脚 付 子 持 壺	文 献 10
13	巽 1 号 墳	京都市右京区山越巽町	装 飾 器 台	文 献 11
14	大覚寺2号墳(入道塚)	京都市右京区嵯峨	脚 付 子 持 装 飾 壺	文 献 12
15	大覚寺2号墳(入道塚)	京都市右京区嵯峨	脚 付 子 持 壺	文 献 12
16	大覚寺2号墳(入道塚)	京都市右京区嵯峨	装 飾 壺	文 献 12
17	大覚寺3号墳(入道塚)	京都市右京区嵯峨	脚 付 子 持 壺	文 献 12
18	大 枝 山 22 号 墳	京都市西京区御陵大枝山	脚 付 子 持 壺	本 書
19	物 集 女 車 塚 古 墳	向日市物集女	装 飾 器 台	文 献 13
20	七 ツ 塚 7 号 墳	長岡京市長法寺	脚 付 子 持 壺	文 献 14
21	南原2号墳(マト塚)	長岡京市長法寺	脚 付 子 持 装 飾 壺	文 献 15
22		長岡京市海印寺宇走田	脚 付 子 持 壺	文 献 6
23	醜 翻 1 号 墳 (耳 塚)	京都市伏見区醜翻向け井戸町	脚 付 子 持 壺	文 献 16
24	隼 上 り 窯 跡	宇治市菟道東隼上り	子 持 壺	文 献 17
25	坊 主 山 1 号 墳	宇治市広野町	脚 付 子 持 壺	文 献 18
26	曹 山 2 号 墳	城陽市観音堂	器 台 付 子 持 蓋 付 壺	文 献 19
27	山 際 古 墳	相楽郡山城町綺田	子 壺 と 獸 形 片	文 献 20
28	音 乘 谷 古 墳	相楽郡木津町相楽	装 飾 器 台	文 献 21

2 調査経過

被葬者と渡来人との関係を考える上で貴重な資料といえる。

脚付き持壺 22号墳から脚付き持長頸壺(22-25)が出土した。この土器の形態的特徴は、壺体部中位に凸帯がめぐることである。この凸帯は器台口縁部であり、口縁内側から長頸壺の上半部を成形している。この特徴は、凸帯のみ壺体部に張り付けるものより古い要素を示し、装飾須恵器の系譜から、最終末より少し前の段階に位置付けられる。伴出した土器から、年代は6世紀末と考えられる。

装飾須恵器は5世紀末から7世紀前半まで製作されているが、6世紀中葉から後半にかけて最も盛行し、古墳の終末と共にその生産を中止している^{注32}。器形は脚付き持壺と子持器台が主流を占め、東海・畿内・瀬戸内海沿岸を中心に関東にまで広く分布している。京都府下においても近年出土数が増加している(第13表)^{注33}。出土遺跡のうち約1/3は嵯峨野地域や桂川右岸地域に集中しており、地域的な特色を示している。器形は脚付き持壺が多く、子持器台などの数は少ない。

装飾須恵器が出土した古墳は、在地の首長墓と考えられる小型前方後円墳・大型円墳などが多く、群集墳の中でも比較的規模の大きい中心的な古墳が多い。また出土状況は、本例のように石室前面から検出したり、前方後円墳の造り出しや、くびれ部などから出土している例が多い^{注34}。これらのことから装飾須恵器が在地首長墓の古墳築造後の祭祀に使用されたと推定できよう。

銀象嵌鉄刀 25号墳から鏢・鏹・柄頭の部分に銀象嵌を施した鉄刀(25-41～46)が出土した。象嵌文様は形が崩れ、矮小化が進み、その意匠はまったく理解できないものになっている。また、鏢の花弁状文様も不揃いである。象嵌は糸象嵌の技法で施されるが、描線の太さは一定せず、曲線は角張ってぎこちない。象嵌文様の系譜からみると最終段階のものに位置付けられ^{注35}、伴出土器から6世紀末頃と考えられる。

象嵌鉄刀は5世紀から7世紀にかけて製作されており、最も盛行するのは6世紀代である。6世紀中頃までのものは、文様や技法から舶載品または舶載品を模倣して国内で製作されたと考えられる。国内で製作されたものは分布状況から考え、畿内の工房で製作されたと推定されている。6世紀後半以降のものは国産の割合が増加する。これらは、文様や技法に退化・簡略化の傾向が進み、出土量が増加し、分布範囲も広がることから、畿内のみならず、国内各地で製作された可能性が考えられる。

象嵌鉄刀は、京都市内では他に西京区山田の穀塚古墳(5世紀後半)より一点(環頭柄頭-連続S字状文)^{注36}出土している。また、同じ群集墳からは、京都府下では、久美浜町湯

舟坂2号墳（円頭柄頭^{注37}-羽状文）、丹後町高山12号墳（円頭柄頭-羽状文、柄縁金具-二重渦文^{注38}）、峰山町桃谷古墳（円頭把頭^{注39}-渦文）、福知山市中坂5号墳（鏢-波状文とC字文^{注40}）の4箇所出土している。分布状態からみると丹波・丹後地方に多いといえるが、山城地方の2例がいずれも洛西地区で出土している点は、優れた金工技術を持っていたとされる秦氏との関連で注目される。

6世紀以降の象嵌の鉄刀が出土した古墳は、前方後円墳や大型円墳が多い。これらの古墳は大型の石室を持ち、装飾太刀や馬具などが伴出し、各地域における首長墓と推定されるものである。一方、このような大規模な古墳とは対称的に、群集墳を構成する古墳や横穴から出土することも少なくない。群集墳の中では中心的な古墳だけでなく、本例のように小規模な古墳からも出土している。これは、この時期にはすでに各地域の有力首長のみならず、群集墳に被葬された階層にまで象嵌鉄刀が行き渡っていたことを示している。このような状況は象嵌以外の装飾太刀でも指摘されており、古墳時代後期の副葬品を考える上で貴重な資料となろう。

4 古墳群の性格

(1) 被葬者の基盤

最後に大枝山古墳群の被葬者について考察し、本書のまとめとしたい。

大枝山古墳群は、6世紀末から7世紀始めにかけて築造された群集墳であるが、人里離れた山間の丘陵地に築かれた点で、西芳寺谷に分布する、北松尾・上園尾・ボウジョウ古墳群などと同様、特色ある立地条件を持つ古墳群とされてきた。この特色ある立地条件は、古墳群の性格を考察する上で重要と考える。

大枝山古墳群の位置する場所を地形のまとまりからみると、小畑川の上流域、つまり大原野の最北端に位置することがわかる。ところが、実際の行政区分は東側の御陵に含まれており、この場所が歴史的に東側の平野部と結び付きが強かったことが想定できる。古墳群の位置する場所を東側の御陵に結び付けた要因には、古道の存在が重要であったと考える。その代表的なものに、「唐櫃越^{注41}」がある。この唐櫃越は西側の丘陵部を通る尾根道で、谷筋を通る山陰道と並んで山城と丹波を結ぶ重要な交通路として利用されてきた。古墳群の中を通る小道は、山田・塚原に出る小道に取り付いていることから、この方面への出入りが想定できるが、後世唐櫃越と呼ばれた尾根道との関りなども含め、山間部を走る古道の復原は今後検討を要する問題といえる。

4 古墳群の性格



第22図 洛西の古道と中・後期古墳(1:50,000)

次に、大枝山古墳群を取り巻く群集墳の分布関係をみると、南の大原野では、福西古墳群をはじめ塚原・沓掛の古墳群が知られており、小畑川の形成した谷水田の広がりから考えても、古墳の数は十分といえる。これに対し東側の平野部では、松尾の丘陵地で群集墳が多くみられる反面、山田から塚原までの約1.3kmには群集墳のまったくない空白区が存在する点が注目される。このことは、群集墳の墓域が単に居住域の近傍に限られたものでなく、遠隔の丘陵地にまで及んでいた可能性を示すものとして注目できる。

以上、ここでは大枝山古墳群を築いた人々が東の平野部に居住した集団であった可能性について述べたが、この場合でも、なぜこのような山間の丘陵地に墓域を選んだのか疑問が残る。この問題に関しては、二つの理由があったと考える。その一つはこの場所が、周囲に比べ比較的平坦であったという地形的な理由である。そして、第二の理由には古山陰道の関りが重要であったと考える。

古山陰道は、平安京遷都以前の山陰道をさし、木津川の西岸を西北西に進んだ後、乙訓

注42
 に入って小畑川の西岸を遡上、大枝の関に至る道程が復原されている。ところが、古山陰道が今の山陰道に取り付く場所は、ちょうど大枝山古墳群の南の入り口ともいべき塚原の集落にあたり、古山陰道の道筋をそのまま西北に延長すれば、古墳群の位置する丘陵部に到達することになる。古山陰道の道筋が古墳時代の段階でどのようであったか現状では決めがたいが、古墳の立地を古代の交通路との関連で理解するなら、古山陰道から分岐した道の一つが下狩川を遡って古墳群に達していたと考えることも不可能ではない。以上の点を肯首するなら、古墳群は古代の街道沿いに造られていたことになる。これは大枝山古墳群の特色として先にあげた古墳群の立地条件そのものに再検討を加える重要な問題を含んでいる。

(2) 被葬者について

桂川右岸地域と嵯峨野地域の首長墓の動向については、すでに一定の解釈が示されている。注43
 それは第2章で述べたように、洛西地区には「檜原グループ」と呼ばれる一つの首長墓系譜がありながら、古墳時代後期に断絶すること、これに対し嵯峨野地域では、この時期に入って大型古墳が築かれ始め、これが山城地方に進出してきた秦氏の勢力伸張の表れと理解されている。

注44
 秦氏は織物・金工の技術や、「葛野大堰」に代表される高度な土木技術を持って山城の地域開発を推し進めた新興の渡来系氏族であるが、桂川右岸の洛西地区も秦氏の奉祭した松尾神社の存在など、秦氏と関りの深い地域である。さらに、この地域と秦氏の結び付きを知る上で注目されるのが、松室遺跡の発掘調査でみつかった水路である。注45
 この水路は、古墳時代後期に開削された可能性が指摘されているが、松尾神社の周囲には今も「一ノ井」・「二ノ井」と呼ばれる水路が現存しており、発掘調査でみつかった水路もその一部に該当する可能性が高い。現存する水路は、秦氏の造作による葛野大堰の用水路であるとも推定されるので、発掘調査で検出された水路も、葛野大堰から取水された用水路の一つであった可能性が考えられ、洛西の開発と秦氏の関りを具体的に示す成果と評価することができる。

このようにみると、古墳時代後期に洛西を拠点においた集団には、秦氏に連なる勢力を想定するのが妥当となるが、同じことは横穴式石室の形態や出土遺物からも指摘できる。大枝山古墳群の中でA・B類とした石室は、衣笠山古墳群やボウジョウ古墳群の石室などと共に、巨石積みの工法や幅広い玄室平面形態を特徴とするが、これは嵯峨野地域に分布する大覚寺3号墳や御堂ヶ池1号墳といった、規模の大きい横穴式石室に一般的な特徴と

4 古墳群の性格

いえる。この他、14号墳で出土した朝鮮陶質土器が、器形は異なるものの大覚寺3号墳でも出土していることや、さらに25号墳から出土した銀象嵌鉄刀など、遺物の面からも秦氏との関連性が指摘できる。

以上のように考えると、大枝山古墳群を築いた被葬者は桂川右岸の平野部に居住しながら、この地域の開発を進めた秦氏の系譜につながる集団であった可能性がまず考えられる。そして、彼らが居住地を離れて山間の丘陵地に墓域を定めた要因には、古道の存在が前提にあったとここでは考えておきたい。

さらに、大枝山古墳群と松尾の丘陵上や西芳寺谷に分布する群集墳を比べると、石室規模や古墳数でちがいがみられるが、これらは集団間の階層格差を反映したものとみることができる。古墳群相互の格差などの問題点は今後の検討課題としておきたい。

- 注1 従来からこの種の石列については、「開口部列石」や「外護列石」あるいは単に「列石」などと呼ばれていたが、本書ではこれが二重に施されていることや、崩壊の危険性が高い墳丘前面裾部に限って認められることなどから、単なる区画施設ではなく墳丘の崩壊を防ぐ目的で行われた土留めの一種と捉えたため、「葺石」の名称を用いた。
- 注2 橋本 久「御堂ヶ池群集墳の「列石」について」(『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会) 1971
- 注3 堤圭三郎・吉水真彦他「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1977
- 注4 安藤信策「昭和53年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1979
- 注5 引原茂治・山口文吾・田中暢一「医王谷3号墳・医王谷焼窯跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注6 木下保明他『旭山古墳群発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第5冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981
- 注7 北田栄造・丸川義広『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985
- 注8 松村 博「横穴式石室構成要素の比較について」(『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会) 1971
- 注9 大枝山1号墳の石室は大正3年(1914)の報告によると、玄室の規模が長さ7尺7寸

(2.3m)、幅7尺4寸5分(2.2m)、高さ7尺4寸(2.2m)とあり、正方形に近い特色ある平面形が復原できるが、玄室幅の他羨道幅や袖石の位置はA類の石室によく一致しており、奥壁の位置を改めるならA類の石室であった可能性も考えられる。

- 注10 本図の墳丘円は等高線の条件の良いところを基準に復原したので、本文や一覧表の墳丘直径値とは一致しない古墳もある。
- 注11 右京区御堂ヶ池1号墳、西京区福西4号墳等にも同様の類例がある。
『御堂ヶ池1号墳発掘調査概報』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究 1982
『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査 - 福西古墳群の発掘調査報告 -』京都市都市開発局洛西開発室 1970
- 注12 前園実知雄・関川尚功他『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第34冊 奈良県立橿原考古学研究所 1978
- 注13 泉森 皎・河上邦彦他『天理市石上・豊田古墳群II』奈良県文化財調査報告書 第27集 奈良県立橿原考古学研究所 1976
- 注14 白石太一郎他『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第31冊 奈良県立橿原考古学研究所 1976
- 注15 関川尚功他『奈良県五條市引ノ山古墳群』五條市教育委員会 1980
- 注16 上原真人『御堂ヶ池群集墳第20号墳発掘調査報告』六勝寺研究会 1973
本文P19～20に「その境界にしばしば木炭の小片が散在していて、その識別の助けとなった。…」とあり、山焼き用の作業が行われたと推定されているが、この特徴は本例の基底面炭層に一致するものといえる。
- 注17 小林行雄「黄泉戸喫」(『考古学集刊』第2冊) 1949
白石太一郎「ことどわたし考」(『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念) 1979
この中では、死者を石室内に埋葬し、そこで死者に黄泉国の食物を供することを「ヨモツヘグイ」、石室の閉塞時の儀礼を「コトドワタン」と解釈されている。
- 注18 近藤義郎『佐良山古墳群の研究』 1952
- 注19 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 注20 奈良国立文化財研究所編『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報 第5冊 1958
- 注21 奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告I 小墾田宮推定地・藤原宮の調査』

第2章 注

- 奈良国立文化財研究所学報 第27冊 1976
- 注22 西 弘海「出土遺物」(『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』法隆寺) 1983
- 注23 奥村清一郎他『平野山瓦窯跡発掘調査概報』八幡市教育委員会 1985
- 注24 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部編「川原寺西南部の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』 1980
- 注25 横山浩一・吉本堯俊「京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯址」(『日本考古学協会 昭和38年度大会研究発表要旨』) 1963
- 注26 当古墳群の比較資料として、福西古墳群出土遺物を図版79にあげた。
- 注27 注19に同じ
- 注28 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1976
- 注29 江浦 洋「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題Ⅰ」(『大井遺跡(その2)-調査の概要』大阪府教育委員会) 1987
- 注30 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 注31 西谷 正「日本における韓式土器・陶器」(『世界陶磁全集』第17巻 韓国古代 小学館) 1979
- 注32 柴垣勇男「装飾付須恵器の器種と分布について」(『愛知県陶磁資料館研究紀要3』愛知県陶磁資料館) 1984
- 注33 表中の文献は以下の通りである。
- 1 『丹後郷土資料館収蔵目録』第1集 京都府丹後資料館 1980
 - 2 杉原和雄「丹後地方の横穴式石室採用以前の須恵器資料」(『水と土の考古学』) 1973
 - 3 奥村清一郎他『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会 1983
 - 4 『丹波の古墳』Ⅰ 山城考古学研究会 1983
 - 5 梅原末治「牧の石室古墳」(『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第20冊 京都府) 1940年
 - 6 木村豪章「古墳時代の基礎研究考-資料編(1)-」(『東京国立博物館紀要』第16号) 1981
 - 7 山下潔巳「小畑古墳発掘報告」(『綾部史談』16) 1951
 - 8 山下潔巳「鍛冶屋町所在の古墳と出土遺物」(『京都府綾部市文化財報告』第10集

- 綾部市教育委員会) 1983
- 9 『丹波荒神塚』 京都府立丹後郷土資料館 1974
- 10 『天神山古墳群現地説明会資料』 園部町教育委員会 1985
- 11 木下保明「異古墳」(『京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1986
- 12 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1976
- 13 秋山浩三・山中 章他『物集女車塚』向日市埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集 1988
- 14 原 秀樹他「長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 長岡京市教育委員会) 1986
- 15 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部 1968年
- 16 北田栄造『醍醐1号墳発掘調査概報』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986
- 17 『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第3集 宇治市教育委員会 1986
- 18 堤圭三郎「坊主山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1965
- 19 堤圭三郎『兜山2号墳発掘調査報告書』城陽市教育委員会 1967
- 20 『京都府遺跡地図』第5分冊 京都府教育委員会 1985
- 21 『奈良山』奈良国立文化財研究所 1973
- 注34 岸本雅敏「裝飾付須恵器と首長墓」(『考古学研究』第22巻 第1号) 1975
- 注35 西山要一「古墳時代の象嵌-刀装具について-」(『考古学雑誌』第72巻 第1号) 1986
- 注36 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部 1968
- 注37 奥村清一郎他『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会 1983
- 注38 増田孝彦「高山古墳群(12号墳)出土の象嵌を持つ刀装具」(『京都府埋蔵文化財情報』第30号 財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注39 樋口隆康「峰山桃谷古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1961

第2章 注

なお、注38・39については、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 松井忠春氏から資料の提供を受けた。

- 注40 京都府教育委員会 平良泰久氏より教示を受けた。
- 注41 唐櫃越は、「九条家文書」暦仁元年(1238)12月28日条の、物集女庄の四至を記す箇所に、「北限丹波路唐櫃越」とあるのが初例である。その後、南北朝の動乱期や応仁の乱関係の史料に登場し、戦時には軍道として盛んに利用された様子が記されている。なお、古墳群の所在する御陵峯ヶ堂の地名は、唐櫃越に接して建てられた法華山寺(慶政上人開山、13世紀前半)が、谷ノ堂(最福寺のこと。延郎上人1176年開山)に対して「峯ノ堂」と呼ばれたことに由来している。
- 注42 足利健亮「国府と古道」(『向日市史』上巻) 1983
- 注43 田辺昭三「氏族の発展」(『京都の歴史』第1巻) 1970
- 注44 葛野大堰は『政事要略』に引用された「秦氏本系帳」に記載がある。ここで、「秦氏本系帳にいわく。葛野大堰を造ること、天下に誰が比検するあらん。これ秦氏の種類を率いて造構するところなり。昔秦昭王、洪河を塞堰して溝澮を通じ、万頃を開田し、秦の富数倍す。いはゆる鄭白の沃、衣食の源なり。今大井堰の様則ち彼の造るところに習う。」とある。葛野大堰の位置については、一ノ井、二ノ井の取水口のある嵐山渡月橋付近と推定されるが、この位置で取水していたとすると、主に氾濫原に分類される海拔35m以下の平野部が灌漑の対象地であったといえる。この部分については、井上満郎「乙訓の開発」(『向日市史』上巻) 1983を参考にした。
- 注45 小森俊寛・原山充志「松室遺跡」(『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1987

第14表 遺物観察表

4号墳(図版26・27・74)

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考	
須	杯	A 1 5	<ul style="list-style-type: none"> ・底部は平坦で、3は中央がやや尖る。 ・立ち上がりは低く、内傾し、3は受部とほぼ同じ高さである。 ・受部は短く、やや上向きにのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整はc手法である。 		
		A 4 I 7	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に扁平で、底部は平坦なものが多い。 ・立ち上がりは低く、内傾する。 ・受部は水平に伸び、上面が凹む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整は6のみa手法、他はb手法である。 ・6は底部内面に同心円タタキメが残る。 		
	蓋	A 8 5 II 10	<ul style="list-style-type: none"> ・天井部はやや平坦で9は中央が尖る。 ・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 ・天井部外面の調整は8・9がb手法、10はc手法である。 		
		A 11 5 I 15	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に扁平で、天井部は丸いものが多い。 ・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 ・13は口縁部に斜めの条線がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 ・天井部外面の調整は12・15がa手法、他はb手法である。 		
	器	高 杯	無蓋 高杯 A 16	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は外上方へ開き、口縁部と底部の境及び口縁部中位に稜がある。 ・脚部は長く、裾部は広がる。 ・透しは三角形で3方向である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・杯部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、杯底部内面に仕上げナデを施す。 ・杯底部外面は回転ヘラケズリである。 ・脚部内面にしぼり目が残る。 	
		長 頸 壺	脚付 壺 B 17	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部は太く、口頸部は外上方へのびる。 ・体部は扁平で、肩が張り、中位に凹線がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデである。 ・体部下半は回転ヘラケズリで、頸部とともにカキメを施す。 	
提 瓶		18	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部は外上方へのび、口縁部は内傾する。 ・体部前面はふくらみ、背面は平坦である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体部前面は円盤で蓋をする。 ・体部と口頸部を別々に成形し、接合する。 ・体部背面内面は環状にヘラケズリ。 ・体部全面にカキメを施す。 	・破片のため耳の有無は不明。	
土 師 器	甕	A 19	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は外反し、端部は下方に若干拡張する。 ・胴部は長く、ふくらみは少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部内外面は横ナデで、内面には横方向のハケメを施す。 ・体部内外面は縦方向のハケメを施し、内面はヘラケズリ。 	・体部外面にススが附着する。	

14・5号墳

14号墳（図版27・74）

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考	
須恵器	杯	A 1	・体部はふくらみ、底部は平坦である。 ・立ち上がりは低く内傾する。 ・受部は短く、水平にのびる。 ・全体に入念な成形・調整である。	・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面は仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整はa手法である。ヘラケズリの方向は右回りである。	・暗青褐色を呈し、朝鮮製陶質土器に類似する。	
		II 2	・底部は平坦である。 ・立ち上がりは低く内傾する。 ・受部は短く、外上方へのびる。	・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面は仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整はb手法である。		
		A I 3	・底部は丸い。 ・立ち上がりは低く内傾する。 ・受部は短く、水平にのびる。	・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面は仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整はb手法である。		
	高杯	蓋	4	・天井部は平坦で、中央に中凹みのつまみが付く。 ・天井部と口縁部の境に鈍い稜がある。	・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面は仕上げナデを施す。 ・天井部外面の調整はb手法である。	
			5・6	・杯A Iに脚部を付ける。 ・脚部は長く、裾部は広がる。 ・透しは長方形で、2段3方向である。	・杯部の調整は杯A Iと同様である。 ・脚部内外面は回転を利用した横ナデである。	
		長頸壺	A 7	・頸部は太く、外上方へのびる。 ・体部は丸い。	・口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデである。 ・体部下半は回転ヘラケズリで、中位にカキメを施す。	

5号墳（図版28・75）

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考	
須恵器	杯	A 1	・底部は平坦である。	・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面は仕上げナデを施す。		
		II 2	・立ち上がりは低く、内傾する。 ・受部は短く、水平にのびる。	・底部外面の調整はb手法である。		
	蓋	A 3	・天井部は3・5が平坦で、4は丸い。	・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面は仕上げナデを施す。		
		II 5	・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 ・5は口縁部がやや外反する。	・天井部外面の調整はb手法である。		
		6	・蓋A IIを逆にして脚部を付ける。	・杯部の調整は蓋A IIと同様で、ヘラケズリは粗雑である。		
	高杯	無蓋高杯B 10		・脚部は短く、裾部は広がり、端部は下方へ拡張する。	・脚部内外面は回転を利用した横ナデである。	

5号墳(図版28・75)

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	高杯	無蓋高杯A 12・13	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外上方へ開き、口縁部と底部の境界及び口縁部に稜がある。 脚部は長く、裾部は広がる。 12の透しは長方形で、2段2方向である。 	<ul style="list-style-type: none"> 杯部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、杯底部内面は仕上げナデを施す。 杯底部外面は回転ヘラケズリを施す。 脚部内面にしぼり目が残る。 	
	土師器	甕B 11	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反し、体部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面は横ナデを施す。 口縁部・体部外面は縦方向、内面は横方向のハケメを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面にスス付着。

21号墳(図版29・75)

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	杯	A II 1	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平坦である。 立ち上がりは低く、内傾する。 受部はやや上向きで短い。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 底部外面の調整はc手法である。 	
		A II 2・3	<ul style="list-style-type: none"> 2は天井部が丸く、3は平坦である。 天井部と口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 天井部外面の調整はc手法である。 	
		A I 4・5	<ul style="list-style-type: none"> 全体に扁平で、天井部は平坦である。 天井部と口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 天井部外面の調整はa手法である。 	
	高杯	無蓋高杯A 6・7	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外上方へ開く。口縁部と底部の境及び口縁部中位に6は凹線、7は稜があり、6は間に櫛描き列点文を施す。 脚部は長く、裾部は広がる。 6の透しは長方形で、2段2方向である。 	<ul style="list-style-type: none"> 杯部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、杯底部内面に仕上げナデを施す。 杯底部外面は回転ヘラケズリである。 脚部内面にしぼり目が残る。 	
		長頸壺	蓋 10	<ul style="list-style-type: none"> 天井部はふくらみ、中央に中凹みの扁平なつまみがつく。 口縁内面にかえりがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部・口縁部内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 天井部外面は回転ヘラケズリを施す。
B 9・11	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は細く、口頸部は外上方へのびる。 肩が張り、体部下半は丸く、底部は平坦である。 体部に2条の凹線がめぐる。 		<ul style="list-style-type: none"> 口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデである。 体部下半は回転ヘラケズリを施す。 		
土師器	高杯	8	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は内湾気味に外上方へ開く。口縁部と底部の境に稜がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 杯部内外面は横ナデである。口縁部外面に横方向のヘラミガキを施す。 	

22 号墳

22 号墳 (図版 30 ~ 32 ・ 76 ・ 77)

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考	
須恵器	杯	A 1 Ⅱ 3	<ul style="list-style-type: none"> ・底部は平坦で、2 は中央が尖る。 ・立ち上がりは低く、内傾する。 ・受部は短く、やや上向きである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整は 1・3 が b 手法、2 が c 手法である。 		
		A 4 Ⅰ 13	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に扁平で、底部が丸いものと平坦なものがある。 ・立ち上がりは低く、内傾する。 ・受部は短く、水平にのび、上面が窪む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整は 4・5・9・10・13 が a 手法、他は b 手法である。 		
	蓋	A 14 Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・天井部は平坦である。 ・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 ・天井部外面の調整は b 手法である。 		
		A 15 Ⅰ 20	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に扁平で、底部が丸いものと平坦なものがある。 ・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 ・天井部外面の調整は 16・19・20 は a 手法、他は b 手法である。 		
	高杯	蓋	21 Ⅱ 23	<ul style="list-style-type: none"> ・蓋 A Ⅰ の天井部に中窪みの扁平なつまみが付く。 ・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調整は蓋 A Ⅰ と同様であるが、ヘラケズリは丁寧である。 	
			有蓋高杯 24 Ⅱ 25	<ul style="list-style-type: none"> ・杯 A Ⅰ の底部に 2 段の長脚が付く。 ・脚部は長く、裾部は大きく広がる。 ・透しは長方形で 2 段 3 方向である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・杯部の調整は杯 A Ⅰ と同様であるが、ヘラケズリは丁寧である。 ・脚部内外面は回転を利用した横ナデである。 ・24 は脚部内面にしぼり目が残る。 	
		無蓋高杯 A	26 Ⅱ 28	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は立ち上がり、口縁部と底部の境及び口縁部中に稜がある。 ・脚部は長く、裾部は広がる。 ・27・28 の透しは長方形で、2 段 2 方向である。 ・26 の透しはヘラで沈線を入れたもので、2 段 3 方向である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・杯部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、杯底部内面に仕上げナデを施す。 ・杯底部外面は回転ヘラケズリである。 ・26・28 は脚部内面にしぼり目が残る。 	

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考	
須恵	直口壺	A 30	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は直立する。 体部はやや肩が張り、底部は平坦である。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 体部下半は丁寧な回転ヘラケズリを施す。 頸部内面にしぼり目が残る。 		
	短頸壺	蓋	29	<ul style="list-style-type: none"> 口径に比べ、器高が高い。 天井部は丸く、天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 天井部外面の調整はb手法である。 	
		A	31	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は短く、やや内湾する。 体部は球形で、肩がやや張る。 口縁は楕円形である。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 底部外面は丁寧な回転ヘラケズリを施す。 	蓋をかぶせた状態で焼成している。
		B	32	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は短く、立ち上がる。 体部は扁平で、肩が張る。 口縁は楕円形である。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 底部外面は粗雑な回転ヘラケズリを施す。 	
	臚	33	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は細く、外上方へ大きく開く。頸部と口縁部との境に段がある。 体部は小さく、扁平である。 口縁部・体部に凹線をつけ、間に体部はヘラの刺突文、口縁部は櫛描文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部・体部内外面は回転を利用する横ナデである。 底部外面は不定方向のナデを施す。 頸部内面にしぼり目が残る。 	底部内面に円孔の粘土が落ち込み附着する。	
器	長頸壺	脚付壺A	34	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は細く、外上方へのびる。 体部は球形である。 脚部は欠失するが、3方透しの痕跡がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 体部下半は丁寧な回転ヘラケズリを施し、中位にカキメを施す。 体部上半、頸部にしぼり目が残る。 	
		脚付子壺持壺	35	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は太く、内湾し外上方へ伸びる。 体部は肩が張り、下半は丸い。 体部中位と下端にキザミメを付けた凸帯が廻る。 体部凸帯上に口縁部が大きく広がる小壺を6個付ける。 脚部は広がり、裾部との境に段をつけ、裾部は内湾する。 脚部の透しは2段3方向である。 体部下半、脚部に凹線をつけ、間にヘラ描条線をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 器台を先に作り、口縁部内側から、体部上半を成形する。 口頸部・体部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面は仕上げナデを施す。 体部の調整、施文終了後に小壺を貼り付ける。 小壺口縁部内外面は回転を利用した横ナデで、体部は手づくね成形である。頸部内面にしぼり目が残る。 	

25 号墳

25 号墳 (図版 34 ~ 36 ・ 77 ・ 78)

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	杯	A 1 5	・底部は平坦で、3 は中央が尖る。 ・立ち上がりは低く、内傾する。 ・受部はやや上向きで短い。	・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整は 4 が b 手法で、他は c 手法である。	
		A 6 8	・全体に扁平で、底部は丸い。 ・立ち上がりは低く、内傾する。 ・受部は短く、水平にのびる。	・内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部外面の調整はいずれも b 手法である。	
	蓋	A 9 13	・天井部が丸いもの (10・11) と平坦で中央が尖るもの (9・12・13) がある。 ・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。	・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 ・天井部外面の調整は 11 が b 手法、他は c 手法である。	
		A 14 15	・全体に扁平で、天井部が丸いものと平坦なものがある。 ・天井部・口縁部の境界は不明瞭である。	・内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 ・天井部外面の調整は 14 が a 手法、15 が b 手法である。	
	高杯	無蓋高杯 A 16 19	・口縁部は外上方へ開く。口縁部と底部の境及び口縁部中位に 17 は稜、他は凹線があり、間に 16 は楕円描き列点文、18 は 2 段のヘラ描き文を施す。 ・脚部は長く、裾部は広がる。 ・透しは 2 段で、16 は長方形で 3 方向、17 は 2 方向。18 は三角形で 2 方向である。	・杯部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、杯底部内面に仕上げナデを施す。 ・杯底部外面は回転ヘラケズリである。 ・脚部内面にしぼり目が残る。	
			短頸壺 C 20	・口頸部は短く外反し、端部に沈線がある。 ・全体に扁平で、肩が張る。 ・体部に 2 条の凹線が廻る。	・口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・体部中位以下は丁寧な回転ヘラケズリを施す。
	直口壺 B 21	・口頸部は細く、外上方へ開く。 ・全体に扁平で肩が張る。 ・体部に 2 条の凹線が廻る。	・口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部は粗雑な回転ヘラケズリを施す。	・肩部にヘラ記号をつける。 ・底部に藁の圧痕が残る。	

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	長頸壺	A 23	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部は太く、口頸部はやや内湾し、外上方へのびる。 ・体部は扁平で底部は平坦である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・底部外面は粗雑な回転ヘラケズリを施す。 ・頸部・体部にカキ目を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・14-7 と色調、素地が同質である。
		B 24	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部は細く、口頸部は外上方へのびる。 ・肩が張り、体部下半は丸い。 ・体部に2条の凹線が廻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・体部下半は丁寧な回転ヘラケズリを施す。 	
	脚付壺	脚付壺B 25	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部は細く、口頸部は外上方へのびる。 ・肩が張り、体部下半は丸い。 ・脚部は大きく広がり、裾部との境に段を付ける。 ・透しは長方形で、1段2方向である。 ・頸部・体部に2条の凹線を廻す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部・体部脚部内外面は回転を利用した横ナデで、底部脚部内面には棒で突いた圧痕が残る。 ・体部下半は丁寧な回転ヘラケズリを施す。 	
		脚付壺A 26	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部は太く、口頸部は直立する。 ・体部は球形である。 ・脚部は大きく広がり、裾部との境に段を付け、裾部は内湾する。 ・透しは長方形で、1段3方向である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部・体部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・体部下半は粗い回転ヘラケズリを施し、部分的に格子タタキメが残る。 ・体部中位にカキメを施す。 	
	甕	小型甕 22	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は外反し、端部は肥厚する。 ・体部は球形である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部・体部内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面は押え調整である。 ・底部は粗雑な回転ヘラケズリである。 ・体部上半にカキメを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体部上半に3本線のヘラ記号をつける。
土師器	椀	27	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部はやや内湾する。 ・底部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部・体部内外面は横ナデで、底部内面はナデである。 ・底部外面は不定方向のヘラケズリを施す。 ・口縁部内外面に粗いヘラミガキを施す。 	
	長頸壺	28	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部は細く、外上方へ開く。 ・体部はやや扁平で、底部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部・体部内外面は横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 ・口頸部・体部外面に粗いヘラミガキを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・底部に焼成後の穿孔あり。

23・24号墳

23号墳（図版33・79）

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須	杯	A 1 3 4	<ul style="list-style-type: none"> 全体に扁平で、底部は平坦である。 立ち上がりは低く、内傾する。 受部はやや上向きで、上面は窪む。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面は仕上げナデを施す。 底部外面の調整は2がa手法、他はb手法である。 	
		A II 5	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は丸く、中央が尖り気味である。 天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面は仕上げナデを施す。 天井部外面の調整はb手法である。 	
		A I 6 7 8	<ul style="list-style-type: none"> 全体に扁平で、天井部は平坦。 天井部・口縁部の境界は不明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面は仕上げナデを施す。 天井部外面の調整はb手法である。 	
恵	高 無蓋 高杯 A 杯	9	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は立ち上がり、端部は外反。 口縁部と底部の境界及び口縁部に稜があり、間に櫛描波状文を施す。 脚部は長く、裾部は広がる。 透しは長方形で、2段3方向である。 	<ul style="list-style-type: none"> 杯部・脚部内外面は回転を利用した横ナデで、杯底部内面に仕上げナデを施す。 杯底部外面は回転ヘラケズリを施す。 	
		長 脚付 壺 B 壺	10	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は細く、口頸部は外上方へのびる。 体部は肩が張り、下半部は丸い。 肩部・体部に凹線があり、間にカキメを施し、櫛刺突文をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部・体部内外面は回転を利用した横ナデである。 体部下半は回転ヘラケズリを施す。

24号墳（図版79）

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須 恵 器	杯 A I	1	<ul style="list-style-type: none"> 全体に扁平である。 立ち上がりは低く、内傾する。 受部は上方向へのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面は回転を利用した横ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。 底部外面の調整はb手法である。 	

26号墳（図版36・79）

器種	器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	蓋 B	1	<ul style="list-style-type: none"> 天井部はふくらみ、中央に宝珠形のつまみが付く。 口縁部内面にかえりがあるが、先端は口縁部より出ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部・口縁部内外面は回転を利用した横ナデで、天井部内面に仕上げナデを施す。 天井部外面は回転ヘラケズリを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面に緑灰色の自然釉が付着する。

金属製品（図版38・39・80・81）

種類	遺物番号	形態の特徴	備考	
鉄	短頸	5-14～18 A 21-12 25-29	<ul style="list-style-type: none"> ・鍔身は長三角形で薄い。 ・頸部は短く、茎との境の両側に棘状突起がある。 ・頸部・茎の断面は長方形で5-18は中空である。 	5-14(7.1g) 5-15(7.4g) 5-16(8g)
		25-30 B ～35	<ul style="list-style-type: none"> ・鍔身は柳葉形で薄い。 ・頸部は短く、茎との境の両側に段がある。 ・頸部・茎の断面は長方形である。 	25-30(11.1g) 25-31(10.1g) 25-32(10g)
	鍔	21-13 C 25-36 ～38	<ul style="list-style-type: none"> ・鍔身は長三角形で、逆刺がある。小型のもの(25-36)と、大型のもの(25-37・38)がある。 ・頸部は短く、25-36は茎との境の両側に棘状突起がある。 ・頸部の断面は長方形で、茎は丸い。 	25-36(5.7g) 25-37(12g) 25-38(16g)
		5-19 長頸鍔 21-14 25-39	<ul style="list-style-type: none"> ・鍔身は短く、柳葉形である。 ・頸部は長く、身との境に間があり、茎との境に突起がある。 ・頸部・茎の断面は長方形である。 	25-39(12g)
刀子	A	14-8 21-15 22-36	<ul style="list-style-type: none"> ・刀身は細く、棟側に間がある。 ・刀身・茎の断面は二等辺三角形である。 	
		B	14-10	<ul style="list-style-type: none"> ・刀身は太く、棟と刃の両側に間がある。 ・刀身の断面は二等辺三角形で、茎は長方形である。 ・刀身には錆はない。
鉄刀子	14-9 25-40 ～46	<ul style="list-style-type: none"> ・刀身は太く、棟と刃の両側に間がある。 ・刀身の断面は二等辺三角形で、茎は長方形である。 ・刀身に錆はない。 ・14-9、25-43に茎の目釘が残る。 ・25-43は間の部分に鍔が残り、鏢(25-41)、柄頭(25-42)、鞘責金具(25-44～46)が付属する。 	25-41(30g) 25-42(20g) 25-43(118g) 25-44(6g) 25-45(2g)	
		<ul style="list-style-type: none"> ・鍔は厚さ0.2cmの薄板で、両面に銀象嵌を施す。 ・鏢は倒卵形で、断面は長方形である。両面及び側面に銀象嵌を施す。 ・柄頭は断面倒卵形で、裾部がややひろがる。両面に銀象嵌を施す。 ・責金具は倒卵形で断面は台形。鉄芯は銅で覆い、外面のみ金箔を貼る。 	25-46(2g)	
耳環	4-20 14-11 21-16・17 22-37 25-47	<ul style="list-style-type: none"> ・銅芯の断面は円形で径は0.5～0.7cmである。 ・表面に金の薄板(25-47)又は銀の薄板(4-20、14-11、21-16・17、22-37)を貼り付けた後、C字形に曲げる。 ・突き合わせ両端面では薄板を包み込んだ痕跡が残り、曲部内面では曲げじわがみられる。 	4-20(7.3g) 14-11(15.4g) 21-16(4g) 21-17(10g) 25-47(26g)	

終章 発掘調査の成果と課題

古墳群の歴史的背景

稲作農耕の開始以後、大枝山古墳群のある洛西一帯は、京都盆地全体の中で比較的開発の遅れた地域であった。

弥生文化が京都盆地に及び、農耕社会がスタートしたのは、まず盆地西南の桂川、鴨川、木津川の三川合流地点周辺の低地帯であり、その後河川に沿って盆地東・北部や東山を隔てた山科盆地にまで浸透して行った。しかし、右京、西京区域にまたがる洛西の地は、弥生時代の遺跡分布が稀薄であり、特に桂川流域の北半部ではその傾向が顕著である。^{注1}

京都の歴史の中で、この洛西一帯が重要な位置を占めるようになったのは、古墳時代前半期末（5世紀後半）頃からであったと推測される。かつて、その主因を葛野大堰の築造に求め、築造の担い手として秦氏一族を想定した。^{注2} 亀岡盆地の水を集めた保津川が、狭い峡谷をぬって京都盆地へふき出すところが、ちょうど現在の嵐山渡月橋あたりである。季節によっては氾濫によって流域住民を大いに悩ませた桂川も、喉元ともいべき位置に堰を築き、治水と灌漑の両用に役立つべく水流を統御すれば、以後、流域一帯の開発が急速に進展するのは当然の結果である。

こうして、殖産豪族といわれ、渡来系氏族中の雄族でもある秦氏は、桂川左岸の嵯峨野を本拠とし、それまで京都盆地の中では最も地味豊かな土地であった桂川下流域一帯にまで、勢力を及ぼすことになったのである。

古墳時代後期を迎えると、桂川右岸の丘陵、山麓や嵯峨野に群集墳が点々と出現し、この地の開発が進んだことをうかがわせる。桂川右岸の松室遺跡では、葛野大堰に関連するとみられる人工水路や集落の跡が発見され、これを裏付けている。^{注3} また、6世紀後半以後、天井持ち送り式の巨石積み工法や幅の広い玄室平面形を特徴とする横穴式石室が洛西の地で一般化することも特記すべきことであろう。大枝山古墳群も、この系列に連なるものであり、14号墳出土の朝鮮陶質土器や25号墳出土の銀象嵌鉄刀など、秦氏との関連で注目すべき発見もあった。^{注4}

群の構成と性格について

大枝山古墳群は23基からなる比較的小規模な群集墳だが、このうち9基を発掘調査した。その多くはすでに盗掘を受けており、石室内を掃除して記録にとどめた程度であったが、22号墳や25号墳のように石室内は盗掘を免れ、遺物の遺存状態が良好な例もあった。この両古墳では、いずれも追葬が行われており、開口していた他の古墳の埋葬状態についても推測する手がかりを与えてくれた。^{注5}

今回の調査で、古墳築造に伴う祭祀跡とみられる炭・焼土壙や、石室閉塞後その前面に供えたとみられる土器類など、祭祀の跡と思われる遺構、遺物が確認された。^{注6}最近の群集墳調査で、古墳をめぐる祭祀後の検出例は増加しているが、いずれは検出例の量的な積み重ねによって、祭祀形態やその内容に関する一定の解釈が可能になるであろう。

発掘調査によるいま一つの成果は、古墳の墳丘築造工程を明らかにしたことである。^{注7}この結果、古墳築造の土木技術について、その内容、水準を検討し、古墳築造に伴う労働力の質を考える根拠を与えたことは重要であろう。

この他、大枝山古墳群の場合大小2基を一組とする群構成をとっていることが判明した。^{注8}すなわち、まず大型古墳が出現し、次にやや小型の1基が近接して築造され、2基一組で群中に小支群を形成しているとみられるのである。この小支群の造営主体は、世帯共同体内の有力な家父長層と推定したが、さらに緻密な検討と考察を加えて行く必要があるだろう。

大枝山古墳群の性格について検討する場合、まず先に述べた古墳群成立の歴史的背景と共に、その特殊な立地条件を考慮しなくてはならない。

古墳群は、小畑川の支流である下狩川の谷筋に位置している。下狩川の細流が形成した狭長な平坦部と谷の両斜面へ、取り付くように古墳が築かれている。古墳群の近くには、農耕適地もなく、見通しも極めて限られている。

この、やや特異な立地条件は、古墳群が古山陰道との関連で成立したことを暗示している。京都盆地から丹波を経て山陰へぬける旧山陰街道は、古墳群のある大枝を通過しており、また古墳群のすぐ北を「唐櫃越」と呼ぶ古道が丹波へ通じている。つまり、大枝山古墳群は、丹波方面への交通路と深く関る氏族によって造営されたとみるのが、最も妥当であろう。被葬者の属する集団を秦氏一族とすれば、今後の研究課題として、秦氏の動向を丹波の歴史の展開の中で追う必要がある。^{注9}

保存と修景

保存と修景

桂坂住宅地内のほぼ中央にある大枝山古墳群を、どのような形で保護するかの問題は、施行主の依頼で開発計画と同時に対策協議をスタートさせた。現状観察のため、文化庁記念物課技官が現地を訪れたのは昭和 41 年（1971）のことで、その後現状保存と活用をはかるための発掘、整備修景の工事などを経て、18 年ぶりに報告書刊行の運びとなったのである。この事業は、施行主側の十分な理解もあって、保存、修景にも時間をかけて協議を重ねた結果、遺跡保護の現実的なモデル・ケースになり得るものとなった。

大枝山古墳群は、総数 23 基中の 13 基を古墳公園として保存、活用し、調査後解体した古墳 1 基を公園内の一角に移築復原した。古墳公園の整備を目的とした今回の調査で、特に注意した点は現状変更を極力避け、崩壊した墳丘の修理なども最小限にとどめるよう、心がけたことである。それは、これまでの遺跡保存で、完全復原を目ざすあまりにかえって本来の姿を壊す結果を招いたケースがあり、これを避ける意味もあった。住宅地として完成したとき、古墳公園の自然は桂坂全体の中でも貴重な存在になることであろう。

なお、発掘調査の過程は記録映画「大枝山古墳群」に収録し、教育の場で大いに活用されている。

注 1 第 2 章 2 参照

注 2 『京都の歴史』第 1 巻第 2 章 119 ページ～

注 3 第 2 章 2 の注 6 参照

注 4 第 5 章 3 参照

注 5 第 3 章 2 参照

注 6 第 5 章 1 の (4) 参照

注 7 第 5 章 1 の (1) ～ (3) 参照

注 8 第 5 章 2 参照

注 9 第 5 章 1 の第 22 図参照

付章 横穴式石室平面形態の分析

1 はじめに

京都盆地内の群集墳の研究は、昭和 46 年 (1971) に京都大学考古学研究会が刊行した『嵯峨野の古墳時代』に一つの研究水準が示されている。しかし、その後も開発工事に伴う群集墳の発掘調査が相次ぎ、当研究所が担当・実施した主なものだけでも、右京区常盤東ノ町古墳群 (1976 年)・御堂ヶ池古墳群 (1982 年)・音戸山古墳群 (1983・85 年)、西京区大枝山古墳群 (1980・83 年)、山科区旭山古墳群 (1978 年)、伏見区醍醐古墳群 (1979・84・85 年) 等をあげることができる。この結果、新たに 60 基近い古墳が調査されたことになり、墳丘や内部構造・出土遺物などの面で基礎資料ともいうべき成果を数多く得ている。

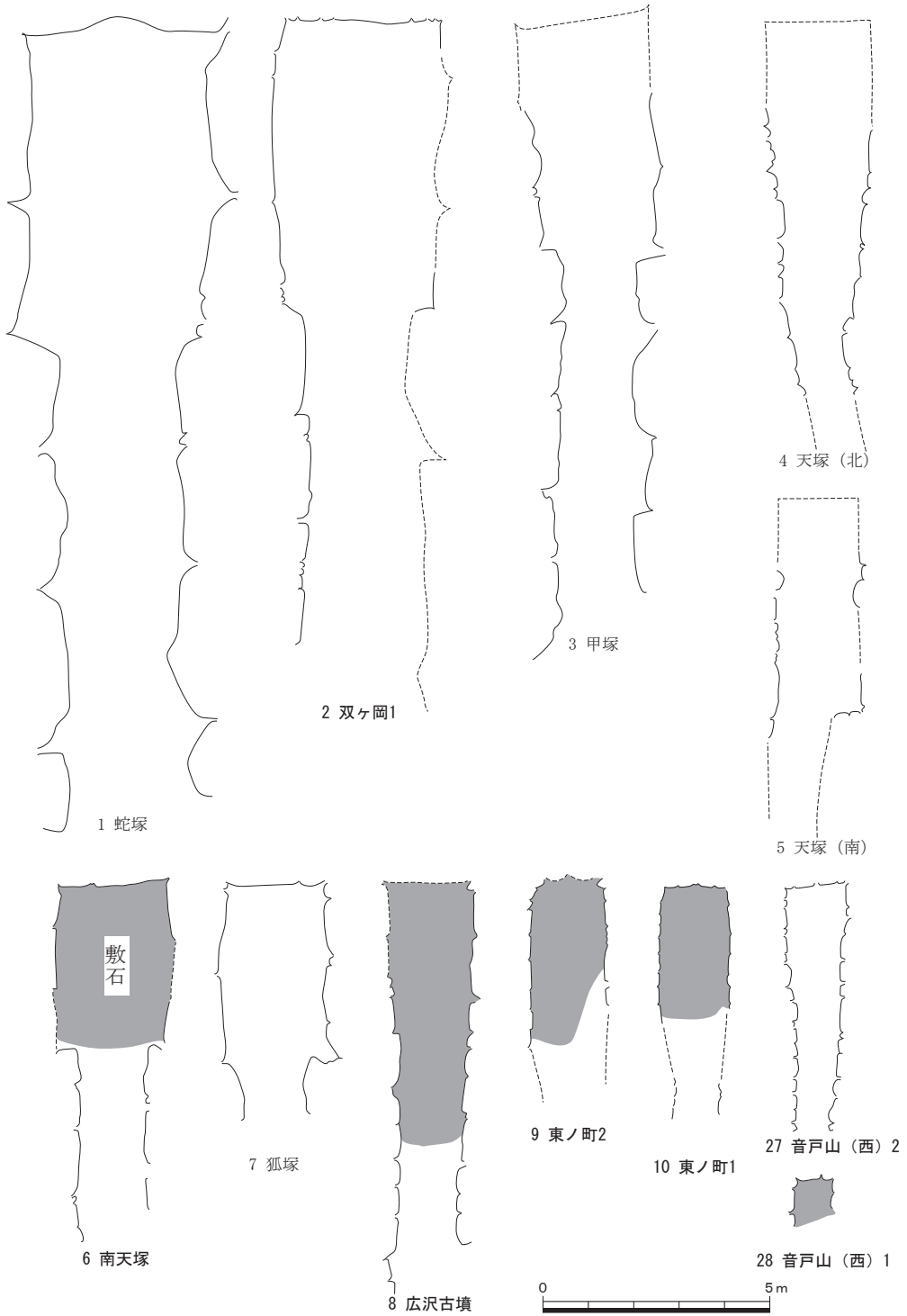
ここでは、大枝山古墳群の発掘調査で明らかとなった石室の形態を巨視的に位置付けるために、現状で石室の判明しているものについて資料を集成し、これに比較・検討を加えて、関連する問題点を明らかにしておきたい。

2 地域の概況

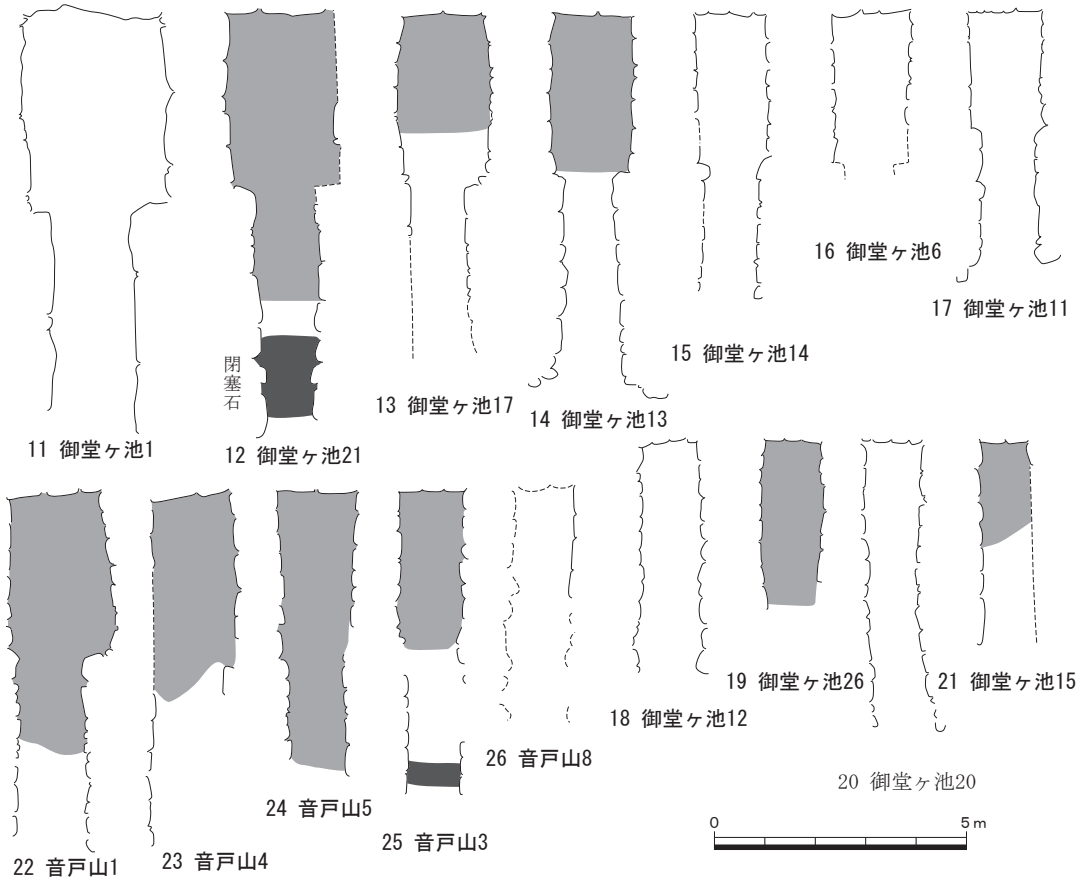
嵯峨野地域 後期の首長墓が連続して営まれていること、群集墳の規模や構成が他地域に比べ大きいことなどに、この地域の特色がある。横穴式石室は、大型古墳の主体部にも採用されている。石室の明らかなものうち、蛇塚古墳 (1)・天塚古墳 (4・5) の 2 基は前方後円墳、双ヶ岡 1 号墳 (2)・円山古墳・甲塚古墳 (3) は大型円墳である。また、この地域は群集墳も数多く築造されている。平野部に立地する大覚寺古墳群の南天塚 (6)・狐塚 (7) は巨石を用いて構築し、玄室の平面形も幅が広い。広沢古墳 (8) と常盤東ノ町古墳群 (9・10) の 2 基は無袖式石室の中でも比較的大きな石室である。

谷間や丘陵斜面に立地するものうち、御堂ヶ池古墳群 (11～21) では両袖・片袖・無袖式石室が認められる。1 号墳の石室規模は古墳群中で卓越しており、先の大覚寺古墳群の 2 基に匹敵する。両袖式石室のものは玄室規模にかなり差がある。音戸山古墳群 (22～28) においても両袖・片袖・無袖式石室の 3 形態がある。ここでは無袖式石室の割合が多い。この古墳群の無袖式石室はいずれも奥壁側が幅広く、開口部が狭まる形態を持つ。3・8 号墳は方墳である。

2 地域の概況



第23図 石室平面図集成1(嵯峨野地域1)(ゴチック体は調査古墳)(1:50)

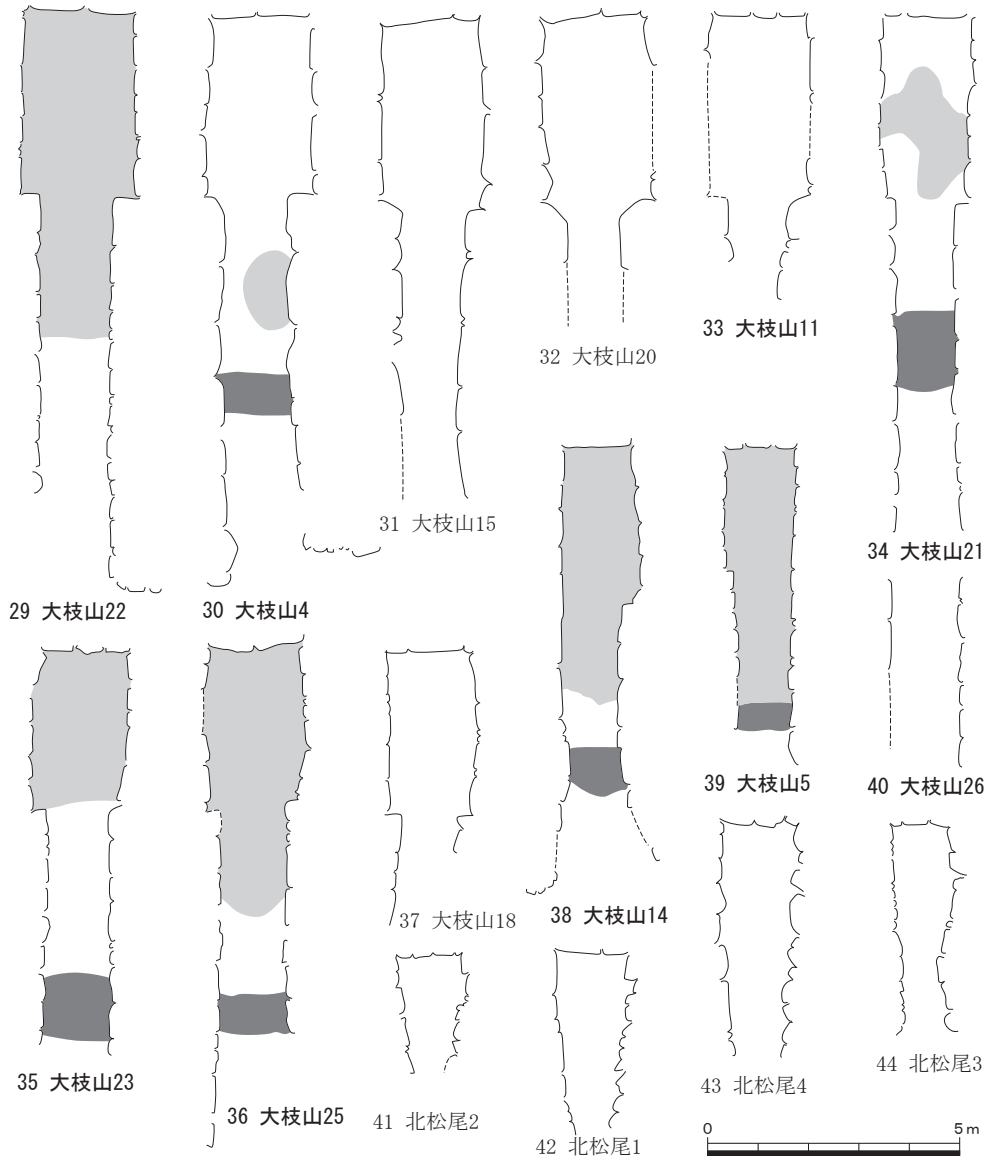


第24図 石室平面図集成2(嵯峨野地域2) (1:150)

桂川右岸地域 この地域も嵯峨野地域と同じく群集墳が多くみられる。ここで扱う古墳の墳形は、物集女車塚古墳（前方後円墳）を除きすべて円墳である。

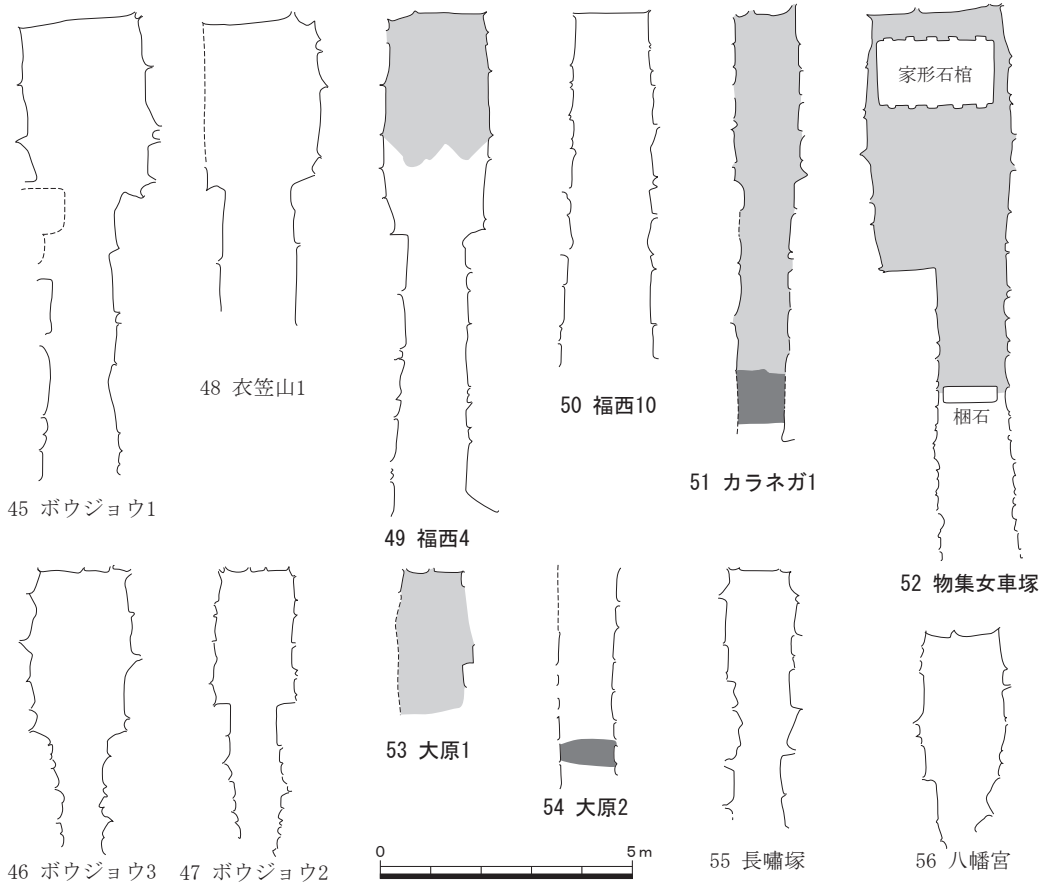
大枝山古墳群（29～40）では、調査成果から石室の形態を、両袖式石室のA類（4・11・15・20・21・22号墳）・B類（18・23・25号墳）、片袖式石室のB'類（14号墳）・C類（5号墳）に分類した。これらはまた、敷石の範囲や閉塞位置においても共通するところが多い。ボウジョウ1号墳（45）・2号墳（47）・3号墳（46）、^{注6}衣笠山1号墳（48）は比較的大型の石材を用い石室が構築されている。特にボウジョウ1号墳は大枝山A類、ボウジョウ3号墳と衣笠山1号墳は大枝山B類の玄室長と一致する。福西古墳群（49・50）では、^{注8}両袖式石室と無袖式石室のものがある。両袖式石室は細長い玄室で、無袖式石室は開口部が広

2 地域の概況



第25図 石室平面図集成3(桂川右岸地域1) (1:150)

がり、比較的大型である点に特徴がある。北松尾古墳群^{注9}(41～44)の4基は、いずれも小型の無袖式石室である。物集女車塚古墳^{注10}(52)の石室は、片袖式石室である。石室は、玄室と羨道が明確に区分されることや、排水溝、羨道の柵石の存在など、通常の横穴式石室に先行する形態を有する。北松尾古墳群の4基と、長嘯塚古墳(55)・八幡宮古墳(56)の



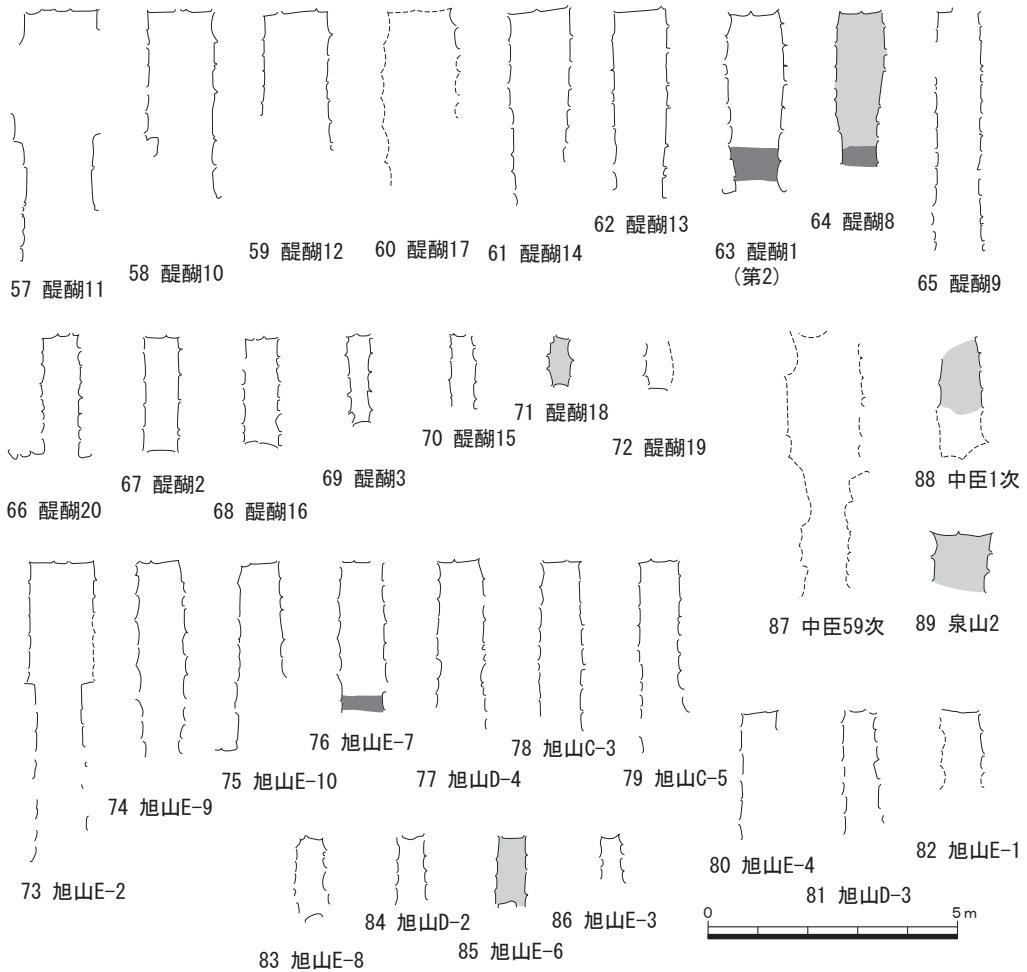
第26図 石室平面図集成4(桂川右岸地域2) (1:150)

石室は、埋没状態で計測したものである。

伏見・山科地域 小型の石室が多い点に、この地域の特徴がある。醍醐古墳群^{注11}(57～72)では両袖・片袖・無袖式石室の他に小石室が検出されている。無袖式石室が最も多いが、規模や形態にはかなりの差がある。1号墳(耳塚古墳)の第2石室(63)は、1号墳の墳丘上に後に築かれた石室である。小石室の中には、最小の無袖式石室と同規模のものがある。両袖・片袖式石室のものは共に玄室長2.5m前後で、8号墳の閉塞もこの位置にある。墳形は10・11・12・17号墳が円墳、3・8・9・13・14・20号墳が方墳とみられる。

^{注12}旭山古墳群(73～86)では両袖式石室の1基を除くと、すべて無袖式石室と小石室で構成されている。醍醐古墳群と比べると、石室の規模は平均的に小さく、小石室も小型のも

3 石室の検討



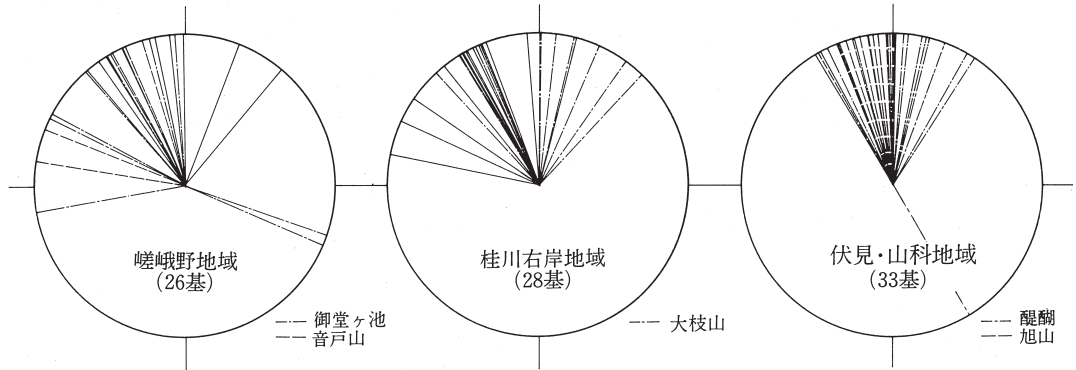
第27図 石室平面図集成5(伏見・山科地域1)(1:150)

のに限られる。墳形はすべて方墳である。

中臣十三塚古墳群では両袖式石室^{注13}(87)と小石室^{注14}(88)が知られる。両袖式石室は基底石の抜き取り穴から推定したものである。小石室は規模の大きい部類に属する。両方とも墳丘は消滅していたが、円形にめぐる周溝を検出している。

3 石室の検討

従来から群集墳は、円墳で横穴式石室を持ち、埋葬形態としては追葬を行うのが一般例



第 28 図 石室の主軸方向図（真北）

とされてきた。しかし、終末期に属する古墳群の調査が進展した結果、より複雑な実態が明らかになりつつある。

墳形と石室形態 墳形に関していえば、ここで取り扱った群集墳の多くは円墳であるが、旭山古墳群の発掘調査によって方墳の存在が明らかとなり、音戸山古墳群・醍醐古墳群の調査でもこれを裏付ける成果を得ている。終末期古墳群に特徴的なこれら方墳は、墳丘が低く、規模は一辺 10m 前後のものが多い。墳丘基底面は狭いが、周溝が背後の斜面をコ字型にめぐるため、墳丘は相対的に大きくみえる。

主体部の石室は、旭山 E-2 号墳（両袖式石室）以外すべて小型化（石室幅 1.2m 以下）した無袖式石室か、小石室である。

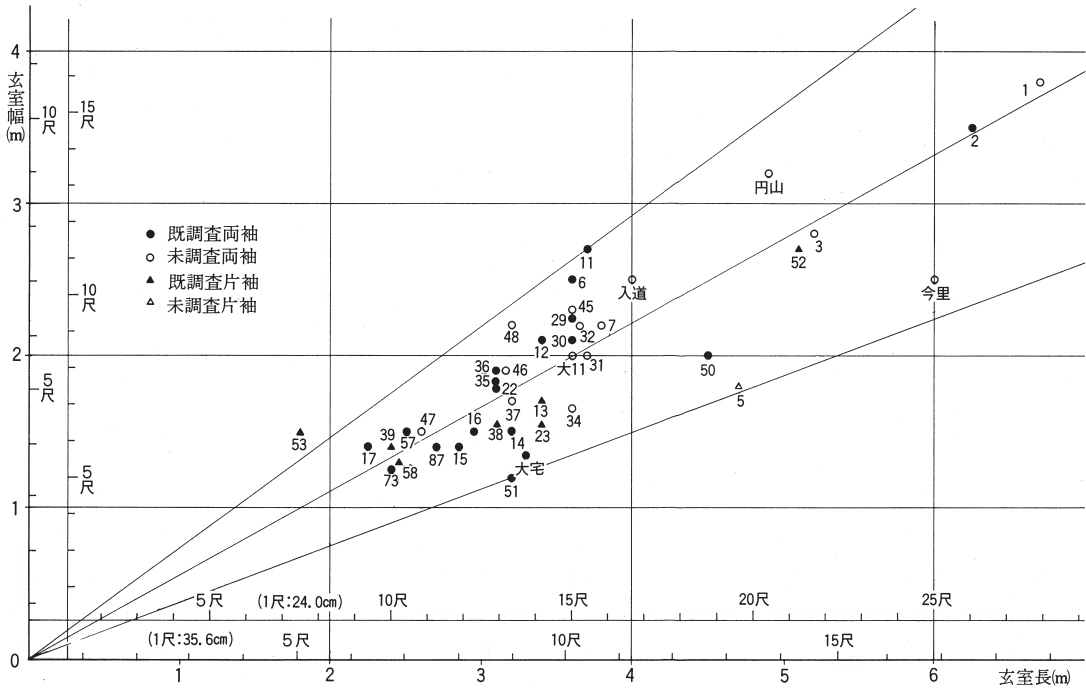
石室の主軸方向 第 28 図は地域ごとに石室の主軸方向を集めたものである。主軸の方向は、大部分が北・北西・北東の方向に集中する。また西に振れるものが約 7 割を占める。

3 地域では主軸方向のまとまり具合が異なっている。伏見・山科地域では全体が 60° の範囲内におさまるのに対して、嵯峨野地域では個々の方向差が著しい。桂川右岸地域は両者の中間的様相を示す。

石室主軸方向のばらつきは、各古墳群の内部でもみられる。最もばらつきの多いのは御堂ヶ池古墳群で、ここでは谷を挟む丘陵の両側に古墳群が立地したことが原因といえる。大枝山古墳群もばらつきが多いが、これは開口方向が比較的自由に選定できた谷間の平坦地に立地したことに原因がある。醍醐古墳群では急な斜面に対し斜め方向に主軸を設定した結果、東に振れるものが多い。逆に旭山古墳群ではすべて西に振れ、30° の範囲内にすべてがおさまる。この古墳群では墳丘や石室の規模も比較的類似するので、古墳の築造がかなり画一的であったことを示すものと思われる。

3 石室の検討

第 15 表 玄室の規模比較表



玄室規模の比較 玄室規模を比較するために第 15 表を作成した。これによると、規模を表すドットは、玄室比（玄室幅 / 玄室長）0.55 を中心に分布がみられる。玄室比の最大は 0.73、最小は 0.37 である。玄室比の高いものには、御堂ヶ池 1 号墳 (0.73)・南天塚古墳 (0.69)・衣笠山 1 号墳 (0.69)・円山古墳 (0.65) などがある。これらは嵯峨野地域を中心にみられる巨石積みの石室で、逆に値の小さいものは、カラネガ 1 号墳 (0.37)・福西 4 号墳 (0.44)・大枝山 21 号墳 (0.47) など、いずれも桂川右岸地域に分布する古墳の石室である。また、中心となる 0.55 の線上では、甲塚古墳・双ヶ岡 1 号墳・蛇塚古墳の大型石室が並んでいる。

玄室規模は大半が、玄室長 2～4m、玄室幅 1～3m の枠内におさまる。玄室長は、2m 台では顕著なまとまりはみられないが、3m 台では 3.1m・3.4m・3.6m 前後にドットの集中する箇所がみられる。

玄室長 3.1m の石室は、大枝山古墳群の B 類を始めとし各古墳群中の中・小規模の古墳に認められるものである。これに対し玄室長 3.6m の石室は巨石積みの大型石室が多く、大枝山古墳群の A 類石室を代表に各古墳群中の中心的な古墳に用いられている。

さらに注目すべきことは、ドットの集中する3箇所古墳がいずれも桂川の両岸地域の古墳からなる点である。このことは、玄室の規模が比較的広い範囲で共通していたことを示すものとして重要である。

基準尺度について 横穴式石室の玄室規模に一定のまとまりが認められるとするなら、当然ここでは石室の構築に際して一定の企画が存在し、これを基準に石室が造られたと考えるのが妥当となる。

古墳時代に用いられた尺度については、5世紀頃までは1尺24cm前後の晋尺が用いられ、その後1尺35cm前後の高麗尺が用いられたと想定されてきた。そこで玄室長3.1m、3.4m、3.6mが当時の基準尺の完数値であったとすると、1尺24cmの尺度では、13尺(3.12m)、14尺(3.36m)、15尺(3.60m)となって完数が得やすく、また玄室長2.4m前後のものも10尺の完数が得られる。これに対し、1尺35cm強の尺度では、9尺(3.20m)、10尺(3.56m)となって、先の例に比べると適合性は薄くなる。ただし、以上の事項は玄室の長さが基準尺の完数値で決められたことを前提としているので、目の小さい尺度ほど適合性が高くなるのは当然である。さらに、1尺24cmも1尺35cm強も、共に12cmを最大公約数とすることから、どちらに合致しているのか判断しにくい部分も存在する。この他、完数値に合致しない例が存在することや玄室幅ではばらつきが多く完数値が得られないなどの問題点も残されている。

石室の設計企画と施工時の誤差 横穴式石室の形態を詳細に検討すると、細部にはかなりの差異があることに気付く。例えば、石室設計の最も基本というべき奥壁では、明らかに西側が南に出るもの(音戸山1・4、大枝山5・15、ボウジョウ1、醍醐14)と、東側が南に出るもの(大枝山22、北松尾1)がみられるし、玄室の長さを決定する上で重要な袖石の位置をみても、西壁側が短いもの(双ヶ岡1、甲塚、音戸山1、大枝山15)と、東壁側が短いもの(御堂ヶ池1・14、大枝山23、衣笠山1、福西4)などがある。

これとは別に、玄室の平面形には、整った長方形を呈するもの(御堂ヶ池6・14、大枝山4・22、旭山E-2)、両壁とも胴張りを呈するもの(御堂ヶ池17号墳、南天塚、大枝山23・25、福西4号墳)、東壁側のみ胴張りのもの(音戸山1、大枝山18)、西壁のみ胴張りのもの(双ヶ岡1、狐塚、大枝山21)などがあり、さらに無袖式石室においても、開口部が狭くなるもの(広沢古墳、常盤東ノ町1、音戸山3・5・西支群2、北松尾1～4、醍醐14)、反対に開口部が広がるもの(福西10、旭山E-10)、主軸の歪むもの(御堂ヶ池20)などがある。

4 石室の変遷と地域の動向

これらを整理すると、例えば先に述べた奥壁や袖石位置のずれといったものは、石室の機能に直接影響がないことから、石室の築造段階で生じた施工上の誤差とみることができるといえる。これに対し、玄室の平面形や無袖式石室の形態差は単に施工上の誤差ではなく、石室設計における企画上の差と把握することができる。これらの施工・企画上の差異は、横穴式石室を系統的に分類・整理する際の重要な指標となるものである。ただし、これを持ってしても当地域の横穴式石室は、特色といえるものが明確でない。これらの抽出は今後の重要な課題といえる。

4 石室の変遷と地域の動向

ここでは横穴式石室の変遷について見通しを述べると共に地域の動向についてもみておこう。

第1段階 ここで扱った横穴式石室で最も古い形態を持つものは、向日市物集女車塚古墳の石室である。この古墳の石室は片袖式で、玄室と羨道の幅が2:1の割合で造られている。京都市内では今のところ同様の例はないが、強いていうなら同じ片袖式石室の天塚古墳南石室^{補注}をあげる程度である。

第2段階 嵯峨野地域の南天塚古墳・入道塚古墳・御堂ヶ池1号墳などの石室は、巨石を用いて構築し、石室規模も大きい。玄室は幅が広く、玄室と羨道の差も明瞭で、この段階を代表するものといえる。桂川右岸地域では、大枝山古墳群A類石室に代表される巨石積みの石室が、嵯峨野地域の大型石室の影響下で成立したものとみられる。この段階から、桂川の両岸地域では群集墳が活発に築造され始める。

第3段階 横穴式石室の小形化が進み、両袖・片袖式石室は玄室と羨道の区別が次第に不明瞭になる。大枝山古墳群B類石室とした玄室長3.1m前後の石室などがこの段階を代表するものとなる。大枝山古墳群はこの段階で築造がほぼ終了しており、ボウジョウ・衣笠山古墳群なども同様の経緯であったと推定されるが、群集墳の多くはこの段階に造営の盛期があったとみられる。

第4段階 両袖式石室では小型化したものがわずかに残り、無袖式石室が主流となる。無袖式石室も小形化が進行し、新たに小石室が出現する。これは埋葬形態が追葬のない単次葬に変化したことを示すものといえる。御堂ヶ池古墳群では一部この段階まで存続し、音戸山古墳群ではこの段階に築造の盛期がある。醍醐古墳群・旭山古墳群はこの段階から築造が開始される。

以上の4段階に出土遺物等から実年代を与えれば、第1段階が6世紀中葉頃、第2段階が6世紀後半～末頃、第3段階が7世紀前半頃で、第4段階の終わりが7世紀中葉頃と考えられる。

最後に以上の石室変遷を手がかりに、各地域の動向をみておく。嵯峨野地域では第2段階に入ると大型石室が相次いで築かれ、群集墳の形成期に入る。桂川右岸地域もこの頃から群集墳の形成が始まるが、石室形態からみると嵯峨野地域の影響を受けている。伏見・山科地域ではこの段階の群集墳は明らかではない。

第3段階に入り桂川の両岸地域では活発に古墳が築かれ、群集墳の盛期を迎える。

第4段階に入ると桂川の両岸地域の群集墳は大半が築造を終えるが、伏見・山科地域では醍醐・旭山両古墳群に代表される終末期の古墳群が造られる。

このように群集墳の形成は、地域間で多少のずれを持って進められる。最も早く群集墳が形成されるのは嵯峨野地域であるが、これは5世紀後半以降から連続して築造された大型古墳の存在と密接に関係するものといえる。逆に山科盆地では7世紀に入り活発に古墳が造られるようになる。こうした地域間格差の存在は、その地域の持つ生産力の高さを前提としたものでありながらも、その地域の持つ政治的な位置関係の表れが背後にあったとみるべきであろう。

桂川右岸地域は、石室形態からみると南半部に比べ北半部で嵯峨野地域の強い影響がみられる。このことは両地域の被葬者を復原する上で極めて重要な点であるが、こうした内容が明らかになったのも、今回の発掘調査の成果といえるだろう。

注1 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』

京都府教育委員会) 1976

注2 樋口隆康「京都嵯峨広沢古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委

員会) 1961

注3 鈴木廣司他『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第1冊 財団法人京

都市埋蔵文化財研究所 1977

注4 「御堂ヶ池群集墳発掘調査報告」(『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会) 1971

上原真人『御堂ヶ池群集墳第20号墳発掘調査報告』六勝寺研究会 1973

北田栄造・丸川義広『御堂ヶ池第1号墳発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京

都市埋蔵文化財研究所 1982

付 章 注

- 北田栄造「御堂ヶ池 21・26 号墳」（『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所） 1985
- 注 5 北田栄造・丸川義広『音戸山古墳群発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 北田栄造・丸川義広『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985
- 注 6 京都大学考古学研究会編『嵯峨野の古墳時代』 1971
- 注 7 注 6 に同じ。
- 注 8 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査 - 福西古墳群の発掘調査報告 -』京都市都市開発局洛西開発室 1970
- 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査 - 発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告 -』京都市都市開発局洛西開発室 1972
- 注 9 注 6 に同じ
- 注10 秋山浩三・山中 章他『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書 第 23 集 向日市教育委員会 1988 年
- 注11 木下保明『醍醐古墳群発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985
- 北田栄造『醍醐 1 号墳発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986
- 注12 木下保明他『旭山古墳群発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第 5 冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981
- 注13 菅田 薫・辻 純一「59 次調査」（『中臣遺跡発掘調査概報』京都市文化観光局 財団法人京都市埋蔵文化財研究所） 1984
- 注14 『中臣遺跡』京都府立洛東高等学校郷土研究クラブ 1971
- 注15 墳丘が目立たないほど低平であることは、主体部の石室が天井石を持たない構造であったと解釈される。
- 注16 基準尺については、この他に 1 尺 30cm 弱の唐尺も考慮する必要があるだろう。この場合だと、8 尺 (2.4m)、10 尺 (3.0m)、11 尺 (3.3m)、12 尺 (3.6m) に適合性のあることが指摘できる。しかし、6 世紀後半の群集墳造営段階に使用されていたとなると問題も多い。
- 注17 玄室長に比べ玄室幅の寸法にばらつきが大きいことは、玄室幅が、用いられた奥壁石材

の大きさによって決められる部分が多かったためと考えられる。

注18 胴張り形態は、構造上の理由とみるより、玄室空間をできるだけ広く使おうとする意識から生じたものと考えられる。

注19 第1段階に先行する横穴式石室が、近年丹波地方でみつかっている。亀岡市医王谷3号墳と園部町天神山1・2号墳がこの例で、3例とも正方形に近い玄室に短い羨道が取り付く。



本山神明1号墳の
石室平面図(1:150)

引原茂治・山口文吾・田中暢一「医王谷3号墳・医王谷焼窯跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第7冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983『天神山古墳群現地説明会資料』園部町教育委員会 1985

なお表には加えなかったが、京都市内にも同様の石室例がある。洛北岩倉に属する本山神明1号墳がそれで、玄室は長さ1.6m、幅は3.3mを測る。京都大学考古学研究会編『第38とれんち』1986

注20 御堂ヶ池1号墳の石室も、玄室と羨道の幅比がほぼ2:1に造られており(注4の『御堂ヶ池1号墳発掘調査概報』1982 参照)、築造に際しては物集女車塚古墳の石室を参考にして、これを両袖式にした可能性がある。

補注 脱稿後、新たに石室の資料が3例増加したので付記しておく(1989年6月現在)。

一つは仁和寺院家(大聖院)跡の調査で検出した片袖式の石室である。玄室長さ4.7m、幅1.8mを有し、敷石・排水溝を持つ。6世紀中頃の築造と推定され、横穴式石室の普及を考える際に重要な資料となった。(平田 泰「嵯峨野地域の遺跡調査」『第10回調査成果交流会資料』1989)。

二つ目は中臣遺跡の第70次調査で検出された中臣遺跡十三塚古墳群の1基で、玄室は片袖式で長さ3.5m、幅1.7mを有する。(1989年2～5月当研究所調査、未報告)。

三つ目として大原野南春日町の水田下で検出した両袖式の石室がある。玄室長さ3.0m、幅1.6mを有し、この地区の石室形態を知る重要な調査となった(1988年11月～1989年3月当研究所調査、未報告)。

付 章 一 覧 表

第 16 表 横穴式石室一覧表

単位は m、ゴシック体は調査古墳、() は現状値、備考は『史料京都の歴史』第 2 巻考古の番号。

地域	番号	古 墳 名	形態	全長	支室長 (a)	支室幅 (b)	支室高	羨道長 (c)	羨道幅 (d)	羨道高	b/a	a/c	d/b	主軸方向 (真北)	備考
嵯 峨 野 地 域	1	蛇塚古墳	両袖	(18.0)	6.7	3.8	5.2	(11.3)	2.6	3.5	0.56	(0.59)	0.68	N41°W	148
	2	双ヶ岡 1 号墳	両袖	(14.3)	6.25	3.5	5.0	(8.05)	2.4	2.3	0.56	(0.77)	0.68	N40°E	139
		円山古墳	両袖	14.5	4.9	3.2	4.4	9.6	1.9	(2.4)	0.65	0.51	0.59		126
	3	甲塚古墳	両袖	14.2	5.2	2.8	(3.5)	9.0	1.6	(1.8)	0.54	0.58	0.57	N1°W	142
		入道塚古墳	両袖	11.2	4.0	2.5		7.2	1.6		0.62	0.55	0.62		127
	4	天塚古墳 (北)	無袖	(8.3)		2.2	(2.2)		1.0					N96°E	152
	5	天塚古墳 (南)	片袖	7.7	4.7	1.8	2.1	3.0	1.25	1.55	0.38	1.57	0.69	N21°E	
	6	南天塚古墳	両袖	(8.35)	3.6	2.5	(2.35)	4.75	1.4	(1.3)	0.69	(0.78)	0.56	N12°W	128
	7	狐塚古墳	両袖	(12.8)	3.8	2.2	(2.2)	(9.0)	1.35	(1.3)	0.58	(0.42)	0.61	N32°W	129
	8	広沢古墳	無袖?	12.0		2.3	2.1		1.9	1.3				N25°W	132
	9	常盤東ノ町 2 号墳	無袖	8.0		1.7	(0.45)		0.4					N35°W	143
	10	常盤東ノ町 1 号墳	無袖	7.6		1.5	(0.6)		1.9					N6°W	
	11	御堂ヶ池 1 号墳	両袖	(8.3)	3.7	2.7	3.7	(4.6)	1.6	2.4	0.73	(0.80)	0.59	N41°W	118
	12	御堂ヶ池 21 号墳	両袖	8.35	3.4	2.1	0.9	4.95	1.1	0.65	0.62	0.67	0.52	N113°E	
	13	御堂ヶ池 17 号墳	片袖	(6.8)	3.4	1.7	(1.4)	(3.4)	1.05	(0.85)	0.50	(1.0)	0.62	N14°W	
	14	御堂ヶ池 13 号墳	両袖	7.2	3.2	1.5	(1.3)	4.0	1.0	(1.4)	0.47	0.8	0.67	N62°W	
	15	御堂ヶ池 14 号墳	両袖	(5.8)	2.85	1.4	(2.2)	(2.95)	1.0	(1.5)	0.49	(0.97)	0.71	N32°W	
	16	御堂ヶ池 6 号墳	両袖	(3.2)	2.95	1.5	(1.8)				0.51			N25°W	
	17	御堂ヶ池 11 号墳	両袖	5.0	2.25	1.4	(1.0)	2.75	1.0	(0.9)	0.62	0.81	0.71		
	18	御堂ヶ池 12 号墳	無袖	4.7		1.2	(1.4)							N64°W	
	19	御堂ヶ池 26 号墳	無袖	3.35		1.1	(1.3)							N100°W	
	20	御堂ヶ池 20 号墳	無袖	5.8		1.0	(1.3)							N109°E	
	21	御堂ヶ池 15 号墳	無袖	4.0		0.9	(0.4)							N4°W	
	22	音戸山 1 号墳	両袖	(7.2)	3.1	1.8	(1.4)	4.1	1.2	(1.2)	0.56	0.76	0.67	N81°W	122
	23	音戸山 4 号墳	片袖	(7.5)	3.4	1.55	(0.4)	4.1	1.35	(0.25)	0.46	0.83	0.87	N29°W	
	24	音戸山 5 号墳	無袖	(5.6)		1.4	(1.1)		1.0					N30°W	
	25	音戸山 3 号墳	無袖	(6.1)		1.25	(0.7)		1.05					N24°W	
	26	音戸山 8 号墳	無袖	5.0		1.15	(0.35)							N17°W	
27	音戸山西支群 2 号墳	無袖	5.5		1.3	1.7		0.7					N69°W		
28	音戸山西支群 1 号墳	無袖?	(1.1)		0.8	0.55									

付 章 横穴式石室平面携帯の分析

地域	番号	古墳名	形態	全長	玄室長 (a)	玄室幅 (b)	玄室高	羨道長 (c)	羨道幅 (d)	羨道高	b/a	a/c	d/b	主軸方向 (真北)	備考	
桂 川 右 岸 地 域	29	大枝山 22 号墳	両袖	11.1	3.6	2.25	2.3	7.5	1.4	1.9	0.62	0.48	0.62	N6°E	169	
	30	大枝山 4 号墳	両袖	11.25	3.6	2.1	3.15	7.65	1.45	2.15	0.58	0.47	0.69	N0°15'W		
	31	大枝山 15 号墳	両袖	(9.7)	3.7	2.0	(3.0)	(6.0)	1.2	(2.1)	0.54	(0.62)	0.60	N35°E		
	32	大枝山 20 号墳	両袖	(6.15)	3.65	2.2	(2.6)	(2.5)	(1.0)	(1.6)	0.60		0.45	N24°W		
	33	大枝山 11 号墳	両袖	(5.6)	(3.6)	(2.0)	(1.0)	(2.0)	(1.1)	(0.5)	(0.55)		(0.55)	N11°E		
	34	大枝山 21 号墳	両袖	10.15	3.6	1.7	2.6	6.55	1.1	2.0	0.47	(0.55)	0.65	N24°W		
	35	大枝山 23 号墳	両袖	(8.5)	3.1	1.8	(2.15)	5.4	1.25	(1.15)	0.58	0.57	0.69	N13°E		
	36	大枝山 25 号墳	両袖	9.9	3.1	2.0	(0.8)	6.8	1.3	(2.1)	0.65	0.46	0.65	N43°W		
	37	大枝山 18 号墳	両袖	(5.8)	3.2	1.7	(2.2)	(2.6)	1.2	(1.35)	0.53		0.70	N32°W		
	38	大枝山 14 号墳	片袖	8.65	3.1	1.55	2.3	5.55	1.05	1.8	0.50	0.56	0.68	N23°E		
	39	大枝山 5 号墳	片袖	6.4	2.4	1.4	(1.5)	4.0	1.0	(1.3)	0.58	0.60	0.71	N8°E		
	40	大枝山 26 号墳	無袖?	(3.35)		1.35	(0.75)							N4°E		
	41	北松尾 2 号墳	無袖	(2.35)		1.25	(1.5)							N23°W	159	
	42	北松尾 1 号墳	無袖	(3.9)		1.4	(2.0)							N39°W		
	43	北松尾 4 号墳	無袖	(4.6)		1.35	(1.85)							N21°W		
	44	北松尾 3 号墳	無袖	(4.3)		1.1	(1.6)							N26°W		
	45	ボウジョウ 1 号墳	両袖	(10.8)	3.6	2.3	3.7	(7.2)	1.15	2.3	0.63	(0.50)	0.50	N56°W	160	
	46	ボウジョウ 3 号墳	両袖	(6.25)	3.15	1.9	(2.6)	(3.1)	(1.1)	(1.5)	0.60		(0.58)	N29°W		
	47	ボウジョウ 2 号墳	両袖	(5.7)	2.6	1.5	(2.2)	(3.1)	0.9	(1.5)	0.58	0.83	0.60	N66°W		
	48	衣笠山 1 号墳	両袖	(6.0)	3.2	2.2	(2.2)		1.4	(1.8)	0.69		0.63	N89°E	164	
	49	福西 4 号墳	両袖	(10.2)	4.5	2.0	(2.2)	(5.7)	1.2	(2.3)	0.44	(0.79)	0.60	N5°W		
	50	福西 10 号墳	無袖	(6.9)		1.45	(1.1)		1.65					N30°W	177	
	51	カラネガ 1 号墳	両袖	8.6	3.2	1.2	2.1	5.4	1.0	1.5	0.37	0.59	0.83	N79°W		
	52	物集女車塚古墳	片袖	(11.8)	5.1	2.7	3.0	6.7	1.4	1.6	0.53	0.76	0.52	N30°W		
	53	大原 1 号墳	片袖	(3.0)	1.8	1.5	(0.55)	(1.2)	1.35	(0.3)	0.83	0.90		N23°W		
	54	大原 2 号墳	無袖	(4.2)		1.1	(0.6)							N29°E		
	55	長嘯塚古墳	両袖	(5.0)	(3.55)	(1.35)	(1.7)	(1.45)	(0.95)	(0.7)	0.38		0.70	N14°E		
	56	八幡宮古墳	片袖?	(4.1)	(2.85)	(1.6)	(1.4)	(1.25)	(0.95)	(0.9)	0.56		0.59	N32°W		
			今里大塚古墳	両袖	(10)	6	2.5	(3)				0.41			南東	

付 章 一 覽 表

地域	番号	古 墳 名	形態	全長	玄室長 (a)	玄室幅 (b)	玄室高	羨道長 (c)	羨道幅 (d)	羨道高	b/a	a/c	d/b	主軸方向 (真北)	備考
伏 見 ・ 山 科 地 域		醍醐 1 号墳 (第 1)	両袖	(7.5)	(3.7)	1.7	(0.3)	(3.8)		(0.95)	0.45			N20°E	
	57	醍醐 11 号墳	両袖	(5.0)	2.5	1.5	(0.5)	(2.5)	1.3	(0.7)	0.6	(1.0)	0.82	N30°E	240
	58	醍醐 10 号墳	片袖	(3.7)	2.45	1.3	(0.75)	(1.25)	1.07	(0.55)	0.53		0.82	N13°E	
	59	醍醐 12 号墳	無袖	(2.7)		1.3	(0.85)							N1°W	
	60	醍醐 17 号墳	無袖	(3.5)		1.4	(0.35)							N1°E	
	61	醍醐 14 号墳	無袖	(3.9)		1.2	(1.0)		1.0					N14°E	
	62	醍醐 13 号墳	無袖	(3.75)		1.0	(1.2)							N15°W	
	63	醍醐 1 号墳 (第 2)	無袖	3.5		1.1	1.6							N149°E	
	64	醍醐 8 号墳	無袖	(3.5)		0.9	(1.2)		0.7					N33°E	
	65	醍醐 9 号墳	無袖	(4.9)		0.8	(1.0)		0.9					N6°E	
	66	醍醐 20 号墳	無袖	2.4		0.7	(0.7)							N1°E	
	67	醍醐 2 号墳	小石室	2.2		0.65	(0.7)							N1°E	
	68	醍醐 16 号墳	小石室	2.05		0.4	(0.7)							N11°E	
	69	醍醐 3 号墳	小石室	1.7		0.5	(0.6)							N2°W	
	70	醍醐 15 号墳	小石室	(1.1)		0.3	(0.3)							N26°W	
	71	醍醐 18 号墳	小石室	0.95		(0.35)	(0.5)							N4°E	
	72	醍醐 19 号墳	小石室	(0.6)		1.25	(0.4)							(N38°E)	
	73	旭山 E-2 号墳	両袖	(6.0)	2.4	0.8	(0.4)							N22°W	225
	74	旭山 E-9 号墳	無袖	(3.9)		0.8	(0.85)		0.6					0°	
	75	旭山 E-10 号墳	無袖	3.6		0.8	0.95							N6°W	
	76	旭山 E-7 号墳	無袖	2.9		0.7	(0.65)		0.85					N3°W	
	77	旭山 D-4 号墳	無袖	(3.45)		0.7	(0.9)		0.95					N13°W	
	78	旭山 C-3 号墳	無袖	(3.4)		0.7	(0.7)							N22°W	
	79	旭山 C-5 号墳	無袖	(3.8)		0.75	(0.9)							N10°W	
	80	旭山 E-4 号墳	無袖	(2.7)		0.7	(0.75)							N22°W	
	81	旭山 D-3 号墳	無袖	(2.4)		0.65	(0.6)							N30°W	
	82	旭山 E-1 号墳	無袖	(2.1)		0.75	(0.25)							N19°W	
	83	旭山 E-8 号墳	小石室	1.55		0.5	(0.4)							N1°W	
	84	旭山 D-2 号墳	小石室	1.55		0.55	(0.6)							N8°W	
85	旭山 E-6 号墳	小石室	1.28		0.55	(0.4)							N10°W		
86	旭山 E-3 号墳	小石室	0.9		0.4	(0.3)							N16°W		
87	中臣 59 次古墳	両袖	(5.1)	2.7	1.4		(2.4)	0.9		0.52	(1.12)	0.64	N31°W	230	
88	中臣 1 次古墳	小石室	(2.4)		0.75	(0.2)							N29°W		
		大宅古墳	両袖	(4.36)	3.3	1.35		(1.06)	0.9		0.41		0.67		233
89		泉山 2 号墳	無袖?	(1.1)		0.8									217